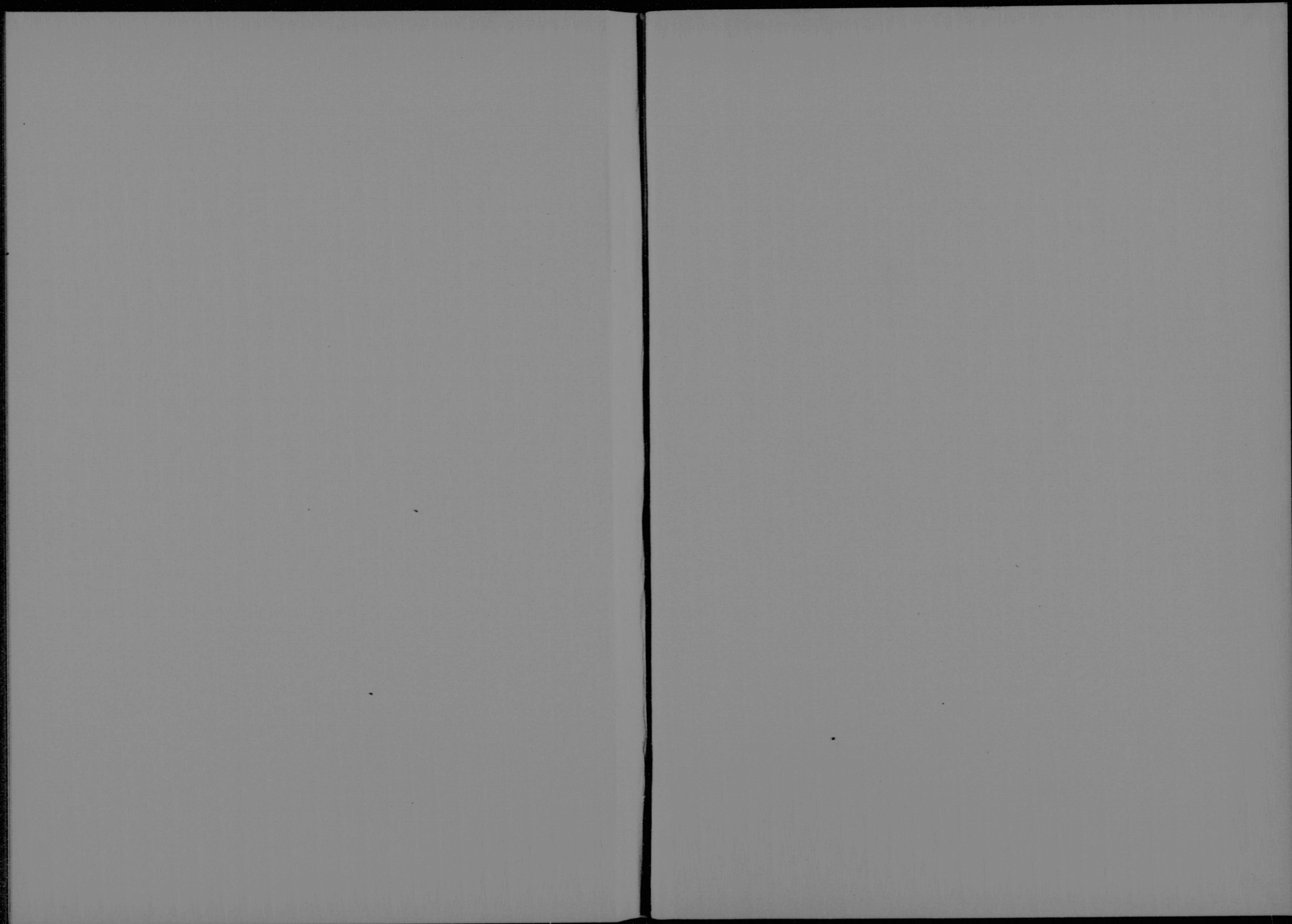
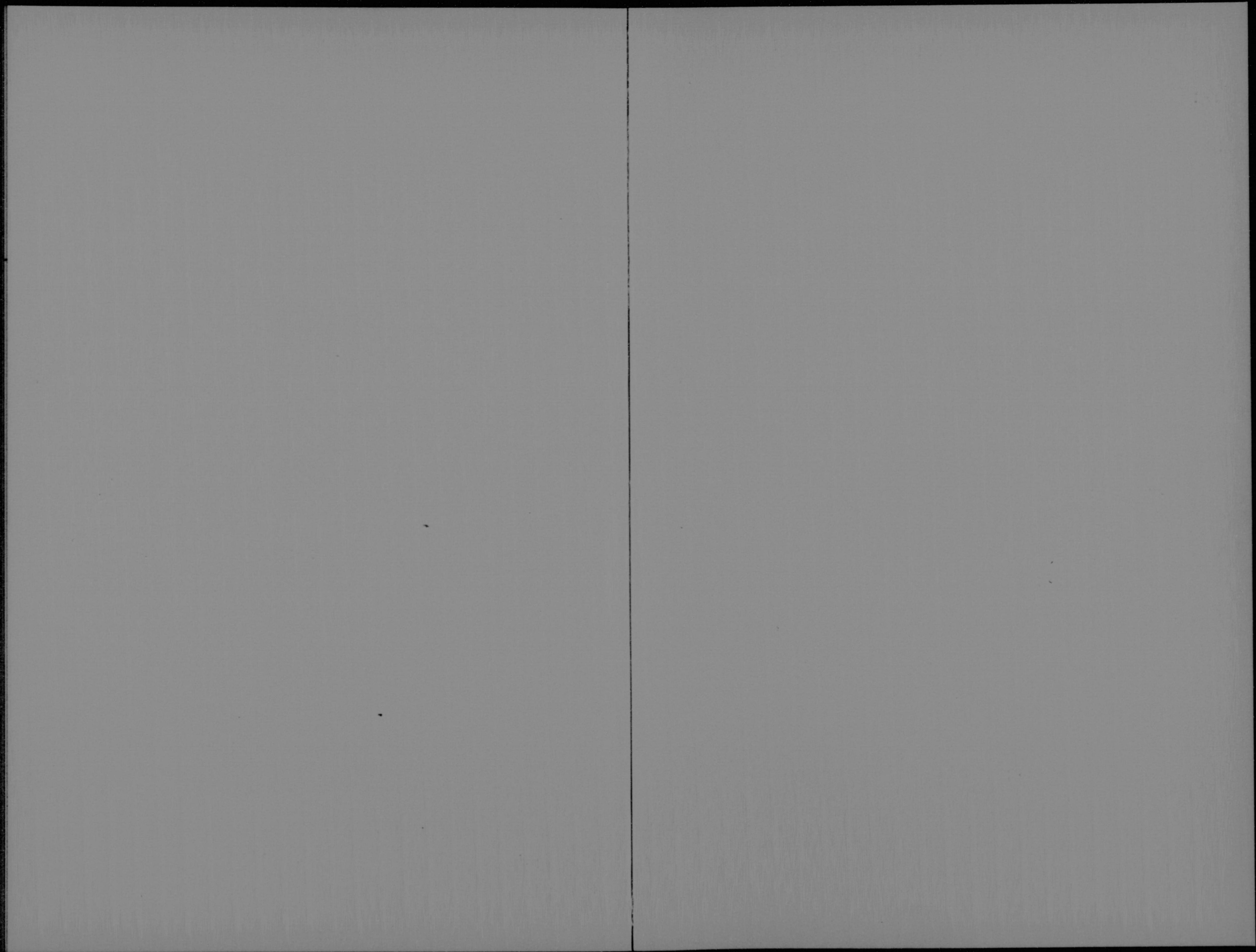


380.8

Y529y





21 L 90

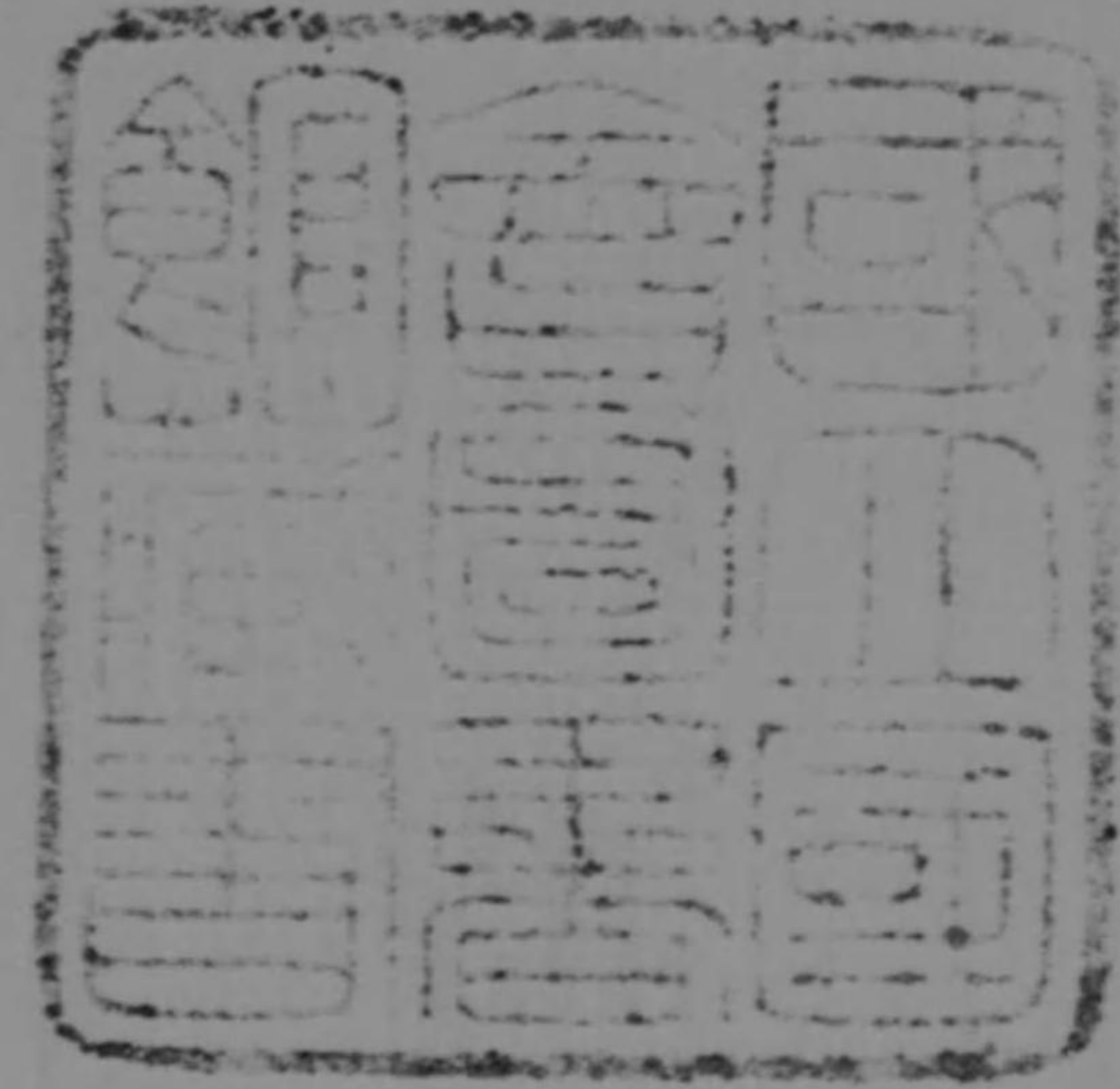
柳田國男先生著作集 第四冊

時代卜農政



實業之日本社

380.8
Y529y



口
信
夫

541172

自序

自分の如き者の意見でも稀には採用せられたものがあります。又採用はせられぬ迄も後日になつてそれ御覽なさいと言ふことの出来たものもあります。併し自分はそんな過去つた事實、碑文じみた記念を世に遺す氣は有りません。茲には今日尙問題である所の問題で、私の説のあまり反響を起さなかつたものばかりを公にしました。是は微志の存する所であります。曾て印刷はしましても雲煙過眼の雑誌でありまた頒布の狭い書物であつた爲に一層人の注意を惹かなかつたのかも知れませぬが恐くは研究の方法が少々迂遠のやうに見えた爲に急

自序

進的思想を持つて居られる先輩の趣味に合はなかつたのでしやう。それに議論の中心とする所が嚴格なる意味に於ての時事問題ではありませんでした。考へて見れば此は我々と同じく自分で自分を教育して見やうと云ふ若い人たちに對してはなれば説くべからざるものでありました。仍て今度は此から實際界に打つて出やうとする諸君の中から同情ある讀者を求めやうと思ふのであります。御斷りをする迄も無く自分は學究ではありませぬ。職業の上から申しましても必要以上の學問をする權利を有たぬ者であります。新聞と演壇とがあまりに敏活にあまりに輕快に一代の問題を解決してしひ、現在多數者の希望があまりに適切に一國の國是を構成する時代には、うかすると臨機應變策の連續を以て即ち是れ政治と誤解せらるゝの虞があります故に、時々は平常の立場から一步を退いて稍廣い眼界を一瞬に見渡すやうな研究をする必要があることを感じ

ませぬならば、何を苦しんでか人からはチヨン鬚の五つも頭へ載せて居るやうに嘲られつゝ斯んな小面倒な題目に限ある精力を費しましやう。實際日本のやうに進歩の強烈なる國では所謂開國五十年史だけでも頗る尨大であります。あれを記憶する丈でも容易で無いのに、今更曾祖父の證文の如きものを持出さずとも新しい材料だけで何とか片付けやうでは無いかと訓戒して下さる人も有りましやうが、残念ながらさうは行きません。日本の内地にはちつとも新聞を見ぬ人がまだ四千五百萬人ほど居ります。親の田畠を親の農法で耕作して些かも外界の經濟事情に適應することが出來ず又適應しやうとも力めずに、唯世渡りは骨が折れるとばかりで兀々と働いて居る人が存外に多數なのです。勿論舊弊な政治でなければ此人々を幸福にすることが出來ぬと云ふのではありませんが少なくとも彼等の本然に反した思遣りの無い統一政治では永遠に彼等を納得さ

せて新時代に導き出すことが難からうと思ふのであります。時代の變遷といふことは何も私が發明した新熟語でもありませんが、唯如何に變遷したかと云ふ具體的の説明に就ては私は稍立入つて試みて見たつもりであります。若し幸に僅かでも手柄がありとするならば、それは現在日本の經濟事情は決して一朝に發現したもので無いこと、従つて一朝に之を更改し得るものでも無いこと、我國の如く交通の緻密な人口の充實した猫が屋根傳ひに旅行をし得るやうな國でも地方到る處にそれ／＼特殊なる經濟上の條件があつて流行や摸倣では田舎の行政は出来ぬこと、それだから結局は訓諭よりも當事者の自覺的研究を慫慂する方が大事であると云ふことを明白にした位なものでありまじやう。

是も時代變移の一例であります。今日と自分の子供の時分とを比べて見て大に違つて來ましたのは朝野共に非常に議論獻策の減少したことであります。

役人が意見書を出すことの少なくなつたのは或は事務が増加して餘裕が無くなつた爲か又は職務の分界が明確になつて慎んで他人の權限を侵さぬ故かは知りませぬが、兎に角ばつたりと止みました。又在野の志士が自分の貧乏は苦にもせず建白書を懷にして遙々と上京をするなど、云ふことも何時となく歴史になりました。此變遷が略二十三年の議會の創設を堺線にして居るのは注意すべき事實であります。成程今日とても請願はあります。穩當不穩當種々なる方法を以て年々數百千通の請願が出て行きます。併し其中に書いてあることは要するに論議では無く希望であります、注文であります。人に言はせるか自ら言ふか兎に角個人又は一團體の爲に何かして呉れと云ふ要求でありまして國の政治を議したもので無いのです。言はゞ所謂運動費を仕拂つて引合ふ事業なのであります。又新聞や雜誌を見ても近頃おかしな程減少したのは論難辯駁の文で

あります。よほど感情でも害しなければ人の議論などは攻撃せず常に別の方を向いて別の事を談じてをります。此は必ずしも患ふべき現象で無いのかも知れません。議論が盛だから優等の國民だとも言へますまい。露西亞の地主は議論が好で一晝夜位差向ひで意見を戦はす人も稀では無いさうですが、終には空漠な哲理に落ちて雙方何の爲に寢食を忘れて議論をしたのか忘れて了ふことがあると云ふことです。此も困つた物ですが、腹の中の考は丸々違ふくせに議論は愚だ与其他の手段を求めるのは或は學問的良心の退縮と申しまじやうか。共同研究の誠意の缺乏と悲觀してもよいのであります。議論をせねば敗けて他人の意見を行はねばならぬと云ふことも無し、多數の言ひさうな事を推測して之を上手に言現はせば褒められますが、それでは到底國事を憂ふることは出来ないのです。自分の爲の申譯ではありませんが、私は今一度勢力地位のある人も無

い人も、名聞心からであつても無くても、意見のある者はどしどし之を表白する維新前後のやうな氣風を起したいと思ひます。又今日のやうな先輩講話時代、黙々拜聴時代の一日も早く過去することを切望するのであります。

此書物の中で報徳社を批評した一篇は報徳會の雑誌「斯民」の誌上で跡にも先にも殆ど唯一度烈しい攻撃反駁の的であつたと云ふ珍しい履歴を有つて居ります。それも相手が七十餘齡の老學者岡田良一郎先生で無かつたならば假令口では何と言はれても長文を草する迄の面倒は見下さらなかつたらうと思ひます。此點に於ては自分は先生の壯心に對して竊かに當代人物の爲に其根氣の薄いのを愧ぢてをります。岡田先生の反對論は十分に親切で且同時に之に關し諸國の門派の者に訓示せらるる所がありました。併し其論旨に依つて改めなければならぬ所は唯辭句の禮を缺いて居たらしかつた點ばかりで、其他には屈服すべき

必要を見ませなんだのみならず童兒何をか知らんと云ふやうな語氣が多くありまして數年後の今日之を再讀しましても何とか言ひたい位でありますから、其當時は餘程流行の風に背いて議論を戦はしたかつたのであります。併し報徳會は自由なる共同研究の機關で私の説は此會をまだ公開せぬ前に演説した筆記であつたとは言ひながら、既に報徳會を公の團體とし此から廣く全國に會員を募らうとする折柄こんな議論を繰返して居る爲にさもく内証でもあるらしく世間から誤解せられては統一の任に當つて居らるゝ諸君に氣の毒と思ひましてやつと我慢をしたのです。今となつては出して構ひはしますまい。又岡田先生の議論の中で駁撃になつて居る部分を抄録して之を各箇條の下に掲げましたのは全く先生の説を尊敬した所以であります。斯る反對があつたけれども自分の意見は元の通りと云ふことを重ねて述べて置くのであります。先生の議論は

「斯民」第一編の第五號と第八號とに出て居りますから私が自分に都合の好い所ばかりを抜出したので無いことは容易に證明が出来ます。

私の意見に對する反對論を目で見たのは生れてから唯一度ですが耳では折々聞きました。尤もそれも極めて斷片的にです。何れの點を指してだかは知りませんが、どうも柳田の説は變だと駒場の専門家が言はれました。又某縣の良二千石もあの男の言ふことは分らぬと斷定せられたさうであります。此の如き噂を承りますと或は實際自分の觀察のし方が悪いのでは無いかとひどく氣の弱くなることもあります。いや／＼そんな事で國の爲の研究が續けて行かれるか。此點と指摘せられて理由があつたら心持よく改訂して進歩をしよう。もし又先方がどこ迄も遠慮深いならば致し方も無い。ちと仰山な言草ではあります。併し是非を百年の後昆に問はうと思ひまして今回の如き企をしたのであります。併

しながら時代は寸刻も休まずに推移致します、人はあとからもあとからも生れて來ます。微々たる自分輩の意見などが爪の垢ほども反響を世間に及ぼさぬ中に國運は進むやうに進み成るやうに成り、時勢は無頓着に數十回轉して最早此等の獻策が何等の適用をも見ぬこととなり、あの時代にはこんな議論もしなければならなかつたのかとか、甚しきに至つては昔は妙な術語を使用した物だなど、云つて、經濟史を學ぶ學生たちが折々來てはちよいと覗くやうな、あまり調法でも無い參考書となつて了ふかも知れませぬ。人間はどの位まで精勵刻苦すれば時代を作つたり時代を動かしたりする大人格となれるものか、我々凡人には殆ど之を推測することさへ出來ませぬ。あんまり面白くもない話であります。明治四十三年九月一日。

もゝとせの後の人こそゆかしけれ今の此世を何と見るらん

目次

自序

一、農業經濟と村是

今の農業者の經濟的智識……まだ解決せられざる問題……生産の地方的過不及……予は何故に貧なりやと云ふ質問……經濟事情の區々なること……村と村の土地……入作には色々の不便あり……村と村との經濟的組織の差異……地方農政の重要なる所以……町村の大に働かねばならぬ點……村是調査の最初の着眼點……地形と農法との關係……村の勞力の適當なる配賦……我が一町と借りた一町……村持土地の管理方法……燃料採取地の問題……村民にして農業を營まざる者……個人の希望の集合は必ずしも村是に非ず

二 田舎對都會の問題……………三九

悲觀論者に賛成せざる二の理由：…國柄によつて問題に輕重あり：…都會の特に發達したる理由：…新時代になりて此原因は増加せり：…社會改良が先づ市街に行はれしこと：…勞力分賦方法としての都會移住：…「春風やはたけ見たがる京の人」：…工業地の分散：…移住者の胸算は必ずしも誤らず：…忘れられたる重要なる論點：…家を重する國是：…資本配賦の偏頗悲しむべし：…田舎わたらひの流行せし時代：…田舎勞力の品質上の減退：…農政には敵味方あるべからず：…眼前を過重する政治：…新土著者を歓迎すべし：…農事改良の任務を負ふ者：…村の鎖村的因襲：…地價の高きは農業の爲には無用なり：…土地に束縛せらるること

三 町の經濟的使命……………八五

町の數は増し村の數は減ず：…村を町にしたがる氣風：…町と村とは形に於て差異なし：…町村區別の標準一定せず：…集まつて一個となれる町：…町の大小：…入寄留超過せる町：…町の成立要件及存続要件：…社寺の門前に出來た町：…湯の町及鑛山の町：…多くの港町の衰微：…運送方法の變遷と町の盛衰：…宿驛の盛衰：…政策を以て設けたる町：…町と云ふ語の意味の變遷：…町はもと村の一區劃の名なりしこと：…村と町と名を同じくする理由：…莊園に市場の必要なりし所以：…市の日を市場の名とす：…市立月六回となりし時代：…次で日々市常市となる：…昔の市の日の有様：…各藩の商業政策に基く新町：…町と町との烈しき生存競争：…町附近の農業の特色：…結論——町村の差別を廢せよ：…町の三種類と其優劣：…地方的消費衰へたり：…町生産を複雑ならしめよ

四 日本に於ける産業組合の思想……………一四五

産業組合は古き制度に非ず：…組合制度を以て解決し得べき農政上の大問題：…小農をして取績かしむる唯一の道：…組合の思想の新しく生じたる所以：…昔は

被管に對する保護厚かりき……封建の思想弛みて組合の制起れり……村落に於ける組合思想の起源……村組織の上に影響したる平等の思想……災害の不幸が外部に暴露する時代……多くの幸福なる組合は艱苦の底より現れたり……凶荒の痛切なる實驗……豫防組合の起るべかりし機運……荒政の研究……三倉のこと……朱子の社會……朱子の社會の特色……三倉と三種の賑恤……義倉の由來久し……奈良朝時代の義倉……義倉制の中絶……各藩の實行せし社會義倉……義倉と社會との關係……社會に依らざれば定免制を行ふ能はず……穀物社會制の困難……報徳社は理想的の社會なり……頼母子及び講……組合の新しき任務……新種類の窮乏……信用組合以外の組合

五 報徳社と信用組合との比較……………二〇七

報徳道の教化門……報徳社事業の經濟的方面……桑田博士の説非なり……二種の組合の異同……報徳社の長處……本社支社の聯絡……加入條件の寛なること……

六 小作料米納の慣行……………二七五

此習慣の二原因……地主小作はもと共同經營者なり……小前百姓の根源……理由

は過去の理由となれり……此が存するは惰性のみ……米納制度の結果……米質改良とは兩立せず……利害の衝突しやすき點……將來の小作農場は集合するならん……金納は地主にも不利ならず……一國の立場より觀れば……舊慣を改むる手段小作人組合の必要……之に適合する國の政策

索引

三〇五

附記

三三二

農業經濟と村是

農業經濟の問題は地方行政の骨子であります。複雑なる國民經濟の組織を一の機械に譬へますならば、農業はその齒車ハギルでもあり調車シヤクカでもあるのです。集まつて國を形づくる村、その村を構成する家、その家を組織する個人と段々に端から端を見渡しますと、其間の最も大なる經線クワイトは農業の生産であります。必ずしも農業國本の説を奉じませんでも、又農業者の政治上の勢力と云ふものを認めませんでも、少なくとも農業が一國の生存に重大なる關

係を持つて居ること今も昔の米を年貢に納めた時代と大差の無いことだけは事實であります。右の如く重要な農業が地方々々に由つて色々事情を異にし、又殆ど暫時の靜止もなくどしどしと變遷して行くのが今の世の有様であります。故に先づ大勢には通じた積りだなどと云ふ人の「つもり」は餘程あぶない「つもり」であります。成ほど一生涯夢中で持いでも金持には成れませうから、一身一家の爲だけならば世間に連れて並の事をして居てもよいけれども、苟くも公共の生活を念頭に置くとなれば、それでは濟みませぬ。そんならこの變化の多い複雑な農業の經濟をどう研究したら的確に會得が出来るか、それは恐くは肝要な著眼點が有るのであらうが、實は自分にも直には御答が出来ませぬ。これから諸君と共に段々と攷究したいと思ふのであります。

實際の經驗智識は尊敬すべきものであります。故に我々が地方の實際家に向つて話をすゝるとなると、勢ひ書物で見た西洋の學說や遠方の事例などを擧げて受賣をせぬと、聽く方にも新し味がなく話す者も心細いから皆さうします。併しそれは無用ではあるまいが少な

くも迂遠の業であります。なぜなれば今日の時節に必要なのは西洋の農業經濟學の普及では無く、日本の農業經濟學の開發であるからであります。實際我邦の農業經濟は學問としては殆ど研究せられて居りませぬ、全然これからの問題であります。學問でも何でも役に立つのは國産であります。日本では聖德太子吉備大臣の昔から舶來の學問でなければ價値が無いやうに思ふ悪い癖がありました。三千年も以前の支那の井田を研究して見たり、西洋の貨幣が大昔は牛であつたことなどを知つて居れば學殖深遠だといはれますが、目前五十年の經濟の變遷に付ては却つてよい位のことを言つて置く人もあります。若し我々が信ずる如く經濟の學問は目前の各種の經濟現象を研究して其由來と趨向とを明かにし、兼て將來發生すべき問題の爲に豫め能ふ限りの解決をして置くものであるとしますれば、今日程農業經濟の學問の進歩せぬ時代も珍しいのであります。成程箇々の農業者の經濟智識は驚くべく發達して來て居ります。所謂老農精農の郷黨の間に尊敬せられて居る人は勿論、若い農業者でも大抵經濟の遺線が頗る巧者であります。早い話が桑なり馬なり殖林なりの

補助金であります。之を貰へば直に著手する、補助金が出無くなれば又止める。是れ農業者の胸算用能力の發達を意味するものであります。補助金政策は誠に重寶なる速效藥として何れの府縣でも御用ゐになります。其功能の顯著なる所以は、全く各農業者が補助金と云ふものは普通の收支計算の外にそれだけの純益を増して貰ふことであると知つて、そんなら遣りまじやうと機敏に判断をし得るだけ賢くなつたからであります。此は確かに經濟智識の發達であります。が残念ながら唯夫れ目前の實際に處するだけの斷片的の智識であります。一國の生存のために最も必要な將來の問題の解決は、彼等は之を試みやうとせす、又試みることも出来ぬのであります。私が學問々々とえらさうに申しますのは横には國の全部、縦には過去と未來とを包含した總括的研究を云ふのであります。何れの國も同じことでありませうが、日本には、殊に國柄として食料の生産其他農業の將來に關する澤山の問題がありまして、それがまだ根から解決せられて居りませぬ。試に一の問題を擧げて見ませう。今の所では、如何なる豊年でも若干の米と麥粉とを、外國から補充せ

ねば全國民を養ふことが出来ませぬ。此では成らぬと保護的の關稅をかけて國內の穀作を奨励する所謂食料獨立の國是であります。此説に隨ひますれば一朝戦争などの起つた時島内の籠城差支なく至極安心のやうであります。さて穀物を作る肥料はどうしませうか。三十七八年戰役にも問題となりましたが、智利の硝石は勿論、滿洲の大豆でも、窒素肥料には敵國から戰時禁制品とこじ付けられる虞のあるものが多いのであります。然らざるも年々の供給を海外に仰ぐの不安心なことは、肥料も食料もかはりは無いのであります。

食料獨立の國是を打立てんとする國は同時に肥料の獨立を唱へねばなりません。將來の窒素肥料としては早晩必ず空氣中の窒素を採取する方法が盛に行はれることでありませうが、差當りは矢張舊來の農法を踏襲して、綠肥を栽培するの一策あるのみであります。然るに綠肥の栽培は、今まで一毛作であつた田地にはそれだけの利用増加でありますけれども、肥料補充の最も必要なる二毛作田には、綠肥を作るだけ農産物の生産區域を減すことになりません。假令資金には乏しく努力には餘ある農家でも、よい加減足りない作付反別

を割愛して綠肥を作るとは考へもので、殊に全國又は一府縣から見まして、食料の生産がそれだけ減ずるのは堪へ難い次第であります。故に肥料はどうしても國の内でも且つ六百萬町歩の田畑の外で調達せねばならぬ理窟であります。昔は村々の山野には無盡藏の綠肥が得られたのでありますが、人口の増加と共にその山野の大部分は開墾せられて面積がずつと減じた上に、残つた原野も頗る生産力が衰へて居ります。近頃原野改良といふことが大分世の中の問題となり始めまして結構であります。實は社會人情の發展に相應するだけに、村持山野の管理利用の方法が未だ發達して居らぬから困るのであります。交通の開けぬ時代には、秣山でも薪山でも銘々の家に入用なだけ採つて來れば、其以上は食つても仕様が無い所から争は起りませなんだが、今日は入會勝手次第として置きますと、我が手に取込みまして瞬くうちに山野が荒れます。此争鬭を避ける爲に共有地を分配しますと、土地の荒れるのは防ぎ得られますが、權利を賣つたり買つたりするうちに、肥料の工面の出來ぬ農家が出来、燃料の爲に金を遣ふ百姓さへ出來て來ます。飼ひたくも牛馬も飼は

れぬと云ふ異例の農家が、追々發生するわけであります。今日では農業も立派な一つの職業でありますから、つまりは純益の多少を問へば宜しいので、頭からそんな農業の遣方はいかぬとも勿論斷言出來ませぬが、兎に角明治に成つて澤山に顯はれた此種新式の農法は果して好ましい經營法であるか否かもまだ篤と研究せられて居ませず、斯る農法の下に成功すべき農業經濟の智識も亦一向普及して居らぬのであります。日本國の食料問題の底にはこんな六つかしい問題が未解決のまま横はつて居ります。

一一

大問題はまだ中々あるのです。全體米の生産額が五千萬石、麥類が二千何百萬石、是ならば國內の需要に應ずるに足るとか足らぬとか云ふことは、よく耳にする所ではありますが、問題は今一段立入つて研究せねばなりません。四十七の道府縣では食料の生産は均等に同一狀況を示すものではありません。全國平均一人當り消費高を基として計算しますると、半

數の府縣では人口に比して大分の餘分があり、他の半數では不足を外から補充せねばなりません。郡と郡とを比較し町村と町村とを比較しても同様の事實があるに違ひありません。年々の産米産麥の中で五十里百里の旅行をする俵數は元より總額の四の一か五の一かに過ぎませぬけれども、何しろ大した金高に上るものですから、この穀類の取引といふものが國內貿易の上で一種恐るべき曲者クセモノとなつて居りまして、農家にも消費者にも常に少なからぬ影響を及して居るのであります。さて此地方的過不足の状態を検査しますのに、必しも東京とか大阪とか云ふ大都會を包含して居る府縣である爲に不足と云ふばかりではありませぬ。村に住する人口の相應に多い府縣でも米麥の生産の不足を見る例が段々あります。語を換へて言へば、自家の食料を生産せぬ農家の發生し増加したことは明治の經濟界の一特徴であります。これは種々の特用農産物の中でも取別け養蠶業の發達がこの趨勢を助けたかと思ひます。勿論今日でも米麥の生産は日本農業の中堅には相違ありませんが、將來は同一の經濟現象の下に各地方の利害が相反しまして、全國一率の解決が出来ぬ問題の起

るべきことを豫想せねばなりません。宮崎氏の農業全書でも、佐藤氏の六部耕種法でも、最初は米中心の農業經濟を説いたのが即ち全國の農村に遍く適應する所以でありましたけれども、今となつては智識を此以外に求めなければならぬ場合が追々と殖えて來る姿であります。徳川時代のやうに經濟界の事情が三百年二百年の間にじり／＼と變遷するやうなら、從來の仕來りシキリに依つて居て差支はありません。親が老農なら子も精農となり得る望がありますけれども、今日では外界に目まぐるしい變遷がある上に、箇々の農業者の判斷も絶対に自由奔放のものであります。自分は一つ養鶏を遣らう、自分ばかりは果樹で成功して見ようと、思ひ／＼の經營を遣る者もあれば、之を眞似たり眞似なかつたり、中々一村の關係だけでも錯綜したものであります。併し箇人の才覺は多數者の永年の實驗に比べますとどうしても劣つて居りますから、新手を出す者は割合に失敗が多い。之を恐れて保守的態度を取つて居れば又聞いた事もない遠方から競争が現はれたり、品澤山で商人に足元を見られたり、何の事は無い外界の波に翻弄せられて居るやうな場合が多く、心掛も悪

くはなく正直でよく働きつゝ折々損をする。又段々不勝手に成る、舊式の因果律に慣れた者には天道の是非を疑ふやうなことが屢々あるのであります。自治經濟の世の中では「私は何故に貧乏であるか」と云ふことは愚な質問であつたかも知れませぬ。天災は別として働けば必ずそれだけの報酬がありました。併し今日では働いても貧乏することがある。故にこの質問は極めて尤なる不審且つ重要痛切なる疑となりました。而も各人の疑は千差萬別なのであります。之に對しましては經濟行政の當局者は甚だつらい責任を負ふて居ります。其爲に置かれた役人であつて見れば、我々に教へよ我々を導けと云ふ實際家の要求に應じない譯に行きませぬが、さて一切の場合に對しそれ〴〵誤らざる判断を下してやることは至難であります。殊に多少將來に向つて豫言がましいことをして置きますと思掛けなく反證の擧ることが度々あります。通例何の政策でも學術上の權力は行政上の權力と併行して居りまして、中央政府に使はれて居る専門家は學者としても一等えらい、其監督を受くる下級官廳は學說に於ても受賣をして居れば比較的安心であります。併し農業經濟の學問

などは最も中央集權には適して居りませぬ。それも人手が有餘つて手分けをして各方面を精査し得るなら兎も角も、五人や八人の東京の専門家がこの細長い日本の隅々に迄行届いた觀察と判断を下し得る筈がありません。府縣と雖同じことで、よく余が縣の農業の實況はなど〴〵概論する人がありますが、恐ろしいことであります。早い話が御膝元の東京府。あまり大きくも無い府ですけれども離島は別として内地の方だけでも確に三通りの全然相異なる農業經濟が行はれて居ります。大川東岸の新田場シンデンバは其の一であります。多摩川北岸の島場は其二であります。第三は甲州に接した山地の農業です。この三種の農村には三者共通の經濟事情が甚だ少なうございます。故に若し府の勸業課で米とか桑とか物を擧げて法を立てるなら格別、更に一步進んで村の生活を改良する爲とか、災厄を豫防する爲とかに考及びますならば、是非とも三様の立法を要するものであります。國の法律勅令となりますと細別すれば數十百の特殊經濟事情を網羅すべきもので、平凡人の根氣コンキではとくの昔に斷念すべきものであります。現に小作條件の如き、二十年來の宿題で有りながら、今以

て何等の施設をも見ませぬのは全く全国各地の小作關係が千差萬別であります爲、手の下しやうが無いからであります。決して當局の不熱心に責を歸することは出来ませぬ。

以上申上げた如く、之を大にしては、一國一府縣が同一の經濟事情を具へて居らぬことは誰しも否定せぬ所でありませうが、更に一の溪谷にある二の村、一の海岸に並んで居る二の村を比べましても、やはり甲を以て乙を推すことの出来ぬのは同じであります。成ほど氣候も地質も略一様なれば、祖先來の習慣も似て居り、交通の關係も大差のない場合が多いでせう。然るに猶此の間に經濟事情の相異なるものは何の爲かと申しますと、全く人と土地との比例が違ふからであります。町村人口と町村地域の面積との關係が色々の沿革から或は割合に廣く或は割合に狭いからであります。村の土地と云つた所が村民の所有する土地と云ふわけでは無いので單に其村の行政區域と云ふに過ぎぬのです。自分の村には土地が少なくとも周圍の村々には餘があるとすれば、何も町村の地域の廣狹がそれ程大きな結果を生ずる道理が無いと、一寸考へる人があるかも知れませぬが、決してさうで無い

仔細があります。それを少しく申上げませう。

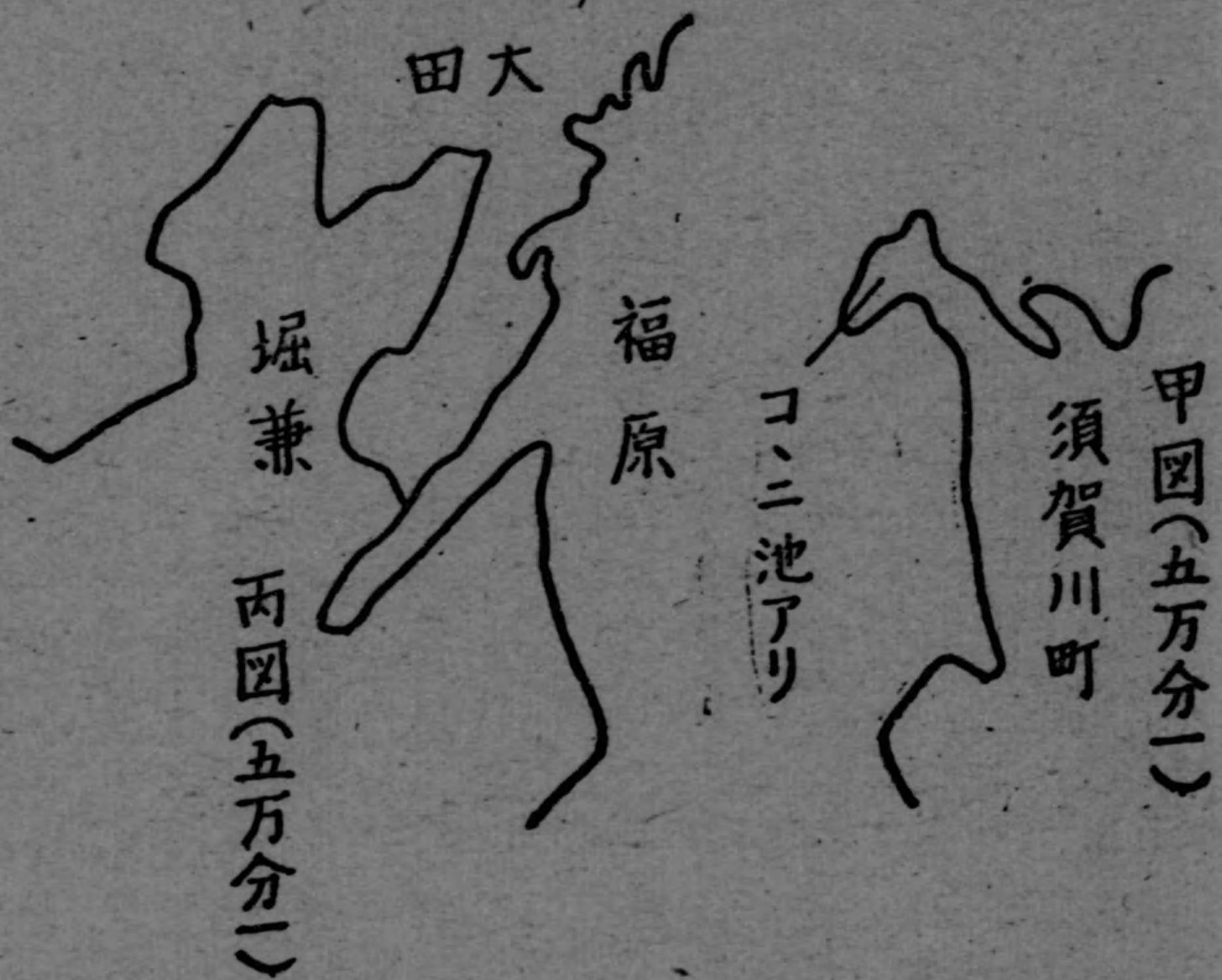
三

本來「村の土地は村で利用する」と云ふ思想は歴史上の根據を持つて居る思想でありまして、今日の社會となりましても暗々裡に存外大きな勢力をもつて居ります。古い所へ溯りますと、村なるものの意義は今日とは異なつて居りまして、單に民居の一集團即ち宅地の有る部分のみを村と稱したのであります。村民が耕作する田畠乃至は其利用する山林原野は則ち單に其村に屬する土地でありまして、後世村を一の行政區劃とするやうになつてから、其田畠山野までを總括して村と稱するに至つたのであります。故に村々の境なるものを見ると、今日の考では殆ど想像の及ばぬ位境界線が大牙交錯して居ります。

近江から大和へ行くには汽車でも小半日かゝりますのに、二國の國境の最も接近した所では一里餘しかありません。駿河の安部郡の北の端は信濃の高遠に近づいてをります。上總の山武郡の北部は

深く下總の香取印旛二郡の間へ入込んでをります。國境郡境の錯綜してをりますのは、つまりは村境の錯綜して居る爲で、今の町村の境の彎曲してをるのは、大字即ち舊村の境の曲つて居た結果であります。こゝに唯二三の例を挙げますならば、福島縣須賀川町は西北の境で西袋村との間には甲圖の如き線を作つて居ます。愛知縣幡豆郡家武村の村境は乙圖の通りであります。武藏入間郡堀兼村と其二鄰村との關係は丙圖のやうで橋樹郡田島村と大師河原村との境は丁圖通りであります。此原因としては無論土地の高低水流の方向などもありますが、要するに最初無所屬であつた原野が先づ之を開發した村に屬することになつた爲であります。故に後には境が本村とは全く絶縁して所謂飛地を作つた例も澤山にあるのであります。

新しい地方制度では國土は必ず何れかの町村の區域で無ければならぬのに、實際は所屬不定の山野が澤山にあります。御料地や入會山にはどの村の地面でも無いものはいくらもあります。之を見ましても徳川末期迄の思想では村の地は村に屬すと云ふよりも、村に屬するから終に村の地域になつたのだと云ふ方が正しいことがわかります。新田開發が盛にな



丙圖(五万分一)

入作には色々の不便あり

りまして、町の商人其他村外の物持が地主として作徳米を收納するやうになり、更に地所賣買自由の布告と共に、他所の地主は益々多くなりまして、此原則は先づ毀れたやうでありますけれども此の如き場合にも其土地直接の利用者はやはり所謂地元の村民でありまして、出作入作の耕作は全國土の大數から觀ますと極めて僅少の歩合であります。それと申すのが農業の性質として遠方に生産場を持つことは仕事の上に大不利益であります上に、土地を相手の勞働は勞働の最も單純なるもので、誰にでも出来る勞働にしては報酬の割合もよい所から、自然に村の土地は是非とも村限りで利用する風となつたのであります。此關係は一國民が國の領土に對する關係も同じことで、人口のさまで多からぬ國が頻に領土の擴張を争ひますのは、無益な慾張のやうに見えますが、其實領土なるものゝ性質が先づ以て自國民に勞働の機會を與へ其生活を容易ならしめるからであります。米合衆國の様な廣い國で何も外來の勞働を拒まずともよかりさらなものです。やはり地元の勞働を需要してよく／＼不足の時でなければ出稼人を歓迎しませぬのは、この譯合からのことでもあります。

之を以て觀ますれば、村の地域の廣狹は村民の産業の様式に大なる影響を及すことは疑も無いことで、更に詳細に考へますと、同じ廣いものにも山岳で廣いものと、平地で廣いものと、海岸線に沿ふて横に長いものと、川の流に併行して奥へ深いものと、圓くて民居が眞中に在るのと、いびつで村屋敷が片端に在るのと、大道水路の横斷して居るのと居ないのとは、それ／＼異なつた經濟事情を現出せねばならぬ道理であります。地方によりましては新町村の區域を定める際、天然の地形の許す限、力めて人口と地積との割合を均等にすることに注意した所もありますが、多くの地方では昔からの沿革がありまして、否應なしに境をきめねばならなんだ爲、町と村との相異は勿論、相隣したる村と村との間にも一戸當り地積の非常な差等があります。通例海岸の平地から山間に向つて進む程人が少なく土地が廣くなります。一郡内でもこの通り、況や少し離れた甲乙二地方を比べますと、殆ど日本と佛蘭西との相異ぐらゐもちがひます。決して誇張ではありません。汽車で走れば一日路ですが、關東の村々と畿内の村々とは村の外形が丸でちがひます。關東では宅地の周圍には樹

木があり畠があり、村は一言でいへば青いと云ふ感じを與へます。上方では純然たる農村でも人家が密集し樹木が少なく、白壁や瓦屋根が露出して居りまして、一言にいへば白いと云ふ感じであります。何故に斯うかと申せば前者は所謂寛郷でありまして、土着の當時たつぷりと屋敷の地割を致しました、後日之を田畠に開きましても概して屋敷が廣く且つ互に離れてをります。下總などの原野地方の村には家のめぐりに畠があり、之を竹藪で圍ひ、桐や楓まで其中に栽ゑて宛然一の森のやうな宅地がいくらもあります。之に反してよく開けた上方では、建物の軒先から數歩ならずして凡て田になつて居りまして、殆ど穀物の乾燥場も無いのであります。水田は大抵排水が出来て穀物の調製までに田を使ふ所があります。麥秋には田が水に成つて居りますから、道路の上で裸麥の稈を鍛る爲に通行に難儀することなどがあります。凡そ土地も此ほど迄に烈しく利用せねばならぬ位人口が充實して居るのであります。勿論將來の土地利用は徐々に此境まで全國を進めて行く必要がありまじやうが、兎に角現在の状況から申せば、同一の説法を甲にも乙にも共に聽聞させる

ことの出来ないのは確かであります。然るに中央政府の研究は前申す如くどこまでも狭く深く入込んでをりまして、おまけに専門分立の結果馬のこと、牛のこと、蠶のこと、殖林のこと、矛盾はせぬが兩立の困難な二以上の説を發表することも時々ある、つまり場合に應じ選擇と調和とを各地方自身に一任せねばならぬのです。當業者は少なくも實地應用の智能だけは備へて居らねばならぬ必要があります。府縣の勸業行政の重要なもの全く此爲でありまして、如何に中央集權の政體でも、地方官の責務は上命の施行を以て盡きて居る世の中でも、猶特殊の經濟事情に對する箇別の裁量を下さねばならぬ場合が澤山とあるのであります。此地方的の研究は勿論日に月に進みつゝあること、は信じますが、府縣の農政の中には今以て若干流行の分子が交つて居りまして、往々人をして果して其府縣の事情に適應して居るのだらうかと危ぶましむるものがあります。併し此も亦餘儀ない次第であります。府縣とても格別大きな所帯では無し、さうく何かも一手に引受け軒別の世話が焼けるだけ人の手が多分でも無いので、所詮國と同じく多數の場合の民福を講究すれ

ば洩れたる少數は先づ後廻しにせられても仕方が無いのです。唯餘計な心配の様ではあるけれども丙吉が牛の喘アヘキを尋ねたと云ふやうに、何でも大體を括つて居つて、細心の研究を怠られては困ります。よく人は楊枝で重箱の隅をせよると云つて輕蔑しますが、重箱の隅たる者の立場から申しますれば、さう何時迄もせよらずに棄て置かれても甚だ迷惑でありませう。日本は全體世界に稀なる山國で且島國であります。孤島と雖集めれば中々の面積であります。僻遠の山村と云ふのが國土の半分を占めて居ります。平地農に對する農政ばかりでは濟まぬのであります。

四

以上の事情から考へて見ると、何でも將來の農業經濟の研究には是非とも町村がうんと力を入れねばなりませんまい。今日のやうに何事も上まかせの保護干涉を悦ぶ氣風は、あまり感すべき氣風ではありませぬ。政令の行はれ易い點は如何にも結構であるが、それでは

少數の理事者の能力に要求する所が過大でありまして、終には全智の神を聘して來ねばならぬこととなります。申す迄も無い事ながら、自治とは決して形式の名ではありませぬ。而して各團體に於て先づ共同審議すべき問題は生活の問題の中堅たる經濟の方法如何であります。町村の經濟事情が右の如く千差萬様だとしますれば、多數に適用して差支へぬやうな外部の判断では、常に不十分不安心であることは明白であります。無論各人をして自家頭上の蠅を逐はしめるがよろしいけれども、町村は先づ團體内の優良なる人物に事務を委任してありますから、智力の有無相通を行ふに最も便利であります上に、最も近く現實に接近して居りますから、箇々の私益は凡て遺憾なく代表せられ得る道理であります。而も經濟事情の地方的の差異なるものは略々町村と町村との間を打止めとして居りますから、かたぐい以てこゝで研究するのが一番良い結果を早く得られます。實業教育と云ふことは此意味に於て最も其須要を感ずるのです。何とぞ諸君の御盡力で一日も早く熱心なる公務員たちに至當の議題を與へ、それぐ自ら有益なる研究の結果を收め得るやうにしたい

ものであります。又しても人の缺點を説くやうで不徳の業ではあります。是迄大分の金を掛けてこしらへ上げた各地方の村是なるものは、未だ十分に時世の要求に應じ得るものでありませぬ。成ほど所謂「將來に對する方針」の各項目を見れば、一としてよくない事は書いて無い。之を徹底して實行すれば必ずそれだけの利益がありますから、無きに勝ること萬々ではあります。如何せん實際農業者が抱いて居る經濟的疑問には直接の答が根柢から無い。それと云ふのが村是調査書には一の模型がありまして、而も疑を抱く者自身が集つて討議した決議録では無く、一種製圖師のやうな専門家が村々を頼まれてあるき、又は監督廳から様式を示して算盤と筆とで空欄に記入させたやうなものが多いのです。此村ではどんな農業經營法を採るが利益であるかと云ふ答などはとても出ては來ないので。眞正の村是は村全體の協議に由るか、少なくとも當局者自身の手で作成せねばなりません。それには農業經濟の學問がすぐに必要であります。早い話が副業獎勵の問題であります。主業たる耕作の所得の上に更に副業の収入を加へるは、如何なる場合にも常に望ま

き儀ではありますけれども、此の如き生産に充つべき餘分の勞力が果してあるか否かを先づ問はねばなりません。幸にして日本の村方では農業には大抵多少の餘閑がある。春と秋とは忙しくて手間の融通までも必要であつても、盛夏と冬とは稍手が隙きます。雨の日は概して利用が出來ませぬ。此等の閑暇を遊ばぬやうにすることは有益にちがひない。併し右の如き餘閑では早既に一年中繼續する副業を行ふことが出來ませぬ。若し強ひて遣れば主業を制限せねばなりません。即ち時と處とに應じ大に副業の種類を選択せねばなりません。到底流行を追ふことは出來ぬのであります。一體何の生産業に限らず、技術の精巧を期する爲には業を一部面に專にする必要があります。練熟は本人の心掛にも因りますが、一には注意力の集中と云ふことが大要件であります。故にどちらかと言へば兼業は成るべくせぬ方が農事改良の成績は舉ります。然るに日本の農家は殆ど半數以上何か副業を持つて居りまして、時としては農の方が副業のやうになつて居ります。併し之を止めることの出來ない仔細は、總別農場の規模が小さいのであります。

す。農村の村是の第一着にはこの問題を研究するのが必要です。戸數に割當て、一村の直接生産用地が戸別何程、其内山野が何程、田又は畠は何程と云ふことを算出し、更に進んでは耕地に改良し得べき餘地の多少、氣候土質などの勞作を妨げるものがあるか助けるものがあるか等を考へますと、自然に其町村で採用すべき農業經營の方法が知られ、如何なる程度迄副業を奨励すべきか、其何を擇ぶべきか、又は時によつては兼業農の行はれるのを黙過乃至は奨励すべきか否と云ふこともきめられるのです。よく學者の云ふことであります。國により時代に由つて色々ではありますけれども、農家には借地でなりと所有でなりと兎に角一軒の生活を支へるに十分なる収入ある土地、他の一面から言へば一戸内の勞力の全部を使用するに足るだけの土地が無ければ農業は獨立しませぬ。即ち副業又は兼業で不足分を補充するの必要が起るのであります。然るに是が又全國を通算して一戸の平均は九反内外の田畠とか、一府縣内の平均が一戸に八反とか云ふことはよく人が知つて居りますけれども、前申した如き事情

から村々の間に非常の差があることを言ひませぬ。日本の中央部の平地では通例一戸五六反の村が多い、畿内地方には三反に足らぬ村さへ稀有ではありませぬ。併し同じ三反五反と申しましても色々の場合がある。排水の容易なる地形で既に二毛作を營んで居る所では作付反別は二倍になつて居ります。大都會の附近には畠地で四作五作の栽培をする所がある。水田は畠に比べますと比較的變通の自由を缺いて居ります。それでも土地改良の結果として排水が完全になりますならば、夏作とても必しも稻には限りませぬ。現に一小部分には相異ないが、藪も作れば蓮根慈姑の類も作つて居ります。併し結局どうしても米よりは外は作れぬ所が大分あります。土地利用の將來の發展は畠地ほど好望ではありませぬ。要するに同じく一戸平均七反歩又は八反歩と申しましても、其大部分が田であるか畠であるかは又大に考へねばなりません。次には又田畠以外の土地の多少は是非に考へねばなりません。田畠の肥力は收穫物を遠方へ運搬し去ることの多くなつた今日では、愈々補充に注意をせねばなりません。野草を刈取つて肥料とせずとも金肥を買へばよろしいと云ふ人

もあるかも知れませぬが、大にさうでない。もし村中に綠肥乃至は家畜の飼料を採取する地積が澤山有つて、市場の肥料を購入せず済みまするならば、其代金に當る金だけは純益となつて残るのであります。其爲に人の勞力又は家畜が入用だとしても、それだけの勞力は極めて容易に換價し得たもので、つまり勞働の収入がそれだけ餘分にあつたのです。田畠ばかりならば一町歩無ければ得られぬ収入を、肥料採取地のあつた御蔭に七八反の田畠から得られたことになるのであります。それから氣候と地形地質の事を考へねばならぬと申すのは、奥羽地方の如く冬中二月も三月も地面が雪を被つて居る所では、假令一家内の勞力に割振つて丁度一杯の土地がありましても、冬中不用の勞力を忙しき春秋に繰延べ繰上げて利用することは出来ませぬから、勢ひ大に作業の模様をかへなければなりません。即ち一家の生計を支へる収入の上からは一町歩以上の土地を要するのだが、一家内の勞力を利用し盡すを限度と致しますと、七反歩より餘計は持たれぬと云ふことになります。殊に桑畠の經營となりますと、養蠶の作業までを總括すれば、一反歩當りの勞働収入

としまして此ほど割の良いものはありませぬから、人は争つて之に赴くといふ風ですけれども、此ほど又勞力配布のむらになる農業も少なうございます。わけても米麥の栽培とは兩立しにくいやりに思ひます。即ち春蠶は麥刈苗代と差合ひ、夏蠶は田植から草取水の世話と重複します。牛馬を飼へば秣刈の勞力とも引張合になります。然るに一年内の勞力の需要が或季節には一日に五人も七人も無くてはならず、或時には一人も入らぬと云ふやうに過不及のありますことは、日本のやうな國柄では農業の爲に殊に不利益な事情と言はねばなりません。近所にいつでも雇はれて来る勞力者が居るわけでは無いから、臨時雇は最も生産費を多くする恐があります。又そんな人がごろ／＼居るやうでも困ります。依て此間の遣繰は農家の主人たるもの餘程工夫をせねばなりません。併し此が山畑澤山の村であるとか乃至は畠の多い地方でありますなら、又主力を養蠶に注ぎまして春夏秋蠶を連作し其間には桑畠の世話を致し、冬中は座繰で糸をとるなり眞綿を作るなり紬を引くなり絹を織るなり致しますれば、略仕事の配賦も付くと云ふ者であります。養蠶はほんの一例に過

ぎませぬが、何にしても土地との關係上作物の選擇次第で、一戸一町五反でも餘ありとも言はれず、五反でも足らぬとも申されぬことですが、要するに田と畠との割合、大小の市場に對する遠近便否と共に、氣候上の制限も地形上の制限も凡て眼中に置いた上で、此村なら一戸に八反であるから純農業に専心するのが村是である、此村は一戸五反分で不足であるから最も仕事の閑な何月頃の副業として丁度これがよからうとか、乃至は到底耕作ばかりでは行かぬから兼業も仕方がないとか、若い者だけは手近の工場へ通はせるとか、出稼も止むを得ぬとか、今一層進んでは北海道米國等への移住迄も勧めるがよいとか云ふことになるのであります。此根本の事情をも調査せずに隣村でも遣つとるからと云ひ、又は隣村では遣らぬからと云つて外々を参考にするのは危険であります。今の農業者は久しい間人から因循だとか保守的だとか言はれました爲でありますか、中々思つた程頑固ではありませぬ。隨分流行にも注意して他人が遣つて見て甘く行つたと云ふことを眞似ます。此氣風は決して阻碍すべきものでは無く利用善導すべきものではあります。又同時に相應の

用意と熟考とがなければならぬ。何れかと申せば外へ心を散らす出来るだけ狭い範圍で經驗を積ませて農事改良の實を擧げたいのですから、副業及兼業は必要なる限度と云ふものを忘れてはなりません。同じく奨勵勧誘をするにも一々村柄を考へ勢力の餘裕に相應したもので、而も販路の確實な収入の間違無いのを吟味せねばならぬのですから、折々の巡回官には斷言のしにくいことがあるのも無理のない話で、町村が自ら考慮せねばならぬのも全く此が爲でございます。

五

村の人數に對する村の地積の問題を説くのに、私は話の錯雜を恐れて所有權の關係を凡て離れて居りましたが、農家一戸に付耕地一町山一町と云ふやうな極めて程のよい平均數が出ましても、勿論これは目の子算用の結果に過ぎませんので、決して各農家が此割合に土地を所有して居ることは無く、事實は寧ろ正反對に大なる地主と微小なる地主に分れて

居るのが普通であります。故に其大地主が「私は此大面積を一人で作る」と主張しますならば、話はそれきりのやうでありますけれども、幸な事には地主は大抵よい按排に各百姓に之を分けて貸します。そこは村内の情誼を以て欲しい者に譲り合ふことはさまで困難でもありませんまい。唯此所で考へねばならぬことは、作地が凡そ均等に割渡されておるとしましても、借りた一町と所有する一町とは作人の受くる結果が大に違ひます。努力の需要は自作も小作も同じでも、純益の上では略半分になります。小作料として地主へ出す分が約半分ですから、大ざつぱに言へば一町の自作農だけの生活をする爲には、二町歩を小作せねばならぬわけです。併し不動産を持つ者と持たぬ者とは自然に生活上の要求も違ひますから、必しもこの割で倍の土地は要しませぬが、兎に角同一の地面から一戸分の労働を以て二戸分の収入を謀るのであります、不足がちであることは免かれませぬ。成らう事なら地租の外は收穫を丸取にする所有権者として其土地を耕作させる方が、早く農業の獨立が得易いのであります。自作することの出來ぬ地主は今後増すとも減することはあり

ますまいけれども、理想としては作人に其土地を所有させるのが少なくも日本のやうな國には好都合なのです。唯「君の所有地を賣つて遣れ」と云つた所が承知するものではありませぬから、先づは賣物のある際に注意して力めて貯蓄のある小地主又は純小作人に土地を得させるやうに取計ふのは、公共團體の執るべき適當の處置であります。併しながら斯様な機會は毎度起るものではありませんから、やはり不斷の場合には假令借りてなりとも大抵程よく各農家に土地の割渡されることを期せねばならぬ。今迄は小作の問題には町村は殆ど少しも立入らぬ仕來りになつて居りますが、凡そ町村として一定の産業方針を打立てますからには、計畫通りに土地の分配せられることを力めねばなりません。地主たる者は永年の情誼上小作人に對して偏頗なる取扱もしますまいから、大抵は町村が世話を焼かねばならぬ必要も起りますまいが、例へば耕地以外の土地の利用などはよく方法を定めて置かぬと村民の利益に甲乙があつたり、然らざれば前申す如く人に取らせるのがいまましさに不用の物まで食つて山野を荒す虞があります。殊に土地が追々に不足を告げて來

る地方では、この村持山野の管理方法は實に重要な問題であります。果して其何分の一迄は耕地に新開させて宜しいが、燃料の採取地としては何分の一を宛て、置くか、從來の放牧地又は草刈場がそれでは不足と云ふならば、その狭い土地の生産力を如何にすれば増進し得るであらうか、此等の問題は凡て一町村の將來の産業方針を定める先決事項でありますから、是非とも村是として豫め之を議定し置くべきで、決して時の人々の希望位に應じて行きあたりばつたりに處理すべき事柄ではありません。よく考へて見ますと道路の開鑿でも公園の新設でも乃至は殖林でも、一として總括的系統的の土地利用計畫の中に入れずして差支ないと云ふものはありません。限ある村の地でありますれば、一方の用に澤山充てれば他の一方に不足するのは分りきつたことです。同じく土地の利用と云ふうちにも田畑の如く増せば増すだけ結構と云ふ直接生産用地と、宅地や道路等の如くもし幸に少なくても目的が達せらるゝならば少なくて済ませたい間接生産用地とがあります。又同じ直接生産用地の中にも自ら必要の緩急があります。一定の町村是に合せしむる爲にはよく根

本の立場からこの適否を決せねばなりません。一例を申しますと、山に遠い村方では昔から稻の藁を燃料とする風があります。越後の蒲原平原、尾張の海東海西、武藏の葛飾新田の如きは、元より水腐場でありまして良い藁も出來す且つ外に燃料が無い處から、藁を竈に焚きまして其灰を肥料として水路で、畠場地方に賣ることでありました、東京附近では藁にも川越にも月々の灰市が立つた位であります。然るに一方には排水の工事で段々良い藁が出來、他の一方には飼料として製紙原料として、疊原料として藁細工用として藁の需要は非常に激増して居ります。もし此需要に應じて藁を他に換價するとしますれば其結果はどうなりますか。燃料は食料にも劣らぬ生活必需品で而も百姓は大火を焼きますから、萬一日々金を拂つて薪を買ふことになれば、實際舊來の農法をがらりとかへねばなりません。ぬ、逆も藁を賣つて薪を買ふといふ譯には行くまいかと思ひます。人口が増し土地が比較的狭くなれば、この燃料の問題は、今後農業經濟の上で存外緊要の問題になるであります。そこで同じ村持の山でも、見す／＼良材造成の大利益を抛棄して、柴や雜木を立て、

置くのは愚な事のやうに見えますが、決してさうでは無い。生産の方法は如何やうにも集約的にして成るべく小面積で済ますとしても、兎に角この燃料の問題を解決してからでなければ、建築用材等の造林に論及することは出来ぬのであります。

六

右の如く色々な方面から觀察をして、さてどうでも此村では純乎たる農業を営むには土地が足らぬとなりますと、村是の決定の爲に更に考へねばならぬ問題があります。即ちその足らぬながらの土地の分配はやはり各戸平均を先途とすべきか、又は厚薄の二段に分けて、一部分は十分の土地を經營し、他の一部分は外の業を持たせて片手間に農を遣らせるやうにするかといふ問題であります。海に沿うて漁業の利益があるか、又は大道が貫通して、運送の勞働を需要する地方、或は年中繼續して耕作に従事し得られぬ村などでは、何れの農家も等しく多少の兼業、又は副業を執ると云ふことになりませうが、其他の場合で

は自分はやはり半分の民家には農専門に働かせること、例へば小さい町に於ける農業のやうにしたいと思ひます。収入の全部若くは大部分が農業に基づく家で無ければ、どうも熱心に其改良を力めませぬ。而もそんな家が五軒でも十軒でもあれば、農業には生産の秘密がありませぬから、經驗の恩恵は片手間農業の家でも之に均霑することが出来ます。又同じく副業を撰ぶにしても主たる業體と出来るだけ縁の近い者を採用せねばなりません。例へば原料が土地で出来るとか、生産品がすぐに土地で需要があるとか、副産物例へば残滓の類が土地で役に立つとか云ふことは、忘るべからざる要件であります。更に進んで兼業を採用するにしても、出来るならば此點を眼中に置きたいものであります。徳川時代には町と名の付く所でなければ町人を住ませず、村方に百姓以外の業體の者が住むことは非常に忌みましたが、醫者と坊主の外一定の職人だけは村にも永く住んで居りました。今日では却つて少なくなりましたが、染屋綿打鍛冶桶屋の類であります。生活の程度が進みましては、以前百戸の農家を交へた村でも、もはや七十戸しか農を営まれぬと云ふやう

になります。従て非農業者の村住は事實之を拒むことが出来ぬのです。ゆくゆくは種類によつては、大きな製造業も村へ来て工場を設けることにもなりませう。かゝる場合にも村はやはり其本來の目的、即ち土地を利用する爲に一定の地域に土着した祖先の趣旨を没却せず、僅ばかりの商工業の混じた爲に農法全體をだらけさせる事などは無く、どしどしと其天分の活計を改良して行かねばなりません。此決心は普通の慷慨家のするやうに時おくれになつてから急呼しても成立つものではありませぬ。必ず豫め將來を見越した村是を以て共同に誓約して置くべき性質のものであります。併し乍ら農を尊ぶの結果他の業體を輕蔑し、彼等を抑壓せねば此方が立たぬやうに考へる人がありますが、あれは誤であります。中央と地方とを問はず政治を講ずる者の目的は唯一つ、即ち國民の繁榮の外には何もあるわけはありません。故に小さき行政廳でも國の政府と同じやうに適當な努力の配布を以て遊ぶ人の數を少なくし、適當なる土地の配布を以て其利用を遂げ、更に適當なる資本の配布を以て一國一村として成るべく多くの貨殖をせねばなりません。而して既に配布と

言ふ以上は、各一私人の私欲ある判断にのみは任せて置かれぬことは明白の道理であります。苟くも公の爲に利益を講ぜんとする者は、箇人の希望注文の外に立つて別に一定の判断と見識とを具へて居らねばならぬのであります。何となれば國民の二分の一プラス一人の説は即ち多數説でありますけれども、我々は他の二分の一マイナス一人の利益を顧みぬと云ふわけには行かぬのみならず、假に萬人が萬人ながら同一希望をもちましても、國家の生命は永遠でありますからは、豫め未だ生れて來ぬ數千億萬人の利益をも考へねばなりません。況や我々は既に土に歸したる數千億萬の同胞を持つて居りまして、其精靈も亦國運發展の事業の上に無限の利害の感を抱いて居るのであります。故に苟くも一方の任を委ねられたる理事者は、公平なる眼を以て十分誠實にこの農業經濟の問題を研究し、且つ更に他人を導かねばならぬのであります。幸に拙者の意見に賛同せらるゝ諸君は徐に亦此説を其道々の人に御傳へ下されば忝き次第であります。

(明治四十二年七月 第一回地方改良事業講習會に於て)

個人の希望の集合は必ずしも村是に非ず

田舎對都會の問題

こゝに田舎對都會の問題と申しますのは、都會の繁榮は田舎の繁榮と常に併行するや否や、田舎の人間が多數都會に向つて移住する趨勢は結局如何に歸著するかといふ問題であります。此問題は外國では既に數十年前から、日本でも亦數年前から人のよく云ふ所の問題で、甚だ古臭い問題であります。今の時節こんな古臭い問題を持出しては恐れ入るが、私は問題の古いのに拘らず稍新しい意見を持つて居るのであります。

さて人口の都會に集注する現象、横井博士などの謂はるゝ都會熱なるものは、確かに我國に於ても之を認められます、争はれない事實であります。統計年鑑を一見しても分ります。例へば大都會に於ける人口の増率は日本全國の平均率よりも遙に上つて居る、田舎だけの人口増率は之に反して低くなつて居ります。而も都會に於ける大人小兒の死亡率は田舎よりも高くとも低い理由は無いから、差引都會で人口の増した部分だけは田舎の移住に因ると想像することが出来ます。又五年目毎に公にせられる人口の靜態統計を見ても、都會に於ては現在人口の數が非常に本籍人口に超過して居るのに、之に反して田舎は概して本籍人口より現在人口の方が少ないのです。御承知の通り籍を持つて引越をする人は少ない我々の如き渡り者は一所に落着いても一代か半代の間は寄留で居る、是が都會の現住人口を多からしむる所以であります。東京大阪神戸などは無論であります、近來は此外に呉とか横須賀とか其他工業の發達した所では、一般に斯の如き狀況を呈して居ります。人口の集注は争はれない趨勢であります。此點に付て私は別に異なつた考を持つて居るのでは

ありませぬ。唯私は從來多勢の學者が同じ方向を向いて論じて居られるに拘はらず即ち世に定説があるに拘はらず、自分獨は比較的樂觀を抱いて居るのであります。外の人のやうには悲觀して居ないので。さて最初に荒筋だけを申上げて置いた方が都合が宜しいと思ひますから一言しますが、私が比較的に樂觀をして居る理由は何かと云ふと、第一には此人口集注の趨勢が稍近來に於て反動の兆候を顯はし始めた事であります。是は天然にず人の力を加へずして自然に反動の兆候が現はれて來たことが一つであります。それから第二には國又は公共團體の政策の力を之に對して施し得べき十分なる餘地があり、しかも面白い結果が現はれて來る見込のあることであります。この二つの理由からして私は外の人よりも樂觀を抱いて居るのです。其反動の兆候とは如何なるものか、政策の力を施し得べき途とは何を意味するかといふことを是から申上げたいと存じます。

元來人口の都會集注、即ち今時田舎の若者が都會へ出たがる傾は、人類發展の理法とでも言ひますか、心理上經濟上極めて自然なる趨勢であります。如何なる手段を施しても絶對的に之を防ぐことは出来るものではありません。併し之に由つてすぐに悲觀説を唱へるのは又稍速断であらうと思ひます。何となればまだ茲に此趨勢の歸する所良か悪かと研究すべき餘地があるからであります。日本の學者の通曉して居らるゝ英國の經濟史は、人口集中の結果惡なる一例を示しましたが、外國でも時代と國柄に依つて一概には言はれませぬ。英吉利の農村人口の減退は尤も著しい。是は彼國が自由貿易主義を數十年間採つた爲だと申します。何しろ昔時は立派な村であつた場處が、今では草原になつて羊が放して在る、全國の農産總額は確に減少した。之に對しまして一部の論者所謂アラーミスト、日本語で申せば早鐘突きの論客は頻に現行政策を非難し改良を逼ります。而して此議論は理由のあるものであつて、誰が見ても此現象は國民經濟の病でありました。同盟國の未來の爲首を傾けねばならぬことあります。次に北米合衆國の東部諸州の農村では、人口が段々

に少なくなつて來て、荒蕪した農場が出來たと云ふことを屢々書物で見ますが、是は幾らか英國とは事情が違つて居るかと思ひます。彼國では五十年前には大平原を越えて西に移住することが不便であつた爲に、地味肥沃なる大地積を度外視して居たものが、汽車の交通が開けた爲に、全國中を比較して土地を選択するやうになつたのであります。交通が進歩した爲に瘦せた耕地が素地に還へるのは必ずしも悪い現象では無いのです。尤も此と同じ時に彼國では市街地の人口も非常に増加して居りますが、是は英國などの如く、田舎から人口を吸取つたばかりでは有りませぬ。一部分は偏鄙の不便なる農場を棄て、都會の附近に移つた者もありませう、又農民の職工となつた者もありませう、併し米國では其外にまだ大きな原因がある、それは何かと云ふと愛蘭とか伊太利とか、獨逸とか支那とか日本とか、其他諸國から亞米利加亞米利加と言つて流込む勞働者の多かつたことであります。此點は英國などゝ違つて居ります。佛蘭西の人口移動の狀況は又英米とも違つて居ります。あの國では昔から田舎の若い衆は必ず一旦都會に來て働くさうでありました。今でも百姓

の息子は必ず都には出るが、どうかして出世するか、若くは相應に金が溜れば乃ち田舎に歸る。いつまでも住み積りで都會に来る者は少ない、自分の郷里の家屋敷を打棄て財産を引纏めて引越す者は多く無いと云ふ話であります。此の如く何れの國でも統計の數字だけを見れば都會の人口増加の田舎に超越して居ることは非常であります。さりとして極端なる英國の例を以て日本の未來を類推することは出来まいかと思ひます。日本の田舎の人は都會地に出ることは昔から盛であります。其結局は何れかと云へば佛蘭西的であらうと思ひます。即ち或る年まで働いて再び歸らうと云ふ者、田舎に根據地を置いて空身カラミで出て來ると云ふ者が多い。而して次男三男などの豫備の人間で、どうせ何處にか新に居住を定めやうと云ふ者ばかりが、歸らぬつもりで都へ出て來る。是も佛蘭西に似て居ると思ひます。要するに錦を着ても歸りたくなれば、難儀をしても歸りたくなる、自分が都會に引越すと共に田舎の家が無くなると云ふ者は先づ少ないのであります。それで先程申し上げました通り、都會地の現住人口が本籍人口より大に超過して居るのであります。是等國情の差

異は是非考へて見ねばならぬ。元來人口集注の趨勢は何れの國でも開明國と云ふ開明國には存して居る、文明と云ふものゝ有觸れた性質から來つたものであります。併し國々は皆特殊の歴史と法制とを持つて發達して居りますから、事情が皆ちがひます。假令外國が皆英國のやうでも、之を以て日本も此の如くなるべしと言ふことは出来ませぬ。先づ日本には日本の特別な理由があつたと云ふことを腹に置いて見なければなりません。

三

少しく古い問題に立戻りますが、日本は昔から都會の發達の爲に政策が非常に力を施して居ります。徳川時代になりましたも、税の取り方などを見ると一の領地で田舎と町との間に税率が甚しく差等がある、町方が輕いのであります。郡村宅地は上畑と同じ年貢を取られて居りますが、市街宅地は多くは宅地租として何等の租税をも取られて居りませぬ。現今はそれに反對で税が重くなりました。藤田幽谷先生の勸農或問には水戸藩の一例が擧

げてありますが、市街の住民が家普請をする時に貧乏で金に差支へれば藩から直に給與される。多くは貸付けるのでなくしてたゞで呉れた、然らざるもごく寛大なる條件を以て貸付けたものであります。斯の如きことは現今の市街地に於ては見る能はざる保護であります。此等を以て見ても、日本の都會地の田舎を凌駕して發達すべき傾向は、西洋文明の聊もはいつて居らぬ時代からあつたもので、原因を所謂産業革命の一點に歸し外國と一例に推し論ずることの出来ないことが分ります。

併しながら西洋と交通致した明治以後の歴史を考へて見ても、日本には人口集中の多くの原因があります。其一は政治上の中央集權であります。從來は地方の各藩悉く一つの政治上の單位を作つて、各一の中心と云ふものを有つて居りましたが、一朝にして東京が政治活動の唯一の中心となりました。第二段には縣廳所在地が近傍の小さな政治中心を併呑しました。議會でも何でも一切の政治機關が皆中央に集められました。この爲に都會といふものゝ社會的勢力の募つたことは莫大であります。現今田舎の町に區裁判所を二つ置く

とか、中學校を一つ設くるとか云つても、附近の各地方の間に烈しい競争がありますが、其競争の動機はどこにあるかと云ふと、つまり其土地の繁榮を欲するに在るのです。師團とか旅團とか置かるゝと言へば、學校や登記所はそちらに遣るから兵營はこちらへ寄越せと云ふやうに、何でも分け取奪ひ合であります。要するに政治機關の中央集注は日本の大都會をして一層發達せしめた一つの理由であります、それから今一つの日本で著しい原因は交通機關がごく緩慢に徐々と開發せられたこととあります。最初は東京とか大阪とか神戸とか云ふやうな、既に稍發達し始めた都會を中心として交通機關を作つたのであります。全國の交通が完全に行渡るまでの間、この交通便宜の懸隔と云ふことが頗先進市街の特恵となつて居ります。今一つの點は是は勿論日本ばかりでありませぬ、外國も同様であります。都會地に科學が發達し藝術が發達致して工業の爲に便益を與へたこととあります。近來になりましては段々理化學の知識が農業に適用せられて來ましたが、其以前久しい間は農業よりも工業の方に遙に其適用が多かつたのであります。一の例を擧げて見ま

新時代になりて此原因は増加せり

すれば蒸氣機關であります。日本で蒸氣機關を農業の爲に使つて居るのは例へば排水の機械とか水揚機械とか僅かのものであります。大農法の行はるゝ國では麥刈にも麥蒔にも蒸氣機關を使つて居るが、此とても農業に使ふやうになつたのは僅か二三十年來の事實であります。之に反して工業の爲に蒸氣力電氣力を使つたのはそれより數十年の前であります。是は單に一例に過ぎませぬが、兎に角學藝の大なる援助は農業よりも工業、即ち田舎よりも都會地に於て遙に早く且つ多く興へられ、従つて先づ都會地を發達させたのであります。次に工業は都會地と切つても切れない關係がある譯ではないが、交通が不完全である間は、工業をやるならば先づ商業の發達して居る所に依頼せねばならぬ。交通が十分開ければ斯の如き必要は起らぬが、交通は政治の中心點に向つて先づ開ける、商業は交通の開けた所に活動する、それで商業の盛な所に工業を持つて行くので工業が都會地に澤山起りました。それやこれやの原因で二三の市が著しく發達して來たのであります。要するに都會が田舎より先に發達するのは、必しも開明其者の當然の性質ではなくして、國により時代により

種々の原因が集合して此の如くなつたのであります。海外の諸國にも似たやうな傾向はあるが、それかと云つて一二の國の例を推して日本國の未來の爲に氣味の悪い豫言をせずともよろしい、是が私の一の樂觀であります。

四

此次には市街地が段々に擴がると云ふことも必ずしも一國全體から見て害ではないと云ふことを申し上げます。一個人から見れば無論害ではありませぬが、一國から見ても必ずしも害ではありませぬ。殊に日本の如く永住の積りで引越す者ばかりでない國は猶更であります。以前英吉利などで人口の都會集注の結果を悲觀し始めた時代には、都會地に於ける勞働者の生活と云ふものは非常に淺ましいものでありました。勞働者は景氣が宜ければよい給金を取りますが、仕事が一朝不景氣になれば何時でも突き離される。企業家の家畜のやうなものであつて、職工組合その他の共濟機關も極めて微力であつたのです。又住宅の

衛生や教育の設備も不充分であつた。それは／＼不完全なものであるのを知らずに田舎から出て來ては難儀をする。田舎の勞働は骨が折れても之に比ぶれば遙に安樂境である、之を罷めて滔々として都會に赴くのは個人の利益からは勿論、國家としても坐視すべき形勢ではなかつたのであります。併しながら此状態も亦半世紀前の歴史でありまして、其後社會改良の事業といふものが非常に進んで參つて、都會地に住んで居る勞働者の生活程度は著しく幸福になつたのであります。それでもやはり都會に出た爲に墮落してしまふ者が出來ますが、先づ熱心且つ勤勉で道徳上缺けたる行の無い者は、都會地に居つても必ずしも不安固なる生活をせんでも宜しい、相應に安全なる生活上の地位を保障せられることが出來て參りました。その一例を申せば彼の勞働者住居問題であります昔は田舎ではどんな貧乏人でも百坪と八十坪の宅地は持つて居た。然るに都會地では地價が高いから穢らしい牛小屋のやうな裏長屋の借住で、おまけに家賃が高い。それでも小さな一室の中に親子兄弟成長した息子も娘も一緒に固まつて寢る。其結果は勿論衛生上德育上有害でありました。

是が近來では社會政策上の一大問題となり輿論を喚起致しまして、建築組合等が出來て段段其改良を力めた結果、餘程善くなつて來たといふことで、現今の所では却つて田舎の勞働者の家屋若くは食物の状態の方が悲しむべく悪いといふことは普通言はれて居ることなのであります。要するに都會の勞働者の生活とても、五十年前に人が騒いだ程に不幸のものではない。これは外國の例であります、日本も同じことで、大都會の裏面には随分なさけない生活をして居る者も少なくはありませぬが、これでも勞働者の爲に耐へられないと云ふほど激しくは無いと思ひます。勿論金持の生活と比べるとは無く田舎の勞働者の生活と比較しての話であります。又教育の機關や衛生の設備等も田舎に比して進んで居るやうに見えます。之に由つて觀ても田舎の小民が都會に移住するのは彼等に取つて必ずしも生活上の墮落でないことが認められます。又一方から見れば、日本の如く一時都會に移住致しても亦再び田舎に引還すと云ふ習慣がまだ行はれて居る國では、此の如き人口の移動は一の生産力の分配方法であります。田舎に餘つて居る勞力を都會に供給し、都會に餘

つて居る資本を田舎に持つて行く。元來資本と勢力とを平らに全國の各産業間に配布するのが經濟政策の極意ゴクイであります。此目的を不十分ながら天然に爲し遂げるのであります。之を見ても此現象が社會の爲に必ずしも害ばかりであると言はれぬことが分ります。

五

併しながら田舎と云ふものゝ立場から考へて見ますと、假令勞力に餘剰があるにしても、壯年有爲の人間ばかりを失ふと云ふことは誠に坐視すべからざることであり、其爲に都會の方が先づ發達して田舎の方の發達がどうしても活潑で無い。村が段々淋しくなつて其生活のつまらぬことが著しく目に立つ、從て元氣のある者は愈々飛出す。之に付ては何か一つ節制の方法が無ければならぬといふのは尤なる説であります。處が幸なる哉、こゝに政策よりも有力な天然の反動が現在既に現はれつゝあるのです。其反動とは何かと云ふと、一つは都會の人が非常に田舎を愛すると云ふ傾が出来て參つたことであり、

昔も江戸の人は春秋には江ノ島鎌倉、遠くは伊勢大和の方までも見物に出ましたが偏鄙の田舎へまでは出掛けることが少かつた。然るに一は贅澤から來た考もありましたやうが、段段都會の人口が多くなつて、此通り日々がらくと電車が通り埃が立つて甚だるさい。又銘々の生活が非常に繁劇であるに付けても、少し暇をこしらへて田舎に行つて遊びたい、休息したいと云ふ考を起すのは自然の事でありまして、親代々長く東京に住んで居る者の田舎に別莊を持つものもありません。又若い時に東京に引越して來た人間も、少し金が出来れば旅行でもしたいと言出す者もある。今一層金が出来ればどこか靜な所に善い地面はないかなど云ふやうになる。是が眞に田舎を愛するのであるか否かは別問題であります。兎に角都會が大きくなるほど、上も下も都會の人が田舎をゆかしがると云ふことの多くなるのは事實であります。今擧げた例は金の有る人の身の上であります。金に縁の無い方面でも亦同じであります。曩に時事新報が二三度企てました慰安旅行の計畫が非常に良い感じを與へたのを見ても分ります。知つた振をするやうであるが、社會生理の側から説

明しても、烈しい生活をする者は濃厚なる休息を欲するものである、又繁劇な勞働をして居れば繁殖力が衰へるから、靜なる田舎に住居して更に繁殖力を養ふの必要を見る、つまり極めて自然なる趨勢であります。それから今一つの反動は何かと云ふと、即ち製造事業の中心が前には必ず都會にあつたものが、近來は次第に地方に放散して行く傾があることであります。是は一々例證を擧げんでも事實と認められませう。發達する都會地では日に月に地面の價が高くなる。商賣をするには九尺の間口でも相應に出来るが、工場には大分の面積を必要とする、機械などを据付ける爲には三階四階と云ふ建築物は實際出来ないものであつて地價の高いと云ふことは工業者には大變にこたへます。非常特別税の御蔭で市街宅地の税が高くなつても、地面の儉約をすることのできぬのは工業者であります。それから消極的原因では曾て交通が不完全であつたものが、近來は稍々完全になりました。是で澤山と云ふのでは無いが、兎に角本土の端から端まで汽車で通して行くことが出来る、海運の方も統計の數字から見ると進んで居る。是等の爲に遠く市場と掛離れた所に工場を持つて居つても販

路の爲に必ずしも不利益でない場合もあります。富士製紙は大宮に工場を置き、北海道に分工場を置いて東京大阪の市場を失ひはせぬ。此類の工場が澤山田舎に出来て参りました。殊に信州の製絲、兩毛の織物などは始からわざと地方に工場を建てたのです。是等は皆皆交通の關係上必ずしも都會地を占めて業を営む必要が無くなつたからであります。

それから原料との關係であります。紡績の如き、其他輸入の原料を仰いで居る事業であると、輸入港の附近に工場を置く必要があるかも知れませぬが、原料を國內の粗製品に仰ぐ所の工業は、運賃其他の點より原料生産地に近い土地を選ぶべき場合が多くあります。是は我國のみでなく、米國でも製紙工場を森林の豊かなる田舎に移す、製銅事業が鑛産地に近き北方大湖の沿岸に移るといふやうに、追々と原料産地を狙つては都會から引上げて行きます。以前から都會と云ふ言葉の外に別に工業地と云ふ名稱はありましたが、近頃は愈々二つの語の意味が離れて來ます。是は、段々日本にも現れて來る現象でありませう。原料産地に近い土地に工場を建てるに今一つの便利は、勢働者を集めるに多くは非常に都

合が宜しい。田舎の勞働者は移動集注して困ると言ひますが、まだ是でも都會の工場に使ふだけには足りませぬ。工場が田舎に移れば農工兼營の勞働者も得られます。西部獨逸の小農は半分は兼て其收入を工場鑛山等の農業以外の勞務より得る者だと申します。地方に在る工場は必ず住民の收入總額を増します。さて田舎の人口が都會に向つて集注する主たる原因の一は工場が都會にあること、都會に於ける勞働の收入の多きことであつたと致せば、田舎に工場が多くなつて來ると云ふことは、都會集中の勢力を稍殺ぐ者であると言はねばならぬと思ひます。

六

元來日本の現状に就て見ますれば田舎の勞力と云ふ者は餘りが澤山あつたと言はねばなりません。第一農民の勞力を施し得べき耕地の面積は維新後四十年の今日迄に餘り増加しては居らぬに拘はらず、人口は明治の初年と比べると六割も七割も増して居ります。其増

して居る人口の半分は都會に増したとしても、亦田舎の部分にも著しく増して居ることは認められます。田舎の勞力の餘りのあることは是だけでも分ります。それで私共の考へますには、智慧があり氣力がある田舎の住民が都會に向つて移住を企つると云ふことは其人に取つては少しも誤つたる方針ではない。鑛山の盛な九州地方の如きは別でありますが大體から見れば田舎の勞力は今日まだ餘りがある。是は言換へて見れば價が安いと云ふこととでありまして、勞働者が都會に向ふのはやはり其勞力を高く賣るが爲であります。故に馬尼刺マニラにも行けば南米にも行く、寒い北海道樺太にも出掛けます。是皆從來安かつた勞力を高く賣るが爲で、必ずしも繁華な都會にのみ向つて行くものではありません。それで都會熱と云ふ言葉の起りましたにも、色々の理由がありませうが、私共一個人として考へて見ますれば、若い人達が其收入を多くする爲に地方から出て參ると云ふことは、是は如何の間違ひではない、熱病では無いと思ひます。成ほど年を取つての都會生活は或は田舎に居るほど安全では無いかも知らぬが、是はつまり言へば未來と今とを天秤に掛けたので、後

の百より今五十、手形の割引をして貰ふのも同じです。例へば未來の安全を犠牲に供して都會に來て達者な時だけ愉快に暮すのも、一個人としては經濟上の計算を誤つては居りません。又經濟上の理由を外にして都會に行けば面白いことが見られるだけ良い、又旨い物が食へるだけ良い、新聞を朝見られるから良いと云ふやうに、生活趣味を重んじて利益を第二にして都會に來た者があつても、是を責めることは出來ない。それは其人々の考へ次第であつて、「假令貧乏しても宜しいから色々な目に遭つて見たい」と云ふ人間は随分あります。なぜ貧乏を甘んじて外の欲望を抱くかと言つて責めることは出來ない。併し田舎から都會に出て來る人にはそんな變り者は少ないので、どちらかと云ふと皆利益の爲であります。然らば愈々以て健全なる經濟人の所爲判斷で、些も誤つては居らぬのです。なぜ私が斯の如きことをくどく申すかと云へば、人によつては是は個人としても亦誤つたる行爲であるかの如く言ふものがあるからであります。

併しながら茲に一つ個人としての利不利に付き考ふべきことで考へられて居ないことがあります。枝葉に互りますが序に申し上げます。それは家の永續と云ふ問題であります。都會に住むと祖先子孫といふ思想が微弱になつて、家といふものゝ存在が屢々軽く視られる六つかしいへば個人の意思ばかり烈しく現はされて、家の生活が其底に没却せられます。田舎に住めば岡の麓に住居の有るのも、川の岸に田を作るのも、乃至は何郡何村に住むといふことも、皆自分の意思では無く家の意思である。祖先が家を繁榮せしめんと欲した意思を子孫が行ふのであります。名家門閥は勿論小前でも水呑でもめい／＼幽かながら家の傳説を持つて居る。田舎の生活が健康に適して居る爲もありますが、此の如くして十代も二十代も自覺して始めて家がつゞくのであります。之に反して一旦都會に住めば舊記や系圖は火事で焼ける引越で無くなる、苗字は同名を判別する符號に止まり、祖先と自己との脈絡はすぐに絶えます。それは子供も澤山に産めば愛することも愛するが、其恩愛は到底まだ生れぬ孫の子、孫の孫に及ぶことが出來ませぬ。従つて聖天様に祈つて子孫七代の福祿を吸上げる位は何とも思ひませぬ。此の如き所行は若し人が知りつゝ行つて居るならば道

徳上の問題であります、知らず識らず此結果を招くのならば一旦は注意をしてやらねばなりません。道德上の問題としては中々六つかしい、人は自殺し得るの権利ありや否やの問題とよく似て居ります。基督教の教義では自殺を許しませぬが、日本の固有の宗教では阿蘇や華嚴に對しては頗寛大であります。之に反して家の自殺に對しては昔は重い社會的制裁がありました。否ドミシード即ち家を殺すことは、假令現在の家族に一人の反對が無くとも、生れぬ子孫の事を考へれば自殺ではありません、他殺であります。自分の子を殺しても同じく殺人罪であるのに、子孫をして生きながら永久に系圖の自覺を喪失せしむるのは罪惡ではありますまいか、國に次で永い生命を持て居る家を一朝にして亡すと云ふのは、果して戸主の自由に爲し得る行爲でありませうか、而も今日は永住の地を大都會に移すのは十中八九迄ドミシード即ち家殺しの結果に陥るのであります。私は敢て茲に斷定は下しませぬが、自分の計算、自分の都會を基礎として都會に移住せんとする人に、豫め必ず此點を一考させたいと思ひます。而して此點は國家に取つても亦大きな問題であります。

各人と其祖先との聯絡即ち家の存在の自覺といふことは日本の如き國柄では同時に又個人と國家との連鎖であります。現在ならば少しく穿鑿すれば歴史上の忠臣義士は我々の祖先であることがわかる、漠然たる感じでなく具象的に祖先の意思がわかります。祖先が數百代の間常に日本の皇室を戴いて奉公し生息し來つたといふ自覺は、最も明白に忠君愛國心の根底を作ります。家が無くなると甚しきは何故に自分が日本人たらざるべからざるかを自分に説明することも困難になる。個人主義が盛んに行はれて來ますと外國の歴史も自國の歴史も同じやうな眼で見るやうになります。米國の如き寄合の新國でも頻と百年此方の歴史を書立て、移住したての愛蘭人まで大統領華盛頓の子孫でもあるやうに言ふのに日本の如き由緒ある國民が系圖を捨て、なりませうか。併し、是は餘程やかましい議論であつて、反對説も随分あらうと思ひますが、兎に角國から見ても個人の倫理の側から見ても、一個人が家の永續を輕んずるといふことは有害であることだけは確かであります。但し是は先程申しました一時の移住者には當嵌らぬ議論であります。

要するに右の一點を除きましては、田舎の人が都會に集つて來ると云ふことは、個人として智慧の無い誤つた行爲とは言はれませぬ。東西を知らぬ赤坊が井戸に落ち掛つて居るのに例へることは出來ぬ。従つて如何に權力ある命令でも之を禁止することは出來ませぬ。如何に世の中から重んぜられて居る學者でも、目下の經濟事情に在つて判斷すれば、之を以て個人を責むる權利は無いのである。只私の言はんとする所は此點ではないので、此事實が一軒の家には兎に角、一國の生存維持の爲に果して利であるか害であるかと云ふことを研究して見たいのです。是は全く個人の問題とは別でして、假令個人生活の方針としては尤千萬なる行爲であつても、一國の國運の上にとつて其結果悪であれば無論之に對して相應の方法を講ずべきであります。それで人口集注が國の爲に悪であるや否やと云ふことを簡単に述べて見たいと思ひます。

七

前にも申した如く、元來一國の經濟政策の眼目は、勞力と資本とを適當に全國の中に配布せしむることであらうと存じます。一方の産業には資本が餘つて居るが、他の一方には資本が缺乏して居ることがある、勞力も他の一方の餘つて居る所は安くて其日暮しの収入しか得られぬ者があるが、他の一方には割合に高い給金を貰つて居る者があると云ふ如く全國中勞力なり資本なりの配賦が偏頗であつてはなりません。此點は殊に田舎と都會との二つに分けてよく考へて行かなければなりません。從來の政策では既に失敗して居る事例が幾らもある。銀行といふ機關はどこまでも都會の機關であるのに、此機關を以て一齊に全國の金融を計らんとしたのが爲に失敗したことは、彼の農工銀行に於て今日まで其痕跡を留めて居ります。又同じく金融の充實を圖るにしても、常に中央を主眼として策を立つる爲に、どうも資本が都會に片寄り過ぎる弊がある。郵便貯金なる者は全國中で最も

安全なる貯蓄機關であるのに、其金額を擧げて使用の指揮權を中央で統轄して居る。又地方にも澤山銀行はありますが、多くは小弱で都會の銀行の支店が概して有力であります。獨立して居るものと申しても亦東京の銀行を後見に持つて居る。其爲に地方の小銀行及支店の預金は皆中央の資力になつてしまふ。保險會社に於ける資金の集散も同一筆法で、あらゆる手段を盡して農村の貯蓄を中央に集めます。それで中央では未だ田舎の資本が充實せざる前に、之を滿韓の經營に使ふとか、或は外國の鑛山鐵道に卸すとか餘つても居らぬ金を國の擴張政策の爲に外國に投資することが多い。此の如くすれば地方の小さなジミな産業に資金を供給する途は永久に無いので、金融政策に於ける中央集權の弊は全く是であります。そのみならず銀行と云ふ機關は徹頭徹尾商業若くは工業の機關であるのに拘らず、之を基礎として田舎の金融を開發して行かうと云ふやうな方針を執りました爲に、忽ち目的と掛離れた結果を呈してをります。少し行き過ぎて居る説かは知りませぬが、公平に言へば資本の配布に關する今の政策は餘り巧妙を極めては居りませぬ。現在の經濟狀況

より判斷して、如何に田舎と都會との間に資金を配布すべきかの問題は改めて大に研究せねばなりません。自然の經濟調和にのみ放任して置くわけにはまゐりませぬ、厚薄何れとも國是を定めて政治にかゝらねばなりません。日本でも古い所を申し上げますと田舎が富んで居つて都會が貧しかつた時代があります。京都の朝廷の威令が地方の端々迄に達しなかつた時代には、田舎の方が餘程金持ちであつて、田舎に參り地方官となる者は自在に懐を肥した。上下親類縁故に見限られて居る京都の貧乏役人が、田舎に行けばすぐに生活が樂になつて綺麗な着物を着て歸る。商人も京都では住はれないで田舎に稼ぎに行く。越前の利仁將軍でも奥州の秀衡でも皆萬福長者でありました。そこで貴族でも商工業者でも機會のある毎にどしどし田舎に引越して行くと云ふ有様でありました。斯う云ふ時代が随分長く續いたのであります。是は當時の政治の風が其原因の一つであつたので、現今の中央集權とは反對に、事實甚しき地方分權であつたから、田舎に富が集つたのです。下つて足利時代になつてもどちらかと云ふと小さな町場より村落に居住する地持百姓の方が工面が良

くして、とんと都會が振はなかつた。是に於てか大に町を盛にする政策を行ひました。丁度現在と正反對の形勢であります。卑近な例は庭訓往來を御覽になつてもわかる。新町を興行し種々の保護を興へて商工業者を移住せしめることが見えます。又牛馬といふ狂言にも新市を興行し目代を設け早く來て一の杭に牛又は馬を繋いだ者を町の司にするといふ高札を立てる或は新宿を設けた者に七年十年の荒野を申付ける、即ち今の歙下年期であります。此等はよく古文書に見えてをります。大小名が平地に居城を設けるやうになつてからは、又其城下を繁榮させる爲に頻と移住者を奨励保護することを政策の根本としました。先程申しました水戸藩で城下の町家に普請の資金を貸渡して保護主義を執つたのも、亦此政策の踏襲で、最初は皆今と反對に田舎の富の力が都會より非常に先きに進んで居る爲に町を保護したのであります。さて明治三十九年の今日はどう云ふ有様であるか。田舎と都會との資力平衡如何と云ふと、資本に付ては前申す通りで田舎に餘力を集積する方便が備はりませぬ。地方にもよりませうが、大體の上から考へて見ますると、次第に田舎よりも

權衡上都會が片重になつて行くやうである。語を換へて申せば、田舎の生産の制限制肘は都會よりも多くなつて行く。又田舎の勞働は智力より腕力を要する方が勿論多いけれども今後の農業には智力も最も緊要である。然るに雙方引括めた勞働の合計數に於ては餘り減つて居りませぬが、比較的良い勞力ばかりを都會に吸取られると云ふことは争はれませぬ。此點に付ては都會集注の弊を論ぜられても異議がありません。即ち數量に於ては田舎の勞力は未だ缺乏しませぬが、品質に於ては餘程著しく減じつゝあるのであります。政策を立てるにはよく此點を考へねばならぬ。勞力の品質の減退はつまり其生産力の減退であります。他の生産要件が同一でも之を運用する勞力が劣つて居れば、十萬圓の生産があるべきものをみす／＼七萬圓で甘じてしまふ。故に品質に就ても亦勞力が田舎と都會との間に均等に配布せらるゝことを期せねばなりません。又先程申しました通り、越前信濃から出て來て湯屋に奉公し搗米屋に奉公した者が、皆年期を勤め上げて再び親許に歸つて行けば宜しいが、町を歩いて見ると上總屋信濃屋甲州屋などゝ云ふ暖簾の澤山にあるのを見ても、

東京に來たまま歸らぬ人も中々有るので、成功した人及成功しさうな人即ち品質優等の勞力は往々郷土を去つて復還らぬのであります。出稼人の十中七八迄は再び歸村するからとても中々安心は出來ませぬ。又猶一つ考ふべき點は同じ田舎に歸るにしても歸つて住まふと云ふ場所がちがふ。自分の在所は大變山の中であるから、一つ繁華な所に近いか又は魚の食へる海岸に近い所に住居を持たうなどと云ふ者があつて、都會地附近の平地が人口が殖えて來て、山間地方の人口が減つて行く、是亦勞力配賦の均衡を保つといふ點から見れば、田舎と都會との間に不平均を起しつゝある趨勢と同じく患ふべきものであります。

八

さて茲に御注意を願ひたいのは、私の問題は兎に角政策上の問題でありまして、農業經濟上の問題ではないと云ふことであります。農業經濟では農業者が一たび農業を止めて田舎から東京大阪等に引越して來た以上は最早關係はそれきりである。如何に農業經濟の上

から引越しが宜しくないとしても、本人は既に商業經濟又は工業經濟を研究せねばならぬ人間であれば、殆ど問題にはなりません。即ち個人經濟の上から言へば學者の呼號の力は極めて微弱であります。然るに往々農術の見地から都會移住を諷諫する人があるが、それは議論が適切ではありません。又農業者の利益代表の團體とても、本來農を廢業する必要なき人ばかりの集合であるからして、其人々の國の政策に對する種々なる注文を以て、直に移轉防止の妙策と認めることが出來ない。つまり我々の如く農を營むと否とに關係なく誠實に國の爲に經濟の未來を考へる者に判斷させねばならぬのです。又假に商工業は到底農業と利害相容れぬ者であるとしても、憲法の保障に依り職業居住の移轉の自由なる今日何時裏切して商工業者となるかも知れない農業者を糾合して、是が對抗策乃至は防衛策を講究する譯には行きませぬ。要するに少しく惋惜に過ぎたる議論ではあるが、今日の政策は現在の有形の儘でどうかせねばならぬと云ふ說、此人間が零落すると困るとか、此人間が損をする困るとかいふやうに、常に有形の儘で保護しよう云ふ考が多くして、今日

は言はゞ姑息彌縫の手段が多い。従つて農業者の團體の手前勝手な注文を聴くか、工業者仲間の手前勝手な注文を聴くかどちらか二つの一つに極めるから、交々コモク雙方から恨まれてさつぱり筋合が立たぬことになります。分り切つたことのやうであります。やはり多数の勢に押廻されるのです。元來經濟界の發展即ち未來はどうなつて行くか、農業はどう云ふ風に發達して行くかと云ふことを研究するに現在の農業者と相談をした上で議論をするといふことは出来ないであります。自ら農業の局に當る人は概して全般の變遷を豫察することは出来ませぬ。慾目もあれば手前勝手もある、迷もある。假に優れた智慧のある人があつて、農業の未來田舎の未來を研究すべき場合ありとすれば、其人は是非共銘々の職業が農業者であり若くは地主であるに拘はらず、其時は一人の國の政治家として考を立てねばなりません。此點は餘程考ふべき餘地のあることでもあります。大日本農會の如きは農業者の團體であつて同時に人格を具へた立派な公人である。公人は利益を計る必要は無いのであります。自分の懐を肥やす必要の無い人である。従つて其判断は常に公平であり得

る。又其意見を發表すれば社會は安心して之を聞くことが出来る。大日本農會の事業として此問題を研究するとすれば、我々會員は必ず周圍の情實から離れて一國の未來如何、一國の繁榮如何と云ふ廣い意味から考へて見ねばならぬ。殊に田舎と都會との人口調和の問題になると、單に田舎の人口が減つて困るから東京に往つてはいかぬと云ふやうな手前勝手なことは言はれない。たつて往く者は是非も無いが、何とか村方に安住して活計の道を立てさせたいと考へて見ねばなりません。此頃行政團體即ち府縣とか町村とか云ふものゝ政治のやり口は、どうも一方に片寄つて多數の私人の利益に合致したものを行へばそれで宜いと安心して居る傾きがある。ひどく言へば政治の重大であると云ふ確信に乏しい。殊に市町村に至つては最も甚しい。例へばこゝに百人の住民があつて其五十一人が賛成すれば残りの四十九人中如何に痛苦を感じるものがあつてもそれが適當なる政治といふことになる。是はあとから生れて来る子孫の町村住民に對して非常に無責任千萬な話であります。現在生きて居る人ばかりが日本國民ではない、日本國家は千萬年も續かねばならぬ、我々

日本國民は何億兆もあとに控へて居るのである。一個人が私事を經營するには自分の利益に依れば宜しいのに、それでも子孫の計をする。況や一國の經濟政策の未來を考へる時は生きて居る人ばかりの利益の赴く所に任せてならぬのは當然です。是は必ずしも此問題の爲に立てた議論ではないが、どうか田舎と都會との勞力配賦と云ふ問題は、國としてとくと研究したいと思ふばかりに此の如く餘談に互つたのです。

九

さて然らば國民の永遠の利益の爲に政治をする國又は公共團體の立場から考へて、人口の適當なる配布の爲に採るべき政策は如何と申しますと、自分とても格別速效の妙案がある譯では無いが、先づ最も手近なる一策としては最初に申しました所謂反動の趨勢を利用するのであります。例へば都會の住人が何となく田舎をゆかしがるのは至極妙である、故に力めて田園の趣味を鼓吹するのであります。近來歐米の諸國でも之に就て大變研究して

居るらしく見えます。かの「鄙の中に都を、都の中に鄙を」と申す流行の語は、つまり田舎の生活を改良し、從來都會にのみ備はつて居つた健全にして且高尚なる快樂を成るべく田舎にも與ふるやうに力め、更に都會の方の人たちには田舎生活の清くして活々とした趣味を覺らせるやうにすることでありませう。學校に行く子供の爲には狭くとも周圍の地面に花園を作つて與へ、又二階三階のごちやごちやした所に住む者の爲には意園藝、物干場園藝等植木鉢栽培の智識を開くの便宜を與へ、力めて天然に接觸するの機會を多からしめ精神を怡ばしめるのであります。我國に於ても都會の人間に田園生活の趣味を解せしめる機關を段々發達させて行くことは最も必要であります。單に伊勢や京都や奈良や乃至は温泉海水浴の村々のやうに、金の有る御客さんを澤山迎へて金を儲けやら様といふ考ではなく、猶一步進んで之に依つて終には田舎の生産力を養ふ爲に新土着者を迎へる策を計るのであります。言換へて見れば、とらから都の塵の中で歸去來の感を抱いて居る人に、成るべく容易に其目的を達するの手段を與へるのであります。人によると田舎の人は質朴單純に出

來上つて居るのに、狡猾なる都人士を容れると折角の田舎の質朴を破ると申す者も居りますが、是はへつぽこ詩人でも言ひさうな言葉だと思ひます。事實を見れば分ります、田舎の人でも必ずしも絶対に單純とは言はれない、又都會の人間でもスリや泥棒ばかりではない。奢侈の風を傳染させると申しますが、元來節儉といふものは銘々の道徳上の判断でありまして、今の世は最早無智無見聞の爲に知らず知らず生活の欲望を缺いて居る者を其ままとつとして置くべき時代ではありません。寧ろ進んで勤儉の有難味を教へて新來の土着者をあべこべに感化せしむべきであります。要するに是から田舎の生産力の繁榮維持を計るには、勿論現今の舊農民を保護して田舎經濟の攪亂を防止すべきであるが、或程度までは農民の數の減少を覺悟して別に補充の途を講じなければなりません。田舎を去る人々は個人から言へば立身しようと思ふ尤な希望から來るのであるから、到底舊農民を現在の數で永遠に維持すると云ふことは出來ない。然らば如何にして補充に必要な新農民を作るべきか、如何なる方法を以て新なる分子を入れるかといふに、昔の如く田舎を以て都會の

生存競争の失敗者や半人者の隠れ場所とせず、更に進んで相應の招致方法を立て、是非共智力あり資力ある者を歓迎して、段々に新田舎を作つて行かねばならぬのである。然るに今迄は之に對して大なる障害が幾らもあつたのであります。從來の障害と云ふものは、先づ工業が地方に發達しませぬ爲に、新に田舎に土着しようと思ふ企業家でも勞働者でも多くの舊農家の中に潜り込んで新規に生産を開くことは困難でありましたが、近來は此不便が取れて段々工業が地方に發達する見込が出來たから宜しい。地方に工業が起れば其地の原料を使ひ商業も盛になる、舊住民の生活も樂になります。尤も我國に農事改良の進めぬのは小農業者の副業の數が多過る爲でありますから、農業其物を改良進歩させる爲には勿論農業ばかりに全力を擧げ得るだけの充實せる資力ある農民の相應に有ることを望まねばなりません。英はさりとて農業だけでは生活し兼ねる者を強ひて農なり工なりの一方に片付けることは出來ないから、先づ以て小農の收入の道の増加するのを悦ばねばなりません。英獨等の田舎の小民は日本とは反對に工が農を兼ねるのであります。日本では農が主で他

業を兼ねるのであります。故に前の二國では此の如き兼業農に對し農事改良の奏功を責めませぬが、日本では政府がまだ彼等をあてにして居ります。實際是等の人々は直接に發明して農事の改良に貢獻するには充分でないが、兎に角田舎を繁榮せしめるには非常に必要なる機關である。是等の人民の爲に其收入の不足を補ふ手段を造るのは確かに必要であります。邊鄙な所では二段歩でも三段歩でも借りられるだけを小作して食へても食へないでも農業の外に業が無いといふ處がある。かゝる村落を衰微させまいとするには、新資本新頭腦の輸入は唯一の適藥であります。幸に近來は工業が大分地方に分散するやうになりました、良き傾向であります。併しながら第二の不便と云ふものは是は如何ともすることが出來ない。昔から長い間存続して居る此不便障害は何であるかと云ふと、新に外からはいつて來る者を嫌忌する傾、即ちよそ村の者を排斥して昔の郷黨ばかりが水入らずで暮さうと云ふ至當なる希望であります。これにも尤な仔細があつて、昔は新に村に來住する者は徳川時代ならば尾羽打枯した浪人とか、怪しい掛落者とか、有難くもない犯罪人とか云ふ人

間で、屢々其爲に迷惑した爲、今だに外來者に對して疑の心を持つて居るので、つまり永年の因習であります。併しそれ等の關係はなくとも、とかく外來の者を虐待する傾があつて、村方の現住人口は段々本籍人口より少なくなり、土地には未發の餘力があるのに、やはりまだ外來の勞働を排除して獨占をしたがる。國は外國人を尊重するが村は外村人を粗末にする例へば税なども都會に比べると地方税は田舎が輕いとは言はれない。殊に學校とか試験場とかを郡以下で維持する所の町村民の負擔は中々大きい。之を配布するには兎に角人望なき資産家が餘分に負擔する、殊に外來者が新に家を持てば其財産などは十分に評價せず税を多くかける。是は多數の決議に従つてやるから如何とも出來ない、困つたこととあります。此爲に田舎の生活を慕つて折角田舎に住はうと思ふ者があつても恐れてしまふ。此の如き障害は廢さねばならぬのみならず、土地によつては尙進んで更に多少の便宜をも與へねばならぬ時節であらうと思ひます。併し各町村が自ら我地方には人口を外部から補充する必要があると云ふ判断を下すのは中々困難であります。それよりは郡なり府

縣なりが機關を設けて調査を遂げ、某地方の人口は缺乏して居るとか、補充の要があるとか云ふことを判断させたらよからう。而して町村たるものは此判断を參酌して、新民招致の爲に單に從來の障碍を除くのみならず、猶積極的に案内の公告なり、土地賣買の仲介なり、村繁昌の法としてよき住民を擇び取ることを力めるがよからうと思ひます。北海道は御承知の通り移民奨励の方法が立てゝあつて、運賃減額其外種々の便宜がある爲に、年々移住が澤山あります。而して北海道南部と人口稠密の度に於てはあまり違つて居らぬ東北の田舎では、勿論移住者が無い。國が古くて人の好奇心を起さぬ爲もありますが、一つは政策の立つて居ると居ないとの結果です。若し僅々一割か一割五分の新分子が、此の地方の田舎に散布せられて居たなら、或は二年も引續いて飢饉の慘害を被らなかつたでせう。此は一例でありまして決して東北の爲に論するものではありませんが、要するに新に特惠補助の道を開くことは或は出来なくとも、せめて新移住者を邪魔にし馬鹿にすることを止めさせたいものであります。此は町村に對して云ふのですが、國の政策としても、常に人口

移動の趨勢を注意して居つて、又一般に都會住民の歸農歸村に對する障碍を除いてやらねばなりません。

10

所が之に對し更に今一つの障害がある。是は精しく申上げれば非常に時間が掛りますが元來昔から山林とか原野とかまだ人工を加へて居らぬ土地に對しては實價より價值を軽く見る癖があるに反して、既に耕作した田畑に對しては人が之を重んじ過ぎる風があります。田舎の地主の如く農業も何もせぬ人の爲に計算して見れば、安全の度に於ては土地に劣らぬ公債とか満鐵株といふやうな投資方法がいくらもあるのに、之には安んぜずして子孫の爲には唯田畑を買ひたがります。一種心理上の現象とでも言はうか、引越さうと思つても此がある爲に引越せない、又新に引越して来る者も土着の仕惡いのは其ためであります。土地が買へない位ならば田舎に行つても仕方がないと云ふことは誰も言ふことであります。

地價の高きは農業の爲には無用なり

之に對する政策としては一方に土地を得易くしてやることも一つの方法であります。又一方には人が土地を餘り重く見過ぎないやうにさせるのも一方法であります。少し進み過ぎた考ではありませんが、元來現今は日本に限らず私人の土地を支配する権が必要の程度を過ぎて強くある所有權を今少し限定することが出来れば宜しいと思ひます。必ず田舎の爲に幸福であります。是は或は行ふべからざる議論であるかもしれぬが、自分は地價を限定して恰も煙草や國定教科書の價を限定した如く、それより高くも安くも買はないと云ふやうにしたいと云ふ空想を抱いて居りますが、是は論じても益がありません。其實行は百年も二百年も待たねばならぬことであるから、唯それだけを御話して置きます。其次には土地を所有せずとも猶田舎に住まれるやうな道を開きたい、其一端は小作法制の改良であります。現今の如く慣習上小作權が不安全であつては、新規に田舎に參つても、少し大きな規模で農をやるにはとても借地が出来ないのです。此の如く借地制の改良も必要でありませんが、又それよりも前に國有地若くは御料地の貸付法も考へて見なければならぬと思ひま

す。東京近くでは福島縣栃木縣の如く原野の多い土地では、御料地國有地を年々耕作の爲に借りて居る者、植林のために借りて居る者も大分ありますが、十町歩と十五町歩の地面を借りて居る者に對しては地元村方の人民の妨碍は非常なものであります。其重なる事情は以前原野へ行つて草を刈つて居つた者が刈れなくなるとか、薪山を失つたとか云ふことである。併しそれよりも新人の者を排斥することが主であるから、假令新規に土着者に便宜を與へ良い地面を指定してやつても今の有様ではいけない。是では如何に世の中が進んで來ても田舎に良い農業者は出来ませぬ。さうかと思へば他の一方には村民の中に移住はしたいが僅少の地面がある爲に、置いて出れば税だけの収入も取れず、賣つて行かうと思へば足元も見て相當の價では人が買つて呉れない爲に、土地に縛られて引越すことの出来ない者がある。先年私が京の七條のステーションで車に乗つた時に、其車屋は天津の者でありました。天津邊に田を五段歩ばかり持つて居るが之を賣ることが出来ない、五段歩ばかりでは百姓として生活も出来ないから、それで車屋になつて日々天津から京都に通つて

車を曳いて居る。此男が地面が賣れない爲に、都會熱に半分しかかゝらぬのは幸福と申しませうか。此の如く田舎に居るのには不充分の土地でも賣つて行けば見す／＼損失をせねばならぬ、有爲の人物だが長男である爲に是非なく家に坐り込むと云ふやうな状態も、土地經濟の上から言へば一つの弊害であります。之に對しては何か私利を營まぬ公の機關で土地權利の移轉を世話する法人を拵へたらどうか、田舎を去らんとする者は必ず此機關を介して田畑を賣つて行くと云ふやうにしたらどうか。今一步進めば産業組合法に依り土地の共同販賣共同購入を世話させては如何、極くぼんやりした考ではありませんが、是も一つの考であります。要するに自分は成案を立て、言ふのでは無いから議論が強く無いが、この通り想像すればいくらかも田舎を繁榮せしむる途があるのに、多くの地方の公共團體では自分が政治の主體であることを忘却して現在の各階級に利益を配布することのみを主として、未來に對する考が薄いからか、今まで少しも其事に着手して居らぬので、困つたものであります。兎に角日本現在の田舎對都會問題としては、如何なる趨勢に向ふの

が最も健全なる人口の移動であるかを研究すべき場合であつて、未だ長大息し絶望すべき情態ではない。さりとして今の有形ちの儘で抛つて置いても心配は無いと云ふほど面白い形勢でもない、是非共未來に對して新しい經濟政策を行はねばならぬのである。而して若し新しい經濟政策を行ふ必要がありとすれば、私のつまらぬ議論も多少御參考にならうかと思ひます。

(明治三十九年九月)

大日本農會第百四會小集會に於て)

町の經濟的使命

一

茲に町と申しますのは、谷町とか珠數屋町とかの町、即ち大都會の一區劃を意味する町では無く、所謂町村の町であります。現行町村制に於ては町と村と法律上殆ど同様の取扱をして居りますが、右は果して當を得て居るか否か、村と村との社會上の使命とでも申しませうか、國民經濟に於けるこの二者の根本的性質には、何等の差異の無いもので有るか否か、若し差異が有るとすれば如何なる點であるか、又之に基く法制上の差異は必要であ

るかどうか。之に關して多少研究して居る所を發表致します。

現行町村制に依りますと、一の公共團體が町であると村であるとは、其行政法上の地位に殆ど何等の影響する所が無いのであります。其當否は後の論としまして、此結果人口の數が一萬も二萬もある大村もあれば、千二千といふやうな小さな町も澤山あります。地域の廣狹は勿論、人口の多少及疎密も亦事實上區別の準據とすることが出来ませぬ。従つて今日一萬二千あまりの田舎が或は町であり或は村であるのは、單に過去の成行に伴ふ偶然の事實であらうと思はれます。然るに事實は之に反して居りまして、今日でも村が町に成りたいといふ希望、村より町に改稱する傾向は全國に普及し、町にして村に成らうと云ふ例外は殆ど一も無いのであります。統計の上に表はれて居る現象を見ましても

(年次)	(町)	(村)	(計)
明治三十年末	九五二	一一、四四一	一二、三九三
同三十一年末	九八八	一一、三九六	一二、三八四

同三十二年末	一、〇〇七	一一、三七九	一二、三八六
同三十三年末	一、〇二六	一一、三三六	一二、三六二
同三十四年末	一、〇五九	一一、九二七	一二、九八六
同三十五年末	一、〇八二	一一、八七九	一二、九六一
同三十六年末	一、一〇二	一一、八四三	一二、九四五
同三十七年末	一、一〇六	一一、七六六	一二、八七二
同三十八年末	一、一〇九	一一、七六二	一二、八七一
同三十九年末	一、一一九	一一、三一六	一二、四三五
同四十年末	一、一三一	一一、二〇〇	一二、三三一
同四十一年末	一、一四二	一〇、八二九	一二、八七一

(伊豆七島、沖繩、北海道、臺灣、樺太を除く)

右の通でありまして、村の數は減ずる一方であると共に、町の數は増す一方であります。

町の數は増し村の數は減ず

村の減少の最大原因は合併であります。或ものは市にも合併せられました。併し其他は明かに町と成り又は町に合併したのでして、村の増加（改稱又は新立）の差引をすべきものは全く有りませぬ。町はその或ものは十年の間に市に成り市に合併せられ又は町同士合併しました。即ち數の減少すべき原因が多々あるにも拘はらず、差引著しく増加しましたのは、皆村が町に成つたからであります。何となれば市や町が分立して新一町を作つた例は無いからであります。此序に申して置きたいのは、明治十一年の第十七號布告に基いて發表せられた郡區町村一覽を見ますと、岩手縣の如きは町と稱する行政區劃は一も有りませぬ、宮城縣にも仙臺を除くの外は亦一の町も見えませぬ。所が今日では此二縣には現に各十數個の町が有ります。此等は皆町村制施行の後、村の合併に伴ひ又は之に伴はずに改稱をしたもので、之に依つて略舊時代の制度を想像することが出来るのであります。

政府當局の話聞きますと、村が町と成る法律上の意義は僅かに一ある町村が變形して別種の取扱を受くる公共團體即ち市になりますには是非とも町であることを要する。語

を換へて言へば、薩摩の隈之城村の如き戸口の多き大村でも、一躍して市と改稱は出來ず先づ準備として町に成つて居らねばならぬ。明文の規定があるわけでは無いが、唯町のみが市と成り得る取扱振であると云ふことです。併し村が一躍して市と成らんとするが如き場合は、門司とか吳とか若松とかのやうな二三突飛な例の外は普通有り得べき事情ではありませぬから、之を以て全國一般に村が町に成りたがる動機と認めることは出來ませぬ。實際上の動機は恐くは行政法の問題から立離れたものでありまして、簡単に云はゞ土地を繁昌させたい希望に基くものでありませぬ。もつと具體的に申さうならば、其の村に二人でも三人でも商人が居れば何村の何某ではどうも遠方と取引がしにくい、人に馬鹿にせられぬ爲には是非とも何町何屋何兵衛様行とありたい、斯くの如き若干虚榮心の交つた實利的希望が事實重きを爲して居ると思ひます。地方をあるいて見まするに、所謂進取的氣風に富むといふ村々には大抵此希望が見えます。此種の村では其の全部又は一區劃を町と私稱して居るものがよく有ります。此は別に沿革のあることで必しも恠しむべきもので無いこと

は後に詳しく申します。要するに改稱の問題は例の郡役所區裁判所登記所などの位置争ひ大にしては兵營縣廳等の引張合と同一の系統に屬するもので、必しも虚榮心とも言はれませんが、言はゞ土地繁昌の一種のまじなひで、此ばかりで居村の繁昌する譯は無いけれども澤山の手段の中の一と見るのです。所でおかしい事には村を町にする希望は、遠地と取引をする商人及之に關係ある宿屋運送屋の輩のみが之を抱くべき筈であるのに、其實同じ土地に居住する農業者林業者も、村の風儀を悪くするなど故障を唱へぬばかりで無く、寧ろ其運動に加擔するの風があります。表面は事實と名稱とを合致せしむるのだとも申しませんが、半分以上は景氣附けで、斯うでもすれば内證がよくならうかと云ふ漠然たる豫想が多いのです。猶進んで申せば、町を有難がり村をつまらぬものだと考へる不健全な思想の發現と悲觀しても宜しいのであります。

他の一面から觀まして、中央地方の行政廳がこの民間の傾向を如何取扱つて居るかと思はしますと、是亦必しも嚴肅なる態度ではありませぬ。勿論依怙最良の沙汰が有らう譯はありませぬが、單に事實に合するや否といふことを標準として改稱を許否して居るやうに思はれます。例へば連簷戸數が百何十戸以上で、住民の商業又は工業を營む者の割合が幾何以上ならば、村が町と改稱することを許すといふ風であります。所が日本は國柄が村居の散在を許さぬ國でありまして、例へば武藏平原に割居して居る村落にも聚合制のものが半分ある。苟も地方と地方との間 interlocal の道路が横ぎつて居る村ならば、民家は必ず道路の兩側に併立して居ります。農家でも乾場用の空地を家の後の方へ廻して、ずつと路傍へ乗出し、縁先には草鞋位をぶら下げて居ります。殊に屋敷地の地割一戸分は普通三畝か四畝でありますから、細長きこと刺身の如く、中國などでは、百姓家と雖屢簷々相摩して居ります。政府では目下の所は町に成りたいと云ふ村のみに就いて詮議をして居るが、若し積極的に進んで此標準を適用するならば、まだ中々澤山の村を町にしてやらねばならぬのです。又町村の區域の大小、地積と戸口との割合の如きは考察せられ方が足りませぬ。戸口は多くして土地狭く將來商工業に依らねば發展がしにくいと云ふ消極的理由は右の標

町と村とは形に於て差異なし

準の中に數へられて居らぬかと思ひます。現在の町の中には非常に大きな地域を抱へて居るものもあれば、丸々餘地の無いものもある、甚だ一定致しませぬ。若し町と村との區別が假に何等の意味の無いものとすれば此で差支はありますまいが、村を町に引直すといふことに些でも法律上乃至は經濟上の意義のあるものとしませぬならば、今少し注意を進める必要があります。要するに私の考へます所では、若し町とは其の集落の密度、大きさ及經濟上の活動の範圍が村よりも優れるものなりと云ふ標準を採らんとするならば、單に人口の數や商工業者の割合及連簷戸數のみに依ることは出来ませぬ。普通の旅人の常識でも、あれが町なら此も町でなければならぬといふ多くの例を見出します。就中鹿兒島縣は、後にも詳しく申しますが、一種特別なる村の構成を具へて居る地方でありまして、その谷山村申木野村等は戸口の數が八王子濱松よりも多い。又廣島縣の廣村は土浦七尾よりも大きく、徳島縣の小松島村、此は此頃町に成りましたが、此は磐城の平や縣廳所在地の宮崎よりも大きくうございませぬ。殊に鹿兒島縣下には今日でも鹿兒島市の外一の町も無いのです。その村

村の中でも薩摩郡の隈之城村、鹿兒島郡の谷山村、揖宿郡の指宿村の如きは土地人口が遙に全國多數の町に超ゆるのみならず、其の一大字例へば隈之城村の大字向田（川内とも申します）谷山村大字福元、指宿村の湊と申す部分の如きは、優に二流三流の町よりも繁華でして、川内の如きは一大字の連簷戸數が千以上もあります。愛知縣や埼玉縣の澤山の町は何れも其の何分の一にも及びませぬ。尤此現象は市と町との間にも見えます。今日は市と云へば世間の聞もよし法律上の特權も多い爲に、市に成りたいと云ふ希望は村の町に成りたいよりも又一層強いのであります。従て市と成る爲には骨を折つて其條件を拵らねばならず。其爲に單に市である町であるといふ名のみを聞いて、坐ながらに其の集落の狀態及之に伴つて發現してあるべき經濟現象を想像し得るの便宜は先づありません。又前の者は正反對で集落の狀況其他優に市に成り得る條件を具へながら、現在の資力が市相應の施設を容さぬ爲に之を切つて數個の町村として置くものもある。千葉縣銚子の三町などは其の一例であります。東京に近き新宿品川などは、此は別の理由であります。愛知縣の舊

熱田町が名古屋市であると同程度に於て、事実上の東京市なのであります。

二

以上の諸點から考へますと、行政法上の問題としては兎も角も、經濟上の研究としましては、町の話をする前には先づ一千一百餘の町の中から或るものは取除き、之に市の或るものと村の數百とを加へまして、之をば經濟上の町又は事實上の町と名づけ、其間に共通して居る性質を調査しなければ「地方の都會」なるものゝ御話は出来ませぬ。語を換へて申せば、若し他日町と村との間に行政上或程度迄の分界線を立てまして、それ〴〵任務を別にさせる政策を國が採りますならば、之に先づて必ず町と云ふものゝ範圍を今一層明定しなければなりません。併し私一己の事業と致しましては全國を通じて一々事實上の町を選定することは困難でありますから、是非なく今日公稱の一千一百餘の町に就て、其の過去現在未來に於ける存立理由といふやうなものを明にせんと力めて見たのであります。

或は此だけの材料でも、略之に基いて如何なる状態に町と云ふものを置くならば最も多く日本國の進運に貢献することが出来るかと云ふ問題に答へ得るかと思ひます。尤も色々とけちを付けては見るものゝ、この千百餘の町の大多數はやはり村とも言はれず市でもあるまいといふもの、即ちやはり町でありますから、町の顯著なる性質だけは此中から抽出することが出来るのであります。

明治四十一年の末に千百四十二と數へた町の數の中には、北海道の町を入れてはあります。さてこの千百餘の町は、決して千百餘の金米糖の如く同形同様でないことは言ふまでもありません。地域人口の大小は別としましても、猶其他に町としての要件を缺いて居る町がいくらか有ります。其の若干は千百四十二の中から取除く必要があります。或は統計家の御参考ともなりませうか、先づ對馬の嚴原の十の町、之れは一と數へなければならぬ。隱岐の西郷は近年迄の統計表には三に算へられてありますが、現に今日は一の町であります。更に町村制の布いてある地方でも、名古屋市の西に在る二の琵琶島町、此は小

川を隔て、一続きですから一に算へます。神奈川縣藤澤大坂町と藤澤大富町は二郡の境上に跨つて居まして一二年前は二でしたが、今日は郡境を改め一の町になりました位ですから、此でも一を減ぜねばならぬ。元來町は國境や領分境に出來やすいものであります。前に申した下總銚子の三の町、此も一に算へます。一しか經濟の中心點がありません。靜岡縣では清水と入江の二の町、此も別々の町と勘定することが出來ませぬ。和泉の岸和田町及岸和田濱町、此も一を減じます。新潟縣の村上町と村上本町、此は舊士族が町人と事を共にせぬ爲の分立で、其他に二に數へる理由がありません。此例は外にもいくらでもありますが、多くは一方が村です。同じ縣の高田町と高城村、肥前の平戸町と平戸村、島原町と島原村、諫早町と諫早村など多分、皆これでありませう。終に越中の東西水橋の二町の如きも一に數へてよろしいかと思ひます。此で三十九年の表からは十七減ります。猶進んで申しますと、市又は他の町に非常に接近して居つて、殆ど獨立したる一町と數へにくい町がまだ大分あります。御承知の通房州西岸の諸町は交通が他の地方の一町内によほど似

て居ります。筑前若松港の附近で洞海^{クキノクミ}を圍んで立つ三四の町も此例です。東京の近くでも新宿と淀橋、巢鴨と板橋、南北の千住、龜戸大島の如きは、或は市に對し或は相互に、決して獨立の町と町ではありません。又陸中の花巻の二つの町、越中の伏木と新港、駿河の入江と江尻、此等も合併して了へばまだ大分の數が減じます。町同士の癒着の外に、町が市に癒着して居る例は、高知市の江之口町、秋田市の牛島町、津市の新町、新潟市の沼垂町、福岡市の西新町、東京市の九個町などで、普通の從屬關係よりは猶一層親密なりと云つて宜しいのです。神奈川町や熱田町が既に市に合體して了つたのを見ましても、之を二個の單位として計算することは注意せねばなりません。

三

私は先づ試に以上一千百餘の町に就き、最近の人口靜態統計に基いて人口の計算をしました。主として眼を着けたのは町の現住人口と本籍人口との比較であります。若し統計に

誤が無いとしますれば、

町の本籍人口に依る大小の等級

町の本籍人口に依る大小の等級	(本籍人口別)	(總數)	(現住人口の本籍人口に超過するもの)	(現住人口の本籍人口より少ないもの)	(中位)*
	一 千 以 下	一三	五	二	六
一 千 以 上 二 千 以 下	四二	一四	一三	一五	一五
二 千 以 上 三 千 以 下	一五六	六二	六〇	三四	三四
三 千 以 上 四 千 以 下	二〇五	七六	八一	四八	四八
四 千 以 上 五 千 以 下	一六七	五七	八二	二八	二八
五 千 以 上 六 千 以 下	一四八	六四	六七	一七	一七
六 千 以 上 七 千 以 下	一〇七	五〇	四八	九	九
七 千 以 上 八 千 以 下	六六	二八	三一	七	七
八 千 以 上 一 萬 以 下	八二	三一	四四	七	七
一 萬 以 上 一 萬 五 千 以 下	七三	四三	二八	二	二

一 萬 五 千 以 上 二 萬 以 下	三二	一八	一二	一
二 萬 以 上	一〇	五	五	〇
計	一、一〇〇*	四五三	四七三	一七四

*五十以内の上下の差あるものは中位の中に入る

**一一〇二なるべき總數の中何れへか二つ落ちたり

不完全な表で、しかもあまり努力に償ふだけの結果を得ませんが、大凡人口なら三四千、戸數ならば千戸以内と云ふ町が最も多いことを知りました。入寄留即ち新住者の超過も格別町の大小には依りませず、従て市以外の町だけでは所謂急劇なる人口密集の趨勢は見えぬのみか、寧ろ過と不及の頂點が反對に喰違つて居つて、比較的小都會の方が生長し易いとも言われます。尤もごく微弱なる傾向であります。大して御役にも立ちません。それよりも寧ろ此統計の副産物として心附きましたのは、町の或ものに在つては本籍人口と現住人口との間に非常に烈しい開きのあるものが有るといふことです。その個々の町に就いて

入寄留の超過せる町

考へますのは趣味あることゝ信じまして、或は既に御調べの方も有りませうが、私の存じ付を申します。先づ現住人口の超過の方では筑前の若松、製鐵所の門前町モンゼンであります。最近に市になりました相模の横須賀豊島、三河の豊橋、兵營所在地では讃岐の善通寺、縣廳町の宮崎浦和千葉福島、鑛業地の大牟田直方足尾院内、織物産地の桐生足利、大市街に近き淀橋大島傳法の如き、何れも五〇乃至一〇〇%の現住超過であります。猶今迄少しも心附きませなんだのは肥後の人吉、上野の澁川、近江の八日市、美作の津山の四で、澤山の新住民が入込んで居りますのは、新時代の經濟事情が更に地勢上の優勝を承認したので有りませう。武蔵足立郡の大宮も此の類であります。次に現住人口の甚しく本籍人口より引込んで居ります町は、先づ豊後の鶴崎、阿波の撫養、紀伊の新宮シンナ、越後の白根であります。何れも以前水路の衝に當つた町で、舟運の様相ががらりと變り、土地繁昌の唯一の根據を失ひまして、最早他所者を招致することが出来ぬと云ふ筋合であります。又伊勢の久居、長門の萩、土佐の佐川、筑前の秋月、右は何れも舊城下で、最初は必しも不自然な地

形を占めたのも有りませうが、維新と共に大分のお得意を失ひ、それに佐川久居の如きは道路の變遷が大に其衰微を助けて居ります。町が小さくなれば何になるものか、注意して今後の趨勢を觀て居りたいと思ひます。

四

次に私は若干歴史上の研究を試みました。現今町と成つて居る公共團體の成立に付て調べ始めますと、殆ど他の一切の問題を忘却せしむる程の趣味があります。一千百餘の町は一つづゝ其發生の年代を異にして居ると同時に、更に其成立の要件ともいふべきものを異にして居ります。而して町の繁榮は勿論、町の存在といふもの迄が常に此要件の消長に伴つて變動してをります。要件と申しましてもごく一時的のもの、例へば宇品の港が戰爭中だけ繁昌するといふやうな類と、稍永續的原因と、其間に段階差等は勿論ありますが、兎も角も此要件を基礎にして、町の繁榮及町の存在が萬事之に拘束せられて居ることは事

實であると同時に、その要件が亦時世の變遷に連れて一として推移らぬものは無いのであります。従つて苟くも農林業に利用し得べき土地が有る限は何れの世にも必ず存在し得る村と云ふものに比べますと、町の存在理由と云ふものは遙に微弱なりと言つて宜しいのであります。従つて町がその永遠の生存、永遠の繁昌を希望しまして之を保障せられやうとする爲には、この要件の時々の變遷を自覺するのみならず、猶進んで自動的に自分の存在理由を作り上げて行くと云ふ意氣込が無ければなるまいと思ふのです。是が私の御話を申上げたい一の點であります。

町の成立の種々なる要件の内、最も見易いのは西洋の諸國にもある如く、神社佛閣に依るものであります。私の知つて居る限を列挙しますれば、先づ山城の八幡町、八幡宮の信仰は中世以後盛なことでありました。諸國の八幡と云ふ町には必ず大きな宮が有ります。大和の初瀬には最も古い有難い観音堂がありました。京都人は足が段々弱くなつて後には東山の清水（きよみづ）で間に合はせましたが、以前は初瀬へ詣らねば人間で無いと云ふ程でした。

今日でも其の寺の門前が立派な町であります。伊賀への通路にも當つて居りますが、此は道路の方がよつて來たのです。大和の三輪龍田、三河の豊川などは道路も古いけれど、少なくも今日の繁昌の大部分は參詣人の御蔭です。殊に關東では香取鹿島大山日光筑波成田妙義、關西では宇治山田粉川琴平嚴島太宰府宇佐の如き、人が態々巡禮をする所です。讚岐の観音寺普通寺佛生山、紀伊の御坊なども其の地名が示す如く大寺の所在地で、肥後の宮地甲佐なども同様、少なくも其の成立は社寺の爲であります。此の外にもさがせばあります。さて如何にして町が出来るに至つたかと申せば、無論昔も今と同じく參詣人が泊つたり晝飯を食つたり、土産を買ふと云ふ爲もありませんが、そんな簡單な原因の外に、中世の大社大寺には甚だ廣き境内が附與せられてありました。境内と申しても今日の境内の如く建造物の構内では無く、寧ろ直轄の社領寺領と云ふべきものでありまして、其一部分は無論殿堂坊舎として利用しますけれども、其の或ものは貸付けて地利を收入します。田畠を作らせる農夫には屋敷地をも與へねばならぬ、是が所謂門前百姓であります。門前百

姓は農作の傍常に商賣をする機會を得ますが、場合によつては始から農民を招致せず、町屋を開いて市を立てさせ専門の商工を呼寄せた社寺がありました。近代まで之を地子地又は單に地子とも稱して居ります。此の如くして社寺を中心とする町は出來上つたのであります。今日でも下谷淺草あたりのお寺の和尙が境内を貸地とし又は借家などを建てますと、慾張坊主など申しますが、格別事新しい現象でもありません。今の奈良市の如きも全部が興福寺東大寺の門前町であります。門前町は最初蠶を養ふやうに社寺から介抱世話せられて居りましたが、後々は地子を徴收し夫役を責める一方であります所へ、段々世の中の信仰も衰へて行く傾がありますから、今日となつては社寺との縁故も薄くなり、田舎からの參詣者のみを頼にすることも出來なくなりまして、次第に普通の遊覽地として遠方の旅客を招くやうになります。西京でも奈良でも乃至は安藝の宮島でも、願事の有る者より只良い處だから行くといふの方が次第に多くなります。

今後の町には遊覽娛樂といふことも重大なる一の成立要件となるに相違ありません。之を以て存立の要件とする町は、言ふ迄もなく近年の發現でありますから、今や皆新事情に適應するやう改造中であります。東海道の大磯でも國府津でも箱根でも興津でも舞坂でも蒲郡でも、以前は國道の上に立つとは言へ、蕞爾たる宿驛でありましたのが、此からは所謂別莊地と爲り海水浴場となりまして、從來の衰微を補充して行くことでありませう。此類は外にもあります。鎌倉小田原も今はこれで、又仙臺附近の鹽竈渡波、上方では明石和歌浦や大和吉野の上市下市も此中に算へて差支ないであります。

次に略同種類であります。其性質が單純で而も古くから我國に澤山ありますのは温泉の町です。なるほど或ものは陸路水路の衝に當り、多少町の成立を容易ならしめたに相違ないが、それでも若しそこに温泉が湧出さぬならば出來ざりし町であります。伊香保草津有馬城崎は勿論わざ／＼の山越であります。其他岩代の飯坂でも伊豆の熱海でも石見の温泉津でも伊豫の道後湯でも豊後の別府、濱脇でも肥前の武雄でも肥後の山鹿、日奈久でももし浴客が來ぬならば依然として小さき村落で、驛でも津でも無かつたに違ひない。

所謂湯町にも盛衰はあります。温泉が出なくなつたといふ記録は決して稀では無い。併しそれよりも遙に有爲轉變の烈しいのは鑛山の町であります。町の基礎の最も動搖し易いと申します次第は、鑛業の利源の枯渇し易いこと温泉の比では無いのに、其位置は偏僻の山間でありまして、多くは其の外の支柱的事情を具備して居らぬからであります。現在鑛山の爲に出來た町を列挙しますと、下野の足尾、羽後の院内、阿仁合、佐渡の相川、但馬の生野、石見の大森、備中の吹屋、備後の東城などであります。殊に面白いのは東城の町で、山間の一小盆地でありながら、四鄰の平地から山越の道路が此町に集注してをります。一寸見ると交易町と同様の形式を備へたやうであります。此道路たる凡て鐵鑛業の繁盛した時代にわざ／＼設けた交通方法でありまして、一體この山陰山陽の中山には鐵鑛業繁昌時代に町があつた痕跡が地圖の上に點々見えますが、東城町はその唯一の殘存者であるのです。即ち今日となつては以前の道路を以て町の存在を支持して居るのであります。九州各地方の石炭の町は最近の新例であります。殊に前に申した筑後の大牟田の如きは其名

の示すが如く、つひ近年の埋立新田であつたものが、今や市にならうかと云ふ意氣込であります。石炭は金銀よりも一層早く掘盡すべきものでありますから、此で成立つた町が永く取續かん爲には、必ず別の基礎を兼備へる必要があります。

五、

以上四種の町ほど單純では無いが、複雑なる經濟組織の中から抽け出で、容易に其の成立の原由を認めることの出來ますのは、水路陸路の關係であります。日本は斯う云ふ國でありますから、港の町は中々多い。川は皆小さいけれども僅ばかりの筏や川舟の上下の爲に兩岸の町が亦澤山に出來て居ります。而して此等の町が又随分鑛山に負けぬ程烈しい變動を経ねばならなかつたのです。あまたの海港は干潟の爲に水濱から遠ざかつた上に、帆船が汽船となつた爲に又不要になつたものが随分あります百年前の海路記を見ますと、北部の東海岸にも良き港なりとある町が仙臺以北に十幾つあります。此等の港は先年の大海

嘯が無くてもやはり衰ふべき氣の毒な運命でありました。汽船には風待といふものが無い帆船でも西洋風の三角帆などを取付けたものは種々の方向の風に乗ります。斯うなると例へば能登の沿海の港町の如き、格別水深が減じたと云ふわけでも無くして、寄泊して土地の貨物を消費する舟の数が少なくなる。天草下島の牛深港の如き三度行けば三度はだかと云ふくらゐ面白い所でありましたのは、全く薩州から長崎へ往來する船が此邊で異なつた風を待たねばならなかつた爲でありました。然るに今日となつては最早汽船が二時間か三時間かゝつて居るばかりですから、所謂煙花寂寞たるを免れぬのです。漁港としても亦同様で、水産業が盛になれば鹽や餌を買込む爲に度々漁船が出入するわけですから、是も漁船の形が大きくなつてから漁業の中心たる港の数は大に少なくてすむことゝなつたのであります。以上は海港の御話。河沿の町も亦原因こそ異なれ、衰へたものが多いのです。日本の川筋の小さくて變り易いことは御承知の通りで、年々の出水の度毎に洲があちこちと移ります。洲が出来れば船は寄らなくなる。大利根筋には昔から此例はいくらもありま

す。併し今一層強力なる原因は陸上運送の發展であります。新編武藏風土記稿を見ると、新坐郡の堀之内村は江戸より陸路六里であります。年貢米の津出しは新河岸川荒川を経て十八里の水路を迂回しました。馬の背に比べては如何なる水運も遙に輕便と言はねばなりません。やゝ大規模の輸送は水のある限は水に依りました。然るに車力が速に普及しました上に、日本は海國の辭に無暗に汽車を調法がる風がありまして、河海の水路に併行してもどしどし之を敷設し、米も材木も皆此で運搬しますから、鐵道が通れば水驛は忽ちつづれます。東京附近で一二の例を申せば、利根川江戸川の分岐點に在る關宿の町は、地名の示す如く古くから水路の番所で、上り下りの河船は大抵一旦こゝに舟掛りをしましたのが、檢閱徴税の制度が廢した上に下流に、運河が掘開かれまして大部分の船は關宿を通過しませぬ。利根の下流の木下と云ふ町は、銚子の海濱の漁獲物を押切船で運び夕方に此河岸へ上げますと、夜通し馬の背で江戸へ運んだもので、所謂水陸の交叉點として繁昌しました。和船が河蒸汽と成つても猶此の仕來りを守つて居りました。然るに總武鐵道が出来ま

しては、五時間で東京に達する故、舟で生魚を運ぶ者は無くなり、従て木下近邊では夏向海魚が得にくくなり、同時に土地がやゝ衰へました。又鬼怒川筋には石下水海道などの町、此も船附としては衰へたけれども、織物其他の地方的製造業に依つて新に立場を作らうと力めて居ります。又町ではありませぬが鬼怒川筋の阿久津と云所は舊時代の交通にはよほど重要な地點でして、會津白河其他海に面せざる東北からの漕運には、こゝが水陸の交又點がありましたが、汽車の通すると共に唯の村となりました。此の如き例は遠國にもあまた求め得られます。陸前の石巻は北上川の川口で伊達氏の上ほど力を用ゐた所ですが、今日は港としては立行き兼ねるやうであります。

湖上の水運も同様のこととて、近江の鹽津海津今津は成立の時代が少しづつちがひますが王朝時代からの北陸との通路に當つて居りまして、越前の敦賀と腹背相應じたものであります。徳川時代にもこの交通方法を踏襲しまして、羽越の出穀は敦賀で船から揚げて山越に今津へ出し、大津で一旦まとめて再び山越に四日市へ出し江戸へ廻させたものであります。

すが、此通路も絶えまして湖上の航運は今やごく地方的のものであります。敦賀は新に大陸との連鎖點となつて繁榮させられけれども、以前北國への茶の供給を一手に引受けて居つた敦賀の茶屋町は名ばかり残ることになりました。

陸路は水路が天然の事實であるとは反對に頗る人爲的のものでありますから、町の成立と陸路との關係は前の者ほど簡単に會得することが出来ませぬ。即ち道路あるが爲に出来た町は勿論ありますが、其他に町あるが爲に出来た道路のあることをも考へねばならぬのです。この二種の區別は假に國道と縣道との差と見ても大なる誤謬には陥りません。尤も今日は縣道であつても至つて古い道もある、昔は國道であつた縣道もありますけれども、大體大阪とか長崎とか云ふ大都會に達する幹線は、在來の町には無頓著に新道を開くこともありませんから、其上に在る町には道路の方から促されて出来た所の所謂新宿新町があります。地方的の道路に在つては在來の町と町とを繋ぐのです。町がそこに無いならば外の方が向を取つたかも知れぬのです。此が區別であります。國道の爲に出来た町の状態は最もよ

く川筋の町に似て居ります。日本は山國ですから、之を縦横に通ずる大道はいつの代にも變へやうがなく、東海道なら海岸とか、奥州道なら阿武隈北上の流域と云ふやうに、町が大道に沿って立つ以上は一定不動の安全なる根據があるやうに思はれますが、事實は必しもさうでは無く、殊に近年は水路と同じく汽車の影響をしたゝか蒙つて居ります。例へば福島縣の本宮町は會津への分岐點で富有な商人の多い所でしたが、今では繁華の大部分を郡山へ譲りました。この會津街道で氣の毒なのは中山峠の麓の中山宿であります。中山道では碓氷の坂本町、今では此峠を歩行する旅客はありませぬから、町並ばかりは昔のまゝで、亂山の間には蕭條として養蠶を生計の便として居ります。汽車の外にも近年は路線の選擇變更が盛である爲に、衰へた町も中々あります。國道が全然無くなるといふことは減多にありませんが、一等下つて縣道となり里道と成り、然らざるも旅客の之に依らぬといふものは多いのです。例へば上野の南北甘樂郡の溪谷、殊に北甘樂の鑛川の流域は中山道の裏道で、大凡武藏の本莊町邊から分岐し、幾分か近い爲に通行の中々多い道路で、ちやうど今

の上毛鐵道といふ小鐵道の通つて居る筋には、相接近して吉井福島一宮富岡下仁田と云ふやうに、小さな町の鎖があります。此路は又所謂南牧西牧の入野を経て信濃の佐久郡とも交易をしました。戰國時代には安全なる山路として調法がられた國境の山脈は、今は殆どただの屏風のやうに成りました。若し養蠶製絲の業が大に起らなかつたなら、此等の町の運命は氣づかはしかつたのであります。

六

社寺、遊覽地、温泉、鑛山、水路及大道、此の六種の原因による町の成立は大略前に述べました。事新しく申さずともその地方々々の人はとくに心づくべきことでありまして、例として列挙しましたのもほんの一部分に止ります。而して假に此等の事情の下に發現した町を二千一百の三分の一とすれば、残の三分の二はどうして出來たか、此が困難にして且つ趣味ある題目であるのです。現今の國道は五十餘線ありまして、國道表に驛舎として

掲げられた地名中、町は三百七と私は算へました。或は大字小字の名を擧げたのもありまして一々地圖に當つたわけで無いから不精密ですが、其中の五十ばかりは終點又は准終點即ち國道を通じた目的地でありませう。

私ぐらゐの學問では大きなことも申されませぬが、町の發生を説いた内外の學者は、多くは町は天然の地勢と其の當時の經濟事情とから自然に發生することゝ考へて居るらしくあります。即ち歩行を以て唯一の交通方法とする時代には半徑五里の平原に町一つ、車ならば半徑十里の内に一つで澤山となると云ふやうな勘定であります。併し此の如き概念には甚だ大きな但書を附して置かねば安心がなりません。今でこそ町の盛衰は自然の成行に放任してありますが、古代の多くの町は政策の力で出來たのです。人造であります。而も天工に代る人爲では無く、町の爲の政策以外の政策に依つたものがあります。今日は區裁判所でも稅務署でも略土地の面積に割當てゝ配置しますけれども、地主が割據した時代、小地方官が割據した世の中には、繁華の奪合は今よりも遙に強かつたと考へねばなりません。

ぬ。從て自然に發達したでもあらう町の位置とは大分變つた處に町が起つて居ることを免れませぬ。

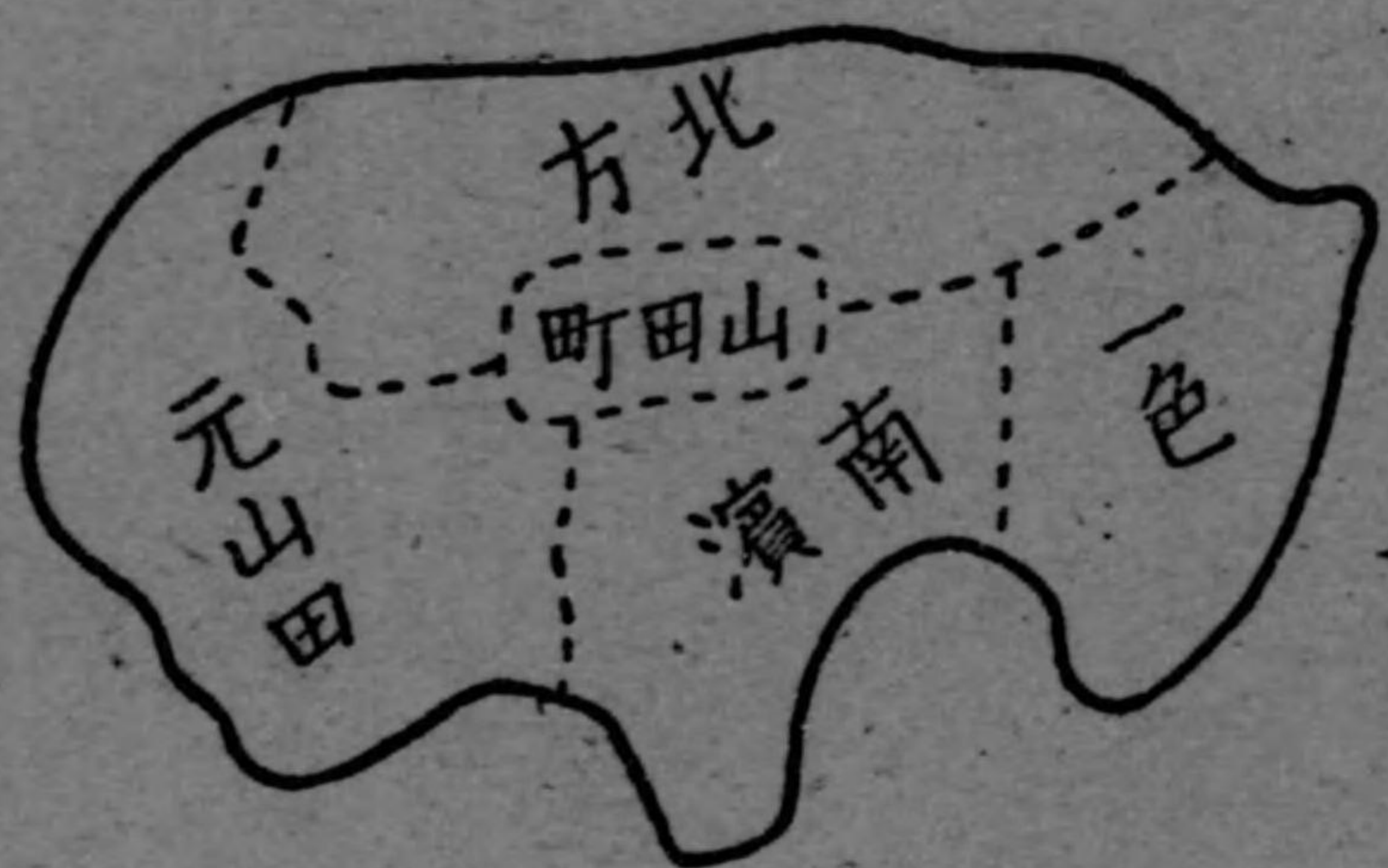
先づ最初に申したいのは國府のことです。郡家所在地の選定に就ては如何かと思ひますが、六十六國の地方廳所在地のみは多分情實に拘束せられず公平に定められたらうと思ひます。即ち當時に於て開發せられて居つた平地の中では略中心と認めて差支の無い、人口の比較的密集して居る地點に府を建てたのでせう。此とても其後追々隅々まで開け盡して見ると、ちと片寄つて居つたといふ評を免かれぬ地方もあります。國府は單に交通の都合の宜しいのみに止らず、附近に沃野と邑落があつて物資の供給の容易な所で無くてはならぬ。それと云ふのが各國司の米財政は個々別々の特別會計ではありますが、沽價の法令が細密でありまして、全國略一様の率で官稻を以て雜物に交易し、之を中央へ輸送せねばなりません。故に、夙くから市場町屋の必要がありました。其爲には後世の領主が山に據つて住居を構へるのとは事かはり、先づ十目の視る所市店に適する平地を選定せねばならぬので

あります。古今千年を通じて人の考には大差のないもので、六十六國の國府の趾は、今日五は市、二十六は町が其の上に出來て居ります。家居と道敷は勿論昔のまゝでは無いけれども、此は爪や髪の毛の代謝するやうなものです。殊に武藏の府中常陸の府中備後の府中豊後の府内等は近世迄系統正しき地名を帯びて來ました。大隅の國分村も事實上の町です。今の時代の郡家驛家が兼て市店であつたか否かは甚だ明白でありませぬ。古代に於て現今の意味に於ける町のあつたことの略疑ないのは京都の外は國府ばかりかと思ひます。然らば其餘の千餘の町は何れの時代に起原を有するか、此問題を解く爲には先づ町といふ語の意味の變遷を考へねばなりません。昔は市も町も一つです。市を音で讀むで大都會のことにしたのは明治二十三年からです。音と訓とで今は大に意味がかはります。徳川時代も後半期には町と市とを區別して居りますが、其以前は二者混用でありましたのを、各地に日市常市が出來始めてからは、日限市のみを市と稱し常市を町と稱しました。併し此區別も地方に依つては認められて居りません。市といふ語の意味は明白です。ごく古い時代か

らありました。之に反して町といふ語は度々其内容が變化しましたから些しく説明をいたします。字義の詮索は柄に無いことですが、全體漢字の町と云ふ語の方は如何ですか知りませぬが、マチといふ日本語には最初區劃と云ふ意味があつたやうです。人は長さを表はす町は面積を現はす町よりも先に用ゐられて、一町四方であるから一町步だと思つて居るかも知れませぬが、私はその反對に一町步平方の奥行の長さが一町と稱せられたのだと信じます。漠然たる想像説ですけれども、近世一畝二畝と畝の字をセと訓みますのは、中古莊園の文書に一瀬町二瀬町とある瀬町と語原を同じくするもので、瀬町はやがて狹町の義であつて、奥行の長くないことを言ひ、終に少ない面積といふことになつたのかと思ひます。もし右の如く町は土地の一區劃の義としますれば、かの市兵衛町とか加賀町と申すやうに、大都會のほんの一部分を町と呼ぶのが寧ろ本義に合するものであります。併し町村の町とても其の因つて來る所は亦之と同一で、今日でこそ村と對立する一人前の法人ですが、是は全く最近の變動でありまして、僅々四五十年の昔に遡りましても、町は村又は郷

の一區劃に他ならなかつたのであります。前にも申した鹿兒島縣に一の町もありません。は則ち昔の面影でして、岩川村の町屋のある所を岩川町と云ひ、末吉村の中心を末吉町と云ひ、之を看板に認め引札に書きますのはをかしくも何とも無いことであります。此例は獨かの地方に止りませず、何れの地方にも充滿して居ります。陸地測量部の五萬分一圖殊に山陰山陽の境などには著しくそれが見えます。一郷一村の内の町でも、もし別の名を冠つて居れば異なる推論も下し得ますけれども、中國地方のは郷の名と町の名と同じで、例へば美作の苫田郡東加茂村の大字桑原の中に川に沿ふた一區劃の民居を字桑原町と申しませ。此等は舊一村の中の又小區劃でありますからよく分りますが、合併前の舊村即ち今の大字なるものは實は昔も亦或一郷の大字で、町は別に一個の大字として此等の村とは對立し、寧ろ郷の總名を負ふて居た爲に、後々は却つて町に依つて郷に名けた位に思つて居る人があります。新に合併した今日の村は大抵以前の郷莊の區域に由つて立ち、元の單位に戻り舊郷名莊名を村の名に呼びますから、圖らずも茲に二三百年前の状態を復活し、町

の勢力が全體を町と稱せしむるだけ強盛な所は格別、其他は村落の一大字一小字に村と同名の町と呼ぶ區域のあることを示すのです。



此は假設の一例であります。以前は此だけの全部の土地を山田郷又は山田莊と云つて居りました。徳川時代には五つの村になり五人の名主が支配して居たのを、明治になつて再び山田村となり、元の五の村は五の大字となりました。其中の大字山田町は山田郷の町場だから山田町であるのです。山田町がある爲に新村を山田村と云ふのでは無いのです。併しこの大字山田町が盛になつて爲に村が町に變ずる頃には、人は昔の一郷の名である事を忘れて中央の町場の名が周圍の在方を併呑したやうに思ひますのです。

此町は郷内の者は恐くは單に町と申して居つたのを、各郷が境を接してそれ／＼の町をもつ爲に、區別方法として「何々の町」と郷の名を冠したのでありませう。再び例證を擧

町はもと村の一區劃の名なりしこと

けるのはくどいやうですが、出雲の一國だけでも飯石郡頓原村大字頓原町、掛合村大字掛合町、仁多郡三成村大字三成町、龜嵩村大字龜嵩町、能義郡母里村大字母里町、井尻村大字井尻町、八束郡秋鹿村大字秋鹿町其他十數箇所ありまして、其の多くは別に以前の村として同名の大字があるのであります。山陽道の方では町の代りに市と申します。例へば周防郡濃郡久米村字久米市、戸田村字戸田市、佐波郡右田村字右田市、長門の阿武郡三見村字三見市、大津郡三隅村字三隅市其他まだありますが、此等は皆同名の大字の中の又一小區劃であります。又町、市と言ふ代りに宿、港など言つて居る例もあります。此等の例を見ますと町は少なくも近代に至る迄は村の一部分一區劃に與へられた名であつて、稀に町部分の勢力が全村を壓する程發達した所のみが明治になつて村を町と改稱したのであることが分ります。只多くの地方では町、市、宿には別に之に冠せる名が無くして普通名詞のやうに唱へて居つたり、又は別種の原因に基いて名を與へた爲に、此性質が少しく不明になつただけのことでもあります。

七

さて何故に五千町歩一萬町歩の一箇村の中に、三町歩五町歩の一區劃を限定して之を町と稱するに至つたかと申しますと、其の起原はどうでも之を莊園の組織に求めねばなりません。大寶令時代の郷でも其の中心即ち後世に本郷、本村と云ふ地には町屋があつたり市立があつたかと思ひますが、此は確かではありませぬ。莊園には大小がありましたけれども、通例昔の一郷よりも廣く時としては全郡を蔽ひ又は二郡に跨がつて居りました。私領の莊園はそれ自身經濟が獨立して居りましたから、一の莊園が開けると必ず一の町屋が入用になります。莊園の領主が米ばかりを年貢にとりましても、領主は大概遠方に居りますから運送の問題が起ります。新開地はどうしても畠地が多く、徳川時代も同様でありましたが、畠場地方では米以外の年貢を取らねばならぬ事情があります。貨幣の通用は一時盛でしたが、後再び准錢准布准米の慣習が弘く行はれました。社寺領などで絹綿の外に

油漆乾柿搗栗カチケリの類をも需要します。後世の別所又は加納の地即ち追加開墾地の約束には油の一色、或は布の一色といふものもありました。然るに農業経済の事情は時代と共に變遷しますから、買求めて納める必要が出来ましたり、又は徴收運送の都合から眞綿と稱し胡麻と稱しつゝ米を代納する風も起りました。そこで再び古代の雜物交易の法を復活し又は沽價公定の必要が起りました。莊園の中心は普通政所テドコロと申しました、地名となつて多く今日に残つて居ります。假屋假宿狩宿などゝ云ふ地名も多くありますが、亦私領の事務所と云ふことかと思ひます。政所假屋の附近には必ず町屋、市場がありました。後世莊園は次第に分割せられ、其の役所と云ふものも幽になりましたが、一旦嚙來た市場は永續しまして、久しく一郷一莊の經濟中心を爲して居ります。殊に亂世に成つては領主は要害の必要上却つて谷間や山の陰に引込んで居住しましたが、平和の交通を目的とする市場の方は必ずしも後世の城下町の如く之に伴つて徙りは致しませぬ。足利末期までの大小名の館は城と云ふほど大規模のものでは無く、近くに要害山が有つて危急の時のみ此へ驅上り、平日は館の周圍に家

來の武士を住ませて人垣を設けて居りました。この武家小路即ち近代の所謂屋敷町をば薩摩では麓フモトと云ひ、肥後では柵カシヒと云ひ、中國四國では土居ドナキ、山下ヤマダと云ひ、東國では堀之内ホリノチ、籠小屋カゴコ、箕輪ミヅノ又は寄居ヨリキとも申したやうであります。鹿兒島縣では以前の郷即ち個々の莊園がそのまゝ現在の一村でありまして、所謂一二の都城は今の一百何箇村の中心であります。然るに町屋は必ずしも麓と一所で無く、場合に由つては山を一つ野を一つ隔てゝ居ることもあります。これが恐くは足利の末頃に於ける全國普通の状態で有つたらうと考へます。

八

茲に御注意を願ふのは、此等の市町は決して今日の町の如く常住の商業地では無かつたことです。次にその御話を申し上げます。中世に町と申すのは單に市を立つる場所と云ふに過ぎません。之を普通は市又は市場と申して居りますが、東國では町屋とも言ひます。町屋と言つても亦決して常在の町では無かつたことはいくらも證據があります。今日村落の

莊園に市場の必要なりし所以

大字小字の名と成つて昔の市町の趾が無数に見えますが、小字の方は一時に全国の地名を調査する方法は全く有りませぬ。大字は行政区劃一覽とか大字辭典とかに集めてあります。之に依ると市場村、市村、町屋村など云ふ大字即ち舊村名が殆ど全国の端から端に互つて三四百もあります。市居、市之坪、市之割、市野邊など云ふ大字も澤山あるが、殆ど皆今は村落であります。市町が所在の郷の名を頭に冠つて呼ばれることは前に申しましたが、其外に最も目に著くのは市日を連稱する地名、即ち四日市（伊勢）六日町（越後）八日市場（下總）の類であります。此事實は取も直さず昔の市の日が毎月三回であつたことを證するものであります。何故かと言ふに、此類の大字が百五六十もある中に十一日市以上は一もありませぬからです。青森縣の八戸町の小字の名に十一日町から二十八日町まで七ばかりありますが、是は後世に一六と三八と月六才の市が二つあつたのを、十二の町に分配して其中から一日町と二十一日町が早く無くなつたのです。一覽表に就て御覽をねがひます。又面白いことには相接近して同じ市日の町は決してありませぬ。

市立は其土地の住民を悦ばせ、同時に領主にも得の附くことであつたので、輿論に任せ無暗に新設したのみならず、成るべく市日を頻繁にする希望があつたと見えまして、月に三度の市は夙く徳川時代以前に於て大抵月に六度となりました。従つて此の如く市日の名に付けた市場は少くも之より古い時代の新設と認めて差支ありません。月六才の市は今日も澤山あります。殊に武藏相模は開きにくかつた新田で、市を設けて人爲的に土地を繁昌させる必要がありました東京に近くして古制の痕跡の見られますのは、鳩ヶ谷町の市、原町田の市などです。市日には道路の兩側人家の前に臨時の店が連りますので、其爲に平日から假小屋のやうな雨除が出来て居ります。原町田の市日は二六です。次に相州高坐郡上溝の市が三七、八王子の市は昔から四八であります。茲に面白いのは月六才ならば毎日目で無ければならぬが、二六、三七、四八と四日目と六日目になつて居るのは何故かと考へますと、朔日は神祭等の爲に地方人の手が引けると、十日は小の月には二度しか無い爲に、此兩端の市日を避けた結果かと思はれます。其爲か二日市以下の地名の諸國に多

い割合に、朔日市一日町といふ所は少ないのです。

日限市ヒギリイチの制度は縁日となつて東京にも残つて居ります。二七の不動五十の稻荷など云ふのは是であります。神佛の方からも市商人の方からも聯合を利とする理由が有つたのであります。併し最も早く日限市の買物では間に合はなくなつて、常市の成立を促したのは大市街であります。甲府市には三日町八日町はありますが、夙く名ばかりと成り、熊本市にも天明年間までは各町に市日が定まつてあつたのが、文政年間に肥後國志の出来た頃には三箇所に年一度の市が立つばかりだつたと申します。町と云ふのも昔は日限市であつたことは越後に四日町六日町七日町十日町等あり伊豆に四日町美濃に二日町があるのでわかりませんが、その町なるものを常市の名として日切いちきりの市と區別したのは大市街の力です。延喜式の時代から京都だけには市中に常住の商人が居り、東鑑を見ますと鎌倉には魚町穀町等がありました。北等の町でも勿論、最初は日を限つて賣買をしたのでせうが、常住の商人となると旅商人や近在の農人とは事かはり、市を常市にしたい希望は一層痛切であつたに相

違ない。殊に大きな城下の町には大きな取引が行はれますから、日々の市が必要になり、そこで昔の京鎌倉の如く、同種の小賣商人を同一區域に集合した常設の町が出来ました。今日大市街の町名に材木町とか鹽町とか檜物町とか呉服町とか申すのは即ちその痕跡であります。痕跡と云つても或は現存して居る所もありまして、例へば岡山市の一區域には菓子屋の軒を連ねて居る所があり、東京でも有名な柳原の古着町、其裏通には田舎行の駄菓子だかしを造る家が集合し、日本橋の中通に古道具屋があり、四谷の簞笥町には現に簞笥を造る家が並んで居り、神田の神保町には新に本屋町が出来ました。餘計の競争があつてうるさからうと思ふやうであるが、通り掛りのひやかしの外に、わざ／＼の御客を招くには此方が雙方の好都合であります。此で自然に昔の事情もわかるやうに思はれます。又魚市青物市の類は日々市ではありますが、やはり昔の通の賣買方法で、たゞ永年の發達に由つて慣習が恐しく複雑になつたばかり、言はゞ昔の市日をコンデンス(濃く)したものです。此等の點から考へますと、月に三度の市が合併か新增かに由つて月六才と成りましたのも、

一種経済上の中央集権の傾向を指示するものであります。

日限市が常市と成ることは必しも大都會のみならず、全國一般に田舎の隅々までもの趨勢であつたかと思はれます。領土の兼併は同時に市場の兼併でありました。勢力ある大名は山間の小さな市場を取潰して其城下に強大なる大市場を作ること欲しました。前にも申せし如く市場の多くは政策の力に由る人爲的のものでありまして、牛馬と云ふ狂言にも新市興行に付先づ一の杭に牛馬を繋いだ者を市の司ツカサにすると云ふ告示が出たことを種にして居ります。南多摩郡關戸に在る古文書には、新宿興行に付七年荒野モウヤ申付ると見えます。七期間は荒野としての賦税のみ徴收すると云ふことで今の地價据置年期です。共に一種の保護政策であります。以前に於ても新に市町を設置すればそこには若干の居住者を必要としますのは勿論で、足利時代の初頃に出来たと云ふ庭訓往來の中にも、市町興行の事があつて、「凡そ招き居まゐらるべき輩は鍛冶鑄物師巧匠番匠云々」とありまして、手工業者の類は市町に定住するのが普通の状態のやうです。後々は唯の小賣商も追々市場に土着するやうにな

りましたものと思はれます。常住の商人と市日に來る賣手とは利益の屢々衝突するは當然のこと、地方に由つては市の日は土地の商人に店を閉さしむる慣習のある地方も近年までありましたけれども、(貿易備考に依る)多くの場合には土地人の方が勢力強く、或は市に賣るべき品物の種類を制限し、或は市の日を再び減少して、年に一日か二日の市、東京で言へば草市やベツタラ市の如きものにしてしまひ、又は全然市を滅亡させて近世的の町と成つてしまひました。武藏平原の多くの町、上州信濃では中山道北國海道の大驛、常陸では下館笠間など、近世まで月六才の市が立ちましたけれども、賣る品物も古著フルヤとか植木とか極めて僅の種類で、しかも専門の市商人の手に獨占せられ、近在の農民は金を携へて買ひに行くイと云ふ有様で、昔の市とは大分面目を變へました。唯ごく近頃になつてから繭生絲の取引が盛になり、市場は稍再び地方人の物買場であると共に物賣場であるやうになりました。昔の市立が常在の町と成るのは必然の發展であつて、地方の人が僅ばかりの生産物を自身に持出して販賣するのは迂遠にして且つ暇潰しのやうではあります。がそれには又

相應の妙味の伴つて居るものであることは、西洋の地方市街に必ず盛大立のあるのを見ても明かなことです。然るに聊も此が改良をば試みず、自然の成行に放任し或は税ばかりを取る目的物にして居るのは、如何にも不本意であります。私は山形縣の鶴岡の町で昔風の市を見ました。百姓の女は在方^{ザイカク}から漁師の女は濱から、三里も四里も小さな籠で自分々の生産物を運びまして、終日街頭に立つて交易をします。其爲か此町にはよほど小賣商店の數も種類も少なかつたやうに記憶して居ります。秋田縣の本莊でも早朝に市が賑ひます。此等は二つとも日々市でありますが、古風を存して居ります。市の在つた町は路幅が頗る廣く、當時は大抵市場の境に木戸があり制札が立ち、關西地方では必ず惠比須を市の神として祀つてありました。今日淋しき田舎にして存外家並が規則正しく、惠比須の社があつて其祭日のみは人が集まると云ふやうなのは皆昔の市の名残であります。

九

前述の如き市の中央集權の傾向は、一は大名の數が減じて戦争が段々大規模となり、平日から城下に富の力と人の力を蓄積して置かねばならぬ必要に基くものではあります。一つには又市場の數の多きに堪へなかつた爲もありませう。幕府領の公事取扱にも市場は村鑑次第^{ムラカミ}とありまして、舊來の特權は重じては居りますが、私の市は之を嚴禁し、又公認のものでも一旦中絶したものはなるべく之を再興させぬ方針を示して居ります。然るに奇妙なことは、之と同時に一方には頻に新町が出来て居ります。この新町は多くは新しき意味の町即ち市^{イチ}で無い町です。徳川前半期は新町建設時代と申しても宜しい位です。此等新町の記録は大抵残存して居りますが、所謂元和偃武の後程なく開設せられたるものが多いので、現今各地方の大字として残つて居る新町は數十箇所あります上、猶大多數の城下町には必ず新町と云ふ一區劃があります。田舎の新町には新田開墾に伴つて設置せられたものもあれば、街道の附替新設の爲に宿驛を開いたのも勿論多いのであります。其他はやはり各藩割據の結集再び舊時の弊を繰返したもので、もし全國が一政府の下に統括せられたら、

今些しく適當の配置をしたであらうと思ひます場合にも、隣藩に町を開いて地方の物資を吞吐するなら、此方にも町をこしらへねば損だといふ考の爲に、不自然なる保護をして、或は地子を免除し家作料を貸與し又は強制移住をさせるなど、以前安土其他の城下の町を作るときに實行した政策を此にも採用したのであります。九州を旅行して肥後の國境などを見ると殊に此例が顯著であります。阿蘇郡の馬貝原、高森、津留の町などは、國境も國境殆ど境線の上に窮屈な地割をして町が立てある。全く未だ開けざる日向の山村に對し所謂商業權を先占せんとする野心に基くものと推測することが出來ます。肥後藩は又豊後の岡藩に對しても竹田の町の西僅に二十町ばかりの玉來と云ふ町に官營の産物役所を設け、紙幣を發行して他領に流通させ、よほど岡藩の財政を苦しめたと云ふことであります。要するに徳川時代に成つて町が常設の日々市と成りましてから、一の町の經濟力はよほど昔よりも強大になつて居りますのに、而も其數がやはり多いとあつては、町と町との生存競争の烈しかつたことは想像に餘あることで、町の榮枯盛衰は今日を以て最も急激なりとしては居りますが、必しもさうでは無からうかと考へます。

10

説明が或は岐路に互つたかもしれませぬが私は先づ大體日本の町の發生にはよほど歐羅巴の多くの町と異なつた點のあることを申述べたつもりであります。要するに地方に割據する大小名は各々自分の領内に一以上の町屋を必要としました。領分の兼併は自然に町屋の併合を促しましたけれども、十分に其効果を奏せぬうちに明治と成つたのであります。國中の數萬の町はその烈しき生存競争の眞最中、くんづほぐれつ新時代へ落來つたのであります。新時代は商工業運送業の繁榮すべき時代でありました。そこで勢力の稍優越なる町は盛に四隣を征服しまして、略弱肉強食の事業を完成しますと同時に、内は一郷一地方に重大なる感化を與へまして、その全部が町本位と成つて了りました。今日は先づ千一百ばかりの町が町としての優勝者であります。城下や市町に接近して住む農民は、これからこの村は町

だと言はれてさうかと思ひましたのです。西洋の町は其發生の當初から町自身の爲の町でありましたが、日本の町は本來一郷一莊園の便宜の爲に作つた所のものが、近年始めて町の爲の町と成つたのであります。墮や城壁の有無と云ふやうな單純なる差異ではありませぬ。

併し町勢力の波及する區域には甚しく大小がありました。夙くからの城下の町などは殊に町區域だけで獨立の經濟を營むことを知つて居り、近傍地方を合同する必要を感じなかつたものもあれば、又夫だけの勢力を持たなかつたものもありました。従つて多くの町の區域は舊時代の郷の區域と同一ではありませぬ。土地を産業の基礎とする村では人口と土地面積との比例は大概一樣であるに反して、町の人口稠度には烈しい差等があります。日向の油津町などはその最も著しい例で、今日民家のある區域の外に殆ど少しの餘地もなく、近頃移住して來た住民は地續きの隣村内に家を構へ、町の世話になりながら隣村の村費を負擔して居ります、即ち油津の公共團體は其繁榮の結果を收め兼ねてをるのです。尾張の横須賀を始め愛知縣の海岸にはごく小さい町が大分あります。美濃の高須なども小さい町

です。美作の眞庭郡の勝山町と久世町とは隣どうし同じ道路の上に立ち同じ川筋に臨んでをりまして、舟運の便利は勝山の方が勝つて居りますが、其地域はと言ふと久世は六七倍もあります。景氣の良い時代には何の山林原野などは無くともと思ひ、農業なんかせずともと思ひますが世界の各國が擧つて領土を擴張すると同様に、土地と言ふものは最も自然的に人に職業を與ふるものであります。最も手近なる勞力需要者であります。而して土地の上に最も容易に自己の勤勞を利用し得る者は所謂地元の住民であつて、愈地元^{ヂモト}に人が無いときまつて始めて外部の勞力を招くのです。需要の基礎ある勞力の輸入は亦其土地の強味^{ツヨクミ}であります。語を換へて申さば他の條件が同一なる限は地域の大小は町の經濟力の強弱と正比例をする筈です。

殊に前からも段々申します如く、日本では町と村とは決して類の差ではありませぬ。一郷の中心を爲す町區域の比較的よく發達した所が自ら町と稱し、其他のものが村と稱するに過ぎないのです。所謂京に田舎ありで、大多數の町では些も農業をやらぬと云ふ町は有

りませぬ。表通は暖簾格子戸の隆とした町でも、裏筋には草屋があつて、畠もあれば田も作ります、町農會は村農會と同一の程度に活動して居るのであります。殊に町の農業には特殊の意義がある。大市街の周圍には所謂郊外農業と云ふ最も集約的な園藝業が發達しますが、町の附近にも或程度迄此現象があります。西洋でも目下頻に下水灌漑と云ふことを申して居りますが、土地の割に人が多ければ肥料の供給が潤澤であります。其上に農産物は手に近に良き販路があります故、農業の利益は僻村よりも遙に多く従つて農事改良にも張合があります。職業の違つた者の雜居は亦資本の融通にも好都合であります。此等の事情から將來の農業は町の附近殊に町と稱する公共團體の區域内に於て最も發達し易いので、純然たる農村に比べては事は小さいけれども、町の農業は決して之を拋棄し又は冷遇すべきわけ合のものではありません。従つて町と稱しながら三方里五方里の大地域を含み深山を含むといふことは、名義上をかしいやうではあります、そこが我國の特色で又町行政の問題の今後一層研究せられねばならぬ點であります。

私の考では今の一千二百の町を二に分け、其の一小部分を市と同一に取扱ひ、他の大部分を村と同名稱にして（例へば郷とか邑とか云ふが如き）何等感じの上の區別も無いことに改めたいのです。新町村は大概は昔の一郷一邑の區域であります。大か小か其中に經濟の中心のあるのは當然であります。町村を一の生活體にして經濟上にも一の單位たることを期しまするには、略地勢に依つて其區域を改正致しまして、銘々の規模に合したゞけの町屋を作り、一郷に一町一市場あること恰も各細胞に必ず核のあるが如く、鹿兒島縣の各村に必ず麓及町屋のある如くにしますれば、税にも買物にも賣物にも製造にも大體人の集まる所はきまつて居りまして、役場郵便局の位置の問題などは起らぬことは勿論、相頼相助の關係が強くなれば法文の強制を須たずに自然に結合が鞏固になつて行く筈です。然るに徳川時代には村といふもの即ち郷の一區域には散在もあれば密集もあり、寂しい片田舎もあれば賑しい町方もありまして、その一つ一つが經濟上の單位で無かつたのを見慣れた爲、大きな注意も拂はずに村々を合同させました。合同が機械的であつた所は何時迄も獨立生存の

自覚が起らぬ、農業は今尙半自給の状態で天然経済を行つて居るのに、公共團體のみは全然都會的 Commercial であると云ふ妙な時代になりました。今後の地方制度を論じますにはどうしても眼を此に着けなければなりません。町の増加ばかりを決して抑壓するには及びませぬ。寧ろ曾て發生した町を健全に育成して、個々の盆地に或程度迄の割據經濟を容さねば、大市街ばかりが振つて田舎の衰微を免かれぬこととなるの虞があります。この爲にはあまり町村の大きさを一様にすることはかりに骨を折るのはよくない。大小は天然の地形次第として少しも差支が無いのであります。

一一

さてこの序に現在の町に就いて今少し實際的の批評をして見たうございます。今日の一千一百餘の町は、其經濟上の立脚地から觀察しますと、明かに之を三種に區別することが出来ます。その第一種は即ち消費町、先づ以て遊覽地として起つた町であります。社寺温泉

鑛山等の爲に出來たもの、又は國道の上に在り水路の衝に當つてをりまして、旅人の出入の多い所は皆この消費の町であります。即ち金を持つて人の買ひに來る所です。以前の城下の町には他國からあまり入込まぬ町もありましたけれども、殿様及士族と云ふ失禮ながら不生産的人民が多數居つて物を買ひ大に繁昌を致しました。この有難味は深く町人の頭にしみ込んだと見えまして、今日と雖兵營が出来る縣廳が徙る裁判所學校が建つとなると土地人は狂奔します。役人は威張るけれども役所が出来れば物がよく賣れる、即ち消費町の本望は達する次第であります。此種の町は人氣が悪いと言はるか輕薄と申しますか、我旅人には良き感じを與へませぬ。青樓其他の遊場所を作つて、所謂土地へ金を落させるといふ算段は、日本を東洋の瑞西にするなどいふ人々の御説は知りませんが、さほど桶孔明でも無からうと思ひます。

第二種のもは交易町、發達の順序から申せば消費の町よりも却つて遙に古いのです。手ぶらで物を買ひに來る代りに何か手製の物品を持つて來て其の代金で何かを買つて歸る、

此が中古以前の市イチでありました。莊内鶴岡の例は前にも申しましたが、關東の平野にも八王子川越青梅ウメ飯能イハネを始として、薪炭なり雜穀なり生絲なり織物なりを馬の脊で持出し人の肩で運んで来る所は今日でも中々多いのであります。概して消費を主とする町よりも小さく寂しいけれども、先づ消費専門の町ほど輕浮では無く、所謂在方ザイカク Hinterland のある限はその基礎稍鞏固であります。唯かゝる町には肥料商の金持などが居りまして掛賣法を道具にして高く賣り安く買ふ二重の利を収める者のあるのは免れぬ弊です。それよりも憂ふべきことは、今日此等の町々に瀾漫して居る思想として、遠くへ賣り遠くから買ふといふ仲買を主とし、地方的消費を眼中に置かぬ點であります。東國ならば東京横濱、上方ならば神戸大阪を中心として、如何に運賃の嵩む品物でも必ず一旦は此を通過させると云ふ小賣法であります。これは汽車汽船と云ふ文明の利器が専ら遠地の運搬のみに優越なる利便を供する結果でありまして、其他の商業機關も亦近き地方間には之に相當るだけの設備が發達して居ない爲です。木綿織物の製造は段々一箇所に集注しまして、片田舎の住民

迄が大都會の太物屋を一旦通つて来た物ばかりを着て居る。駿河相模の蜜柑でも伊豆の椎茸でも土浦邊の蓮根でも沿海の魚類でも、田舎ですこし大きな宴會でもするには、必ず東京へ汽車で買出しに來ねばならぬ。その馬鹿々々しさ加減はありませぬ。一體中間商人といふものは調法には相違ないが、無くても有無相通に事を缺かぬ限はその勤勞を省略して之を直接生産に充つべきであります。現在隣村で作つて居るのを知りながら四段も五段も商人の手を経ねばならぬと云ふのは、不完全な經濟組織と言はねばなりません。交易町の社會上の機能は此點に於て將來大に擴張せらるべき必要が有ります。我々が産業組合に對して多大の希望を抱いてをりますのは全くこの爲で、つまりは反動の是非とも起るべきを期待してをるのです。

第三種の町即ち生産町は以上の觀察點から申せば一段と立進むたものであります。生産の町と申すのも漠然たる語ですが、今日の如く日本半國の繭を諏訪へ運んで無理なことをして職工を集め絲を製すると言ふやうでは無く、假令小規模でも地方々々の原料に頼り地

方々の勤勞を利用して、滓^{カス}その他の副産物を土地に残し、荷を軽くして送り出すといふ製造業の町です。それほど満足には行かずとも、大體工業を地方分権にするのは何れの國でも必要に成り且つ可能に成りました。農業には生産期の關係上勞力に餘剰が出来易い、原料の供給から残滓の利用に至るまで、御互に便利を得る上に、更に郊外農業の利益があるのです。此の如くしてこそ經濟組織も時代と共に愈緻密に成り得られるのです。今日迄の都鄙農工の結合が蚊張^{カサチ}地のやうな魚^{イサ}い組織だとすれば、これから後の結合は綾か錦のやうな精巧な組織になるのです。私が生産町を推薦するのはこの意味合を含めて居りますのですが、單にそればかりではなく町の基礎としても消費を目當にして居るものは最も心細く、交易の町はやゝ完全とは申すものゝ、更に地方的消費を發達させて、町からも在方からも互に相手を御得意として敬意を表するやうにならねば、まだ十分に鞏固なる基礎を持つて居るとは言はれぬのであります。即ち此の如く發展して行くのが國是にも合すると同時に町是にも適すると言つて宜しいのです。越後の三條は國道の上に立つ舊都會で、地方

人にも旅人にも面白い楽しみ場でしたが、汽車の開通は徒歩の旅人を無くしてしまひ、信濃川の通船も荷物ばかりに成つて、大に町の泊客が減りましたが、幸のことには此町は夙くから生産の町でありました。東國に於ける双物金物類は盛に此町から出ますので、將來の衰微を思ふるには及ばぬのです。三條の對岸の燕町も銅器の生産町で、信濃川水運が衰へても白根のやうに疲弊することが無いのです。紀伊の黒江町は東國通船の港でありました、帆船が汽船と成つては港は最早不要になりましたが、漆器の生産を基礎とする限は尙一層發達するの希望が十分にあるのです。此等は一例に過ぎませぬが何れの町でも農工林漁を問はず物産を開いて其存在を安泰にせねば、名は存して町の實は速に之を失はねばならぬのであります。併し勿論此は現在制度の下に於て言ふことで、根本の論としましては町と村とその經濟上の意義に差別は無いものであるといふ私の説を御承認あらんことを望みます。

(明治四十二年二月 統計協會に於て)

日本に於ける産業組合の思想

一
日本の産業組合を研究し之を發達させて行かうとなさる人々は、是非とも其沿革を明かにしてお置きになる必要があります。私の研究しました範圍内に於て、此思想が如何に此國に發達して來たかと云ふことを、御参考の爲に申述べます。

元來世の中には舶來の制度と云へば一も二もなく歓迎する人と、また徹頭徹尾嫌ふ人と二派あるやうに思はれます。是は雙方とも極端に馳せて居りますから戒むべき思想であり

ます。けれどもどちらかと申せば、後者即ち西洋の制度に不安心を抱く人、舶來の制度を安心して採用せぬと云ふ傾きには多少の理由があります。第一、二千年來發達の經路を異にして居る日本の現在に、隣の島から植木を持つて來るが如く、容易く西洋の制度の輸入が出来るものではないかもしれぬ。まづ彼と此と風土が違ひます。氣候が違ひます。人種が違ひます。従つて人種に伴ふ所の感情も習慣も悉く違つて居るのであります。單に空論ではなく事實としても吾々の家族の組立方、村落の結合の有様等、悉く西洋と日本とは違つて居るのであります。故に西洋で完全無缺の制度と目せらるゝ産業組合の制度も或は我國には適應しないものでないかと云ふ懸念は道理ある懸念であります。此懸念を散ずるがためには、外國の産業組合の成立つた所以を御承知にならなければならぬが、同時に又我國の人は果して組合を造る素質があるか、乃至は必要があるか、必要が現在に存在して居るか、云ふことを根底より調べて見る必要があるのであります。言換へて見ますれば我國民は過去に於て如何なる經濟的生活を爲して居つたが爲に、現在此の如く苦しうして而も有望な

る、心配多くして而も勇ましき國情を作つて來たのであるか、此問題が同時に日本に於ける組合制度の沿革如何と云ふ問題になるのであります。尤も日本でも西洋でも産業組合——只今吾々が稱して居る産業組合には歴史と云ふ程の長い經歷が無いのであります。現に西洋でも今の産業組合が起りましたのは僅か五六十年以來のことであり、殊に農業に於て組合の設立が重きを爲しましたのは僅々十年か二十年間のことであります。農業組合の繁榮を見るやうになつたのは十年以内のことであり、製造業界に於ては久しく種々の困難なる問題即ち所謂社會問題が發生して居りましたのが、外國に於ては此産業組合の力によつて頗る圓滿に其大部分の解決をしたと云ふことは種々なる書物にも出て居りまして、諸君既に御承知のことであらうと思ひます。是が爲に下級の勞働者の生活の程度が改良せられ、幸福の増進致したことは著しいものがあるのであります。數字で示し得る著しい現象があるのであります。而して農業界に於きましても、亦發達の期間こそ短いけれども、同じやうな現象があります。元來農政の上で大問題と目せられて居る所の大地主借地農主義——

對し小地主自作農主義の議論と云ふものは、今に尙決定して居らぬと言へば言はれるのであります。今の學者中にも、大きな地面を持つて居る地主がそれを切つて他の農業者に貸付けること恰も英國の大部分に行はれる農法の如きものが宜しいといふ人がある。又ごく小さく一町歩二町歩の自分の所有地を耕作する農業が宜しいと云ふ人もある。二説の可否は種々の點より論ぜられて居るのであります。而して私一人の信ずる所では無く多數の説の歸する所は、國家それ自身の見地から見ますれば、小地主自作農主義即ち地持小農の主義が適當だといふことであります。此説も古くから行はれた説で、日本に持て囃されて居るところの英國のジョン、スチュアート、ミルの書物を見ても、農業の政策としては必ず地持主義の保護を努めなければならぬと云ふことが數十頁に亘つて論じてあるのであります。故にミルの説を金科玉條の如く信ずる經濟學者は是に付ては全く争の無きこととまでに信じて居る者が多いのであります。然るに驟つて近世の事實を見ると、ミルの爲に結構至極の状態と目せられて居る地持小農なるものゝ困難は言句に絶して居るのであります。從來競争は

農業には全然無い、若し有つたならば唯人間の勤勉不勤勉の競争であると云ふやうな樂天的觀念を持つて居た人も、近世の事實に因つて其迷を醒さなければならぬことになりました。日本の國內に於ても各地方の農業者間には常に競争がある。自分で作つて食ふ時代には競争が起りませぬが、餘ある農産物を賣る、賣るが爲に特用の農産物を作るといふ時代となれば競争がある。一例を申せば麥稈眞田マナダが結構であると云へば全國に生産せられ、蘭蓆が利益があると云へば全國に栽培が行はれる、従て原産地に在ては從來の如く十分の利益を収めることが出来ない。これは理論のみならず事實が證明して居るのであります。況んや國內の小區域内の競争は之を防ぎ、如何やうにも兩立することが出来ましても、外國の競争には斟酌はない。日本が十數年來少しづつ外國の競争に苦んで居ることは、吾々よりも實地に當つてお出でになる諸君の方が多く御承知と思ひます。この外國との競争の慘害は農業者は早晚免かれることが出来ぬ。然るに之に對して最も早く敗北し易き者は資力の不十分なる小農であることは申すまでもない。さて是が借地農即ち小作人に限る困難であつて、自分で

耕作する地持農であるが爲に其苦が軽減せられることが出来るかと云ふとさうではないのであります。寧ろ或點から申せば職業を轉ずることが不自由なるがために土地を所有する農業者はより多くの艱苦を嘗めなければならぬ場合がある。そのみならず地持小農が到る處苦んで居るのは仕事に骨の折れる點であります。過大なる勞働を農業の爲に要する點であります。製造業に付ては工場の職工には所謂八時間問題といふやうな勞働時間制限問題を唱へる者がありますが、農業者は勞働時間の制限などは夢にも知らぬ。今一の點は農業者も同じく生産者企業者でありながら市場に對して些も勢力を持つて居らぬ、是が大きな弱點であります。自分は生産者でありながら市場に對して少しも懸引が出来ぬのであります。値が廉いから賣らぬ高くなるまで待たうと云ふ力も無ければ、そんな安い値では賣らぬと仲買問屋買主などを脅かすに足る勢力が少しも無い。資本の餘力が無いために、販路を擴張する手段を求めること、原料を廉く買ふ手段を求めることが更に出来ぬ。日本の例でありませぬが、佛蘭西などの地持小農は工業の勞働者が漸次自ら其地位を改良しつゝあるに

拘はらず、益々苦しき地位に陥りつゝあることは事實であります。是が爲に獨立の産業者に對して地所は持ちながら實は日傭で雇はれて居る者よりも苦しき生活をして居る者が少なくない。のみならず工場法の規定を御覽になつてもわかる如く、製造業では子供の勞働に對して制限を與へて居る。十歳以下の者は連れて來てはいかぬとか、十四歳までは學校へやらなければならぬとか、婦人は分娩前三ヶ月以内の者は働かしてはいかぬとか云ふやうなことが工場法には規定してあるに拘はらず、農業の勞働者にはそんな事はないのであります。女房子供にもつらい仕事をさせなければならぬ。之に依つてミルの説ではあるが地持小農は有難いものではないのであるまいかと云ふ疑が學者間に起つて來たのであります。従つて近年になりまして再び大地積を持つて居る地主と、之を借りて小作する借地農と勞働者と三階級に分けて、各之を保護するが宜しいと云ふ議論すら出て來たのであります。併しこの借地大農主義に對しては非難もあります。あまり枝道に入りますから簡単に申します。先づ一國の利益から申しますと移動し易き勞働者の數を殖やすこと、遊んで居て食ふことの出

來る大地主資本家の如き人民の階級を造ること、若くは健全なる田舎の中流の土著人民を失ふ恐れ等、種々なる點から申しますると、現在の小農の状態が悲觀すべきものであると云つて、直に大地主借地主義を奨励しなければならぬと云ふ斷案は出來にくいのであります。併しながら是が大いなる矛盾であります。一方に此の如き小農の不幸があり、一方には國家の必要から申せば、地持小農の保存が必要であると云ふ相容れざる兩端を結び付けるので、其爲に實際家及學者が從來長い間悩んで居たのでありますが、一旦この農業組合の方法が行はれ普及致しましてからは、多數の識者は始めて此間に一道の光明を認めることが出來たといふのであります。即ち農業組合なるものは小農を存続せしめて之に大農と同じ利益を得せしむる方法であります。一言にして申せば大農の缺點を除いて大農の利益を收め、小農の缺點を除いて小農の利益を收める折衷策と見做されて居るのです。英國の如き舊來の制度の保存を重んずる國でも、此十數年來の小農組合研究の進んだことは著しいものがあります。まだ十分の實績は擧げて居りませぬが、確かに此方面に開拓をして行けば、農業の未來もあまり悲觀するに足らぬと云ふやうな考を人に持たしめたのであります。

二

前述の如く産業組合は農業の部面にては固よりのこと、他の方面即ち商工業等市街地の人民の間に於きましても、極新しい發達と申して差支ないのであります。よく人の言ふ如く今より五六十年前獨逸でも英國でも佛國でも殆ど時代を同じくして組合の起つたのが始であるのです。其前にも少しづつ萌芽はありますが、一言にして申せば極めて新しい制度であります。是は必しも不思議のことではない。我國に於ても産業組合は僅か十年來の事柄であります。併し其以前には少しも組合と云ふ思想を持つてゐなかつた人間が、果して今日になつて急に組合を組織するに適する人間にならうかと云ふことを疑ふ人もあります。が、是は疑ふ必要はないのであります。殊に日本の如く近年まで封建の制度が行はれて居りました國では、組合の盛大でなかつたのは少しも不思議ではないのであります。なぜかと

組合の思想の新しく生じたる所以

申せば、全體御承知の通り組合なるものは對等なる人と人との間の關係であります。然るに封建の時代は差別の時代でありました、平等の時代ではなかつたのであります。二人の人があれば其間には必ず一人は上、一人は下と云ふ上下の階級のあつた時代であります。一家の内を初として各藩各領の中にも、武士は武士百姓は百姓町人は町人で階級を具へて居つた時代であります。此階級と云ふのは單に汝と我と何方がえらいと云ふ優劣でなくして、實際の上と下とであります。上は自分の下に向つて服従を要求することが出来ると同時に、服従させる自分の眼下メシクに對しては自ら進んで保護をした時代であります。如何なる保護をもした時代であります。従つて自分の從屬、自分より眼下の者が困窮に陥つて居るのを外部に暴露するのは、眼下の者が自分に對して反抗をするのを外部に暴露すると同じ様に、恥辱と考へて居たのであります。家族内に不幸の人間が出て路頭に迷ふ、自分の家の眼下の者に困窮して世間の救助を仰がなければならぬ者があると云ふことは、殆ど忍ぶべからざる恥辱と考へたものであります。その爲に主家と從屬との關係に於て種々なる困窮を救ふ

方法、若くは不幸を防ぐ方法を立てなければならぬ社會組織であつたのであります。是はごく抽象的に一番極端の例ばかり申したのであります。全體の社會が總て此思想の上に組立てられて居つたのであります。是は決して土地の領主と領内の人民とばかりの關係ではないのであります。一の村落の間にも同じ様な事がありました。分家と云ひ新家と云ひ抱百姓カ、ハと云ひ庭子ニホコと云ひ、地方によつては被管ヒクワンなど申して居りますが、此等の眼下に屬する人々は極めて低い、今日から見れば憐れなる生活を致して居たが、兎に角安穩でありました。不作の年には翌年の種籾を貸して貰ふのみならず、夫食フシキ即ち食料もことによれば供給して貰ふ、年貢の取れぬ時には延期を許して貰ふ、自分の家に臨時の災害があれば臨時に救助して貰ふ。其他祝儀不祝儀に付けて自分の本家と云ふか若くは主筋と云ふかおも家と云ふか、其家に對しては從屬して頭を下げなければならぬが、其代りには保護も十分に受けて居たのであります。話は岐路になります。私共の承知して居ります地方で、大地主の家には自分の家の平年の收穫を入れるよりも尙餘りある大きな倉庫を持つて居る、これは凶

昔は被官に對する保護厚かりき

年の手當の制度が残つて居るのであつて、現在は凶年の手當を要せぬ爲に其倉を明けて置くものが澤山有ります。地方の大百姓の多くが自分の家の規模に比較しては倉庫の面積が大きいと云ふのは、是等の原因より來て居るのであります。今では痕跡が分らなくなつて居りますが、兎に角農村の間には少數の長百姓と多數の小前の者即ち古い分家とか新家抱百姓などが有つたのであります。尙又はが土地に關係のある勞働若くは農村に住んで居る農家はばかりで無く、進んでは商工業者の間にも同じやうな關係があつた。是は皆其時代の氣風の感化であります。或は出店デパートと云ひ暖簾内インショップと云ひ、暖簾を分けると云つて、小民とその親代が出入をして居る大店との關係も亦服従と保護との封建制度の眞似をして居たのであります。殊に古くから有る都會例へば大阪堺京都などには其慣習が十分備はつて居つて、それが不文の法律にも社會の道德にもなつて居つたのであります。此慣習が無かつたならば、僅少の發達ではあります。兎に角維新の際までに於る日本の經濟があつた程度までには進んで居らぬ筈であります。或は諸君には維新前には全然信用組合的の機關を缺いて、よく小市

街や村落にあれだけまでの經濟を發達させて行つたものと云ふお考があるかも知れませぬが、それに代るべき制度としては、保護と服従との聯絡は不完全ながらも必要を充たすだけの程度には付いて居たのであります。現在の組合に代るべき制度と云ふものは兎に角昔にも存在して居つたのであります。併しながら是は極めて完全なる封建時代の有様を抽象して申上げたのであります。世の中の發展に従ひこの服従保護の封建的聯絡が弛むにつれて、組合の制度が之に代つて起るべき必要が次第に感ぜられる様になつたのであります。

三

それは第一に商工業であります。是は何れの國も同じ事でありまして、一番最初に組合と云ふものゝ名稱若くは組合と云ふ實質が発生しましたのは西洋でも我邦でも皆市街に住んでゐる商工業者の中に於てあります。元來が土地に關係の無い商工業でありますからして、封建時代の慣習を模倣したと云ふ迄に過ぎませぬので、御互の間はさうく服従と保護

との關係ばかりでは無いのでありますから、次第々々に銘々の者が獨立したる地位を得る、言換へて見れば平等の關係に立つやうになつたのであります。其爲に平等關係の聯絡機關として組合を作るの必要が先づ市街の間に起りました。既に御承知であらうと思ひますが、最初此組合と云ふ文字の起りましたのは何れの國でも皆市街でありまして、現在の産業組合のやうに農業者を助ける趣旨の者ではありませんぬ、先づ今の同業組合に似寄つたやうな組合は随分古くから繁華な市街には存して居りました。此等の組合は中頃は名ばかりで殆ど役に立たなくなつて居りましたが、近年に於て再び盛に此制度が行はれるやうになつたのであります。此の如く久しき以前から或は組合と稱し或は種々の名稱を以て對等なる産業者間の聯絡を付けて居りましたのは皆市街地であります。西洋でも現在の同業組合よりは却つて中世の市街地にあつた處の同業組合の方が仕事を多くして居つて勢力も強かつた、政府からも種々なる特權を與へられて仕事を澤山して居つたのであります。併しながら要するに徳川時代に於ては封建の遺習が完全に取去られなかつたと同じやうに、組合の制度

もまだ完全の度まで發達して居らなかつたのであります。

次に村落に於ける組合であります、是とても決して明治になつてから、即ち封建制度が全然跡を絶つて了つてから、始めて盛になつたのではないのであります、現に徳川時代の中頃から既に組合の必要と云ふものは村落に於ても徐ろに感ぜられて居つたのであります。即ち農業者と農業者との間の對等なる關係に於て聯絡を付けると云ふことの必要を感じ、若くは其機會が生じて居つたのであります。其原因は數へて見ますれば中々澤山ありますが、主たる點を申しますと、第一には一領一給、即ち一つの藩とか一つの領分とか云ふやうなものが非常に大きくなつたことです。中古の領主と云ふものは多くは一人が郡の半分か四分の一を持つて居つた位であります、夫が徳川時代となると大名と言へば一萬石以上でなければならぬ。又その數は非常に少なくして、中には一人にして二十萬石も三十萬石もの大名が有る。斯うなつて來ると領主と人民との間の關係は、非常に遠ざかつて來なければならぬ。恰も小さき君主國と同じやうな姿になつて了つた。もう一つは

昔は各藩の士が土地を貰つて居つた。例へば尾州なら尾州と云ふ一國を一人の大名が持つて居つて、其の内の又十分の一若くは二十分の一の郡なり村なりには家老なり重なる士なりを封じて居る。それで大きい領地の下に小さい領地がありました。徳川の中頃からはその段々なくなりまして、知行といひながら玄米で支給するやうになつて、全領地を通じて一人の大名が支配するやうになつた。此の如く領主と人民との關係が段々に遠ざかつて、恰も君主と人民との關係のやうになつた爲に、次第に保護服従の關係と云ふものが直接には行はれなくなつて來ました。第二には人口の増加して來たことであります。昔は村方の住民が概して少ない爲に、秩序を維持するにも樂であつたが、人口が多くなりますれば、村中の關係が複雑になつて來るのみならず、人間が彼方に行つたり此方へ來たり、段々他町村に移住します。百姓の移住と云ふものは他に養子に行くとか云ふやうな場合でなければ少なかつたかも知れぬが、縁に離れた浪人がやつて來た、或はお醫者が來る、遍參の坊主が他所からやつて來てお寺に住むと云ふやうな事があつた爲に、村中の者を上下

の階級にきちんと嵌めて了ふと云ふやうな單純な形式ではなくなつて了つた。第三には大地主の勢力の衰へたことであります。是は現在でも吾々が目前に感じて居る如く、大地主の勢力と云ふものは種々の原因から減退致します。あの家は今こそ金を持つて居るが祖父の時代迄水呑百姓であつた、近頃成上がり金持であると云ふやうなことを云つて、其無形の勢力と云ふものが失墜して來た。是は古い時代には著しくなかつたことであります。併し祖先傳來の金持と云ふ者も、百五十年か二百年經つと零落するのは殆ど自然のことでありまして、百年か百五十年經てば又別の水呑百姓が金持になる。こんな場合には新しい金持に對する尊敬の念が薄くなつて、精神上の服従と云ふものが無くなつて來ます。一方には年代が經つて來る内に、本家分家母屋新屋オモヤシムヤの關係が薄くなつて來る。苗字が同じだからあの家から分れたに違ひないが、今では別だと云ふ様な事から、本家と分家との關係、地主殿と抱百姓との關係が亦對等になつて了ひ、彼處の家に對して頭を下げる必要は無いと云ふので、次第に昔風の秩序は、破れて來たのであります。斯うなれば下方シツカクに對する世話も義務と

は感ぜられぬのみならず、介抱をするのもまことに張合のないことで、従つて恩威並び行はれるといふ様な風はなくなつた。凡ての百姓は縦令小前でも又一人前の百姓で誰の下にも立たぬ。俗語で申せば團栗ドングリの香競セツクラべになつて了つて、金持の方でも饑饉に出逢はうが十分世話をしても呉れず、此方は又世話を受ける氣も無い。従つて百姓は小さいながら追々と自分の身じんまくをして置かなければならぬ。是に於てか別に郷黨團結の力に依つて各人自ら萬一の凶厄を免れなければならぬと云ふ考、即ち組合の必要を感じるやうになつたのであります。

四

徳川時代の歴史を見まするに凶年の慘害なるものゝ世の中の記録に残つて居るのは、前半期中よりも後半期に於て遙に多いのであります。此には何か理由が無ければならぬ。古い學者の説では世の中が將に亂れんとする時には災害が多いと申しますが、必ずしも天文

と社會の人事とが密接な關係をもつて居る譯ではありませんまいが、つまり社會の組織が緩めば緩む程、言換へて見れば國が亂れれば亂れる程災害が著しく眼に立つて來るのであります。支那の歴史を見ても唐なら唐の盛大な時には饑饉の害悪が少なく、衰へかゝつてから其害悪が多いやうです。それは全く社會組織の變動の然らしむる所であります。日本の徳川時代の後半百五十年間に於て饑饉其他凶年の慘毒の著しかつたのも、一つには社會組織が弛緩した爲に、一層明白に外部に暴露したのでありませう。即ち保護の力が緩んで來た結果、一領地一地方乃至は一村一族限りで之を防ぐ手當テアテが付かずして、自然に握つた手から水の漏れる如く、其不幸が外部にも知れ渡るやうになつたのでありませう。例へば近年亞米利加や印度や露西亞等に於ては、外國から義捐金を貰はなければならぬやうな災害が何度もありました。日本の明治時代にも外國から救助を受けなければならぬやうな災害があつて外國人の施與を受けましたが、必ずしも國の恥とも言ふことの出來ぬと申すわけは何かと云ふと、つまり社會組織が昔と違つて居る爲であります。吾々の父や祖父の時

代に於ては、自分の一族乃至は同村の人が他所から救助を受けたといへば随分恥かしく感ぜられた、けれども是は古い感じであつて、現在の社會組織から言へば、個人は凡て平等關係でありまして、銘々自分の始末をしなければならぬ事になつて居るのです。其關係よりして他人が外國の救助を受けることは、其人としては兎も角、はたの者が恥辱であると言ふことは言へないのであります。尤も是は饑饉の災害があつた場合に黙つて平氣で見えて居るのが良いか悪いかといふ事とは別問題であります。兎に角世態が變れば災害救済の方法も亦かはらねばなりません。右申す如く凶年の災は何も古い時代の方が少ないわけでは無いが、兎に角天明前後から非常に目立つて来るやうになりました。今年はその地方が不作だ、明年はこの地方が饑饉だといふやうに、凶災の續發と云ふ事が自然に世の政治家の注意を惹くやうになつたのは尤千萬な事でもあります。人民の方でも亦過去の自分の難儀、若くは目前の他村の難儀を見て、何とか平年よりかねて手當をして置かなければならぬと感じて來たのは當り前の事でもあります。随つて凶災に對する豫防と云ふやうな消極的のもの

のではあるが、兎に角此爲に組合を立てる必要のあることは、朝野共に著しく感じて來たのであります。元來是は日本に限りませず、外國でも同じことでありまして、組合を作る動機は皆下級の人民が困窮を極めて後に始めて現はれるものであります。英國のロックデールの織物職工が、非常に長い年月の忍耐を以て僅かの資本を集め、今の盛大なる購買組合の基礎を作つたと申すのも、元はと言へばあまり日々の生活の苦しさに堪へない所から起つたのであります。近年に至つては愛蘭に於てプランケットと云ふ代議士の首唱の下に大いなる聯合組合が起りましたが、是等も愛蘭の農業者の生活が不幸を極めて、個人の方では如何とも之を脱する方法が無いから始めて起つたものであります。獨逸に於きましても同じことで、シュルツェやライファイゼンが出て信用組合を作つたと云ふ時代には小民の窮乏は至急何か救済の方法を立てなければ可けない、組合でも設けたならば或は救済が出来るだらうかと云ふ感じが一般に著しくなつた結果であります。又丁抹の農業組合殊に畜産の方面に於ける共同販賣の事業が盛になつたのは、驚くべき事實として我邦に傳へら

多くの幸福なる組合は艱苦の底より現はれたり

れて居りますが、この丁抹の農業組合が起りました元は、外國穀物の競争の結果、穀作農業の如き利益の少ない産業は止めて了はねばならぬかと云ふ悲觀的の感じが盛であつた時に、始めて此等の組合が農業者の間に起つて來たのであります。であるから北米合衆國の如き國では、農業組合が農業者の爲に利益であるといふことは研究の結果十分明白であるにも拘はらず、他の諸國の農業組合理に實際發達して居らぬと申しますのは、全く彼の國の農村經濟の狀況が未だ獨逸、愛蘭、丁抹など程に太甚しく疲弊して居らぬからであります。處が日本では之に反して、憲法が萬民歡呼の裡に發布せられたことが、英國佛蘭西獨逸境地利近くは露西亞等で血を流し強壓を加へて始めて發布せられたのと大いに其趣を異にして居りますと同じやうに産業組合の起るに付きましても有難いと言へば有難いのであります。が、小民困窮の勢が極まつて始めて自然に發現したのでは無くして、未然に此災害を防ぐ爲に少々早めに現はれ出たのであります。早く組合の利益を知つて居りながら、其時期が來ぬからと云つて困窮の行止り迄待つて居ると云ふ馬鹿もありませんから、早く悟つて之

を豫防するのに越したことはありません。併しながら此結果として自ら充分に必要を感じて居らぬ人に向つて吾々が組合の必要を説かなければならぬ。自分には組合を作るの必要を感じない階級に屬する所の貴君方や私共が、組合を設けて自ら助けねばならぬ本人に向つて其必要を説かなければならぬと云ふ妙な有様になつたのであります。従つて一方には遊び半分に研究して見ようかと云ふやうな人も無いではない、私なども或は其一人であるかも知れませぬ。而も組合の最も必要である人々即ち比較的一番不幸なる生活をして居る人達が、或は之に對して冷淡で居ると云ふやうな事があるかも知れませぬ。是は餘程當局の方々に御注意を願はなければならぬ點であります。之に比べますると昔の徳川時代に於て凶歉の手當仕法シホカを行ふ爲に起つた農村の組合と云ふものは、當事者自身時勢の必要に迫られて作つたものであります。御承知でありませうが、享保五年の饑饉なるものは、中國西國の大饑饉でありました。其後引續き數度の凶年があり、更に又天明天保と云ふ間を短く隔てまして二度迄大饑饉がありました。長命の人は一生に二度の大饑饉に出逢つたのであ

ります。此大饑饉の前後に小饑饉の数はいくらあつたか知れぬのであります。是等の経験から眉に火の著くとも申しませうか、非常に痛切に組合を作るの必要を感じたのであります。彼の有名なる報徳社などが出来て僅かの間に大なる力を得たといふのも、別に官の力で勧誘したのではなくして、一布衣の二宮翁が先導して而もあの位の功を奏したのは、全く時勢が最も之を熱望して居つたのが主たる原因でありまして、制度其ものが優つて居つたばかりでは無いのであります。かく申すのは人民の側から見た言でありますが、又一方には政治家經濟學者と云ふやうな人々の間にも、凶歉の手當方法は如何にすべきかと云ふ研究が、徳川の後半期になつて非常に進んだものであります。今日でもちよいとされた本屋で買ふことが出来ますが、徳川の末には所謂荒政に関する書物の出版と云ふものが非常に澤山ありました。値打のある若くは値打の無き荒政の書物が無数にありました。多くは支那書の翻譯でありますけれども、兎に角荒政書が非常に澤山出版せられました。(明治二十年の前後にも此類の荒政書を多く出版したことがあります)。此の如き機運でありましたから荒

政の書物を読みまして支那の所謂仁政の研究をやつて見ようと云ふ人が甚だ多かつたのであります。右の凶荒に對する政策の中には、例へば租税を免ずると云ふやうな事もあります。若くは最も烈しい窮民だけは救助小屋を造つて世話をすると云ふやうな事もあります。其他種々なる救済政策がありますが、其中にも區別をして見れば凡そ二つの種類があります。一方には政府が手を下すところの他力手段の外に、人民に自力でやらせて見たならばどうであらうか、自分の頭の蠅を人にばかり逐ふて貰ふ必要は無いから、自分自身に救荒の手當をさせたらどうかと云ふやうな研究もなか／＼進んで参つたのであります。是等の制度は詳しく申し上げますれば餘程長くなりますから、極めて簡単に申し上げます。

五

荒政の研究に付きましては色々興味ある事柄があります。例へば飢饉年の食物の研究即ち所謂救荒本草の學問は近代非常に進歩しました又一方には救助小屋の管理設置の方法も

頗る綿密に研究せられて居ります。興味ある問題であります。組合の制度に餘り關係が有りさうに無いから止します。唯茲に申したいのは、前申した他力事業と自力事業との區別でありまして、自力事業の中でも取別け研究に値するものは所謂社會の制度であります。尤も別に昔の學者は自力他力の分類をしたのではありませぬ。昔の人は普通に三倉と云ふことを申して居ります。三倉とは義倉社會常平倉のことです。此分類は後に申しますが、この三倉制度はその他の荒政問題と共に徳川氏の時代には頻に研究せられまして、政治學者の好題目でありました。前に申上げた如く徳川三百年を二つに分けて百五十年、その前期の方で之を研究した人は山崎闇齋の如き三輪執齋の如き人々、後期では有名な甘藷先生青木昆陽の如き、中井竹山、佐藤信淵、齋藤拙堂、藤森弘庵の如き、是等の學者には皆各三倉に關する立派な著書があります。殊に藤森氏の著書の中には唯今の言葉で申せば相互主義の議論までもしてあります。徳川時代に支那の學問が頻に流行して居つたことは、三倉の制度その他の荒政の問題を研究するに付いて大なる便宜でありました。支那の學問

といふ中にも殊に朱子學が盛でありまして、此學派が當時の公認儒教であつたことは更に又三倉の研究に大なる便宜でありました。何となればこの朱子といふ人は支那に於ける社會の殆中興の祖であるからであります。社會の事業は朱子以前にも之を企てた者がありますが、社會といふ文字は朱子より百年も前から待はれたやうであります。之を實際に現はし所謂物にしたのは朱子の力であります。若し此社會の問題が朱子で無くして他の學者が研究して居つたならば、その日本に對する感化力は、思ふに遙に少かつたであらう。幸に朱子が之を研究且實行し又徳川時代の日本に朱子學派が重ぜられて居つたといふのは非常な便宜でありました、實際右の社會の問題は後年報徳社等の形を以て實際に現はれて來る以前、既に深く研究せられて居つたのであります。

さて三倉といふ語の意味を少しく申上げた方が便宜かと思ひますが、其中の常平倉といふのは、多少社會などは趣を異にして居るもので、其文字が示す如く穀物の價を平準するのを目的として居る貯穀方法であります。やはり現在の農民や穀物商などが注文して居る

やうな目的を、關稅政策などの力には由らずに遣送げようといふものに外ならぬのであります。即ち豊年には穀物が極めて廉い故に産額は多くても總収入が少なく、結局は凶年に於て米が高くても賣る程の收穫の無いのと同じやうに不幸でありますのを、さう云ふ時には常平倉の基金を以て世間の相場より少し値をよく買つて貯へて置く、それから饑饉年に食物が高くなつて一般人民が苦しみます時には、市場の相場より少しく廉く常平倉に貯へて居つた穀物を賣つてやるのです。なほ細かに申せば常平米の買置及び賣拂の數量は共に豊凶の程度に従つて加減し、大凶の年には大豊の年に買込みたる數量を賣り出し、中豊の年の糶米は中凶の年の糶米とするといふやうに、つまり常に穀物の價を平準して生産者の収入を平らにすると同時に、消費者の便利をも圖つた制度でありまして、一見餘程趣味のある方法であります。次に義倉と申しますものは純然たる飢饉年の手當であります。平年に人民の穀物を共同に貯へさせて置きました之を飢饉年に施すこともあり貸す場合もあります。つまり飢饉年の用意に貯穀をする倉です。茲に所謂義といふ意味は義眼だの義齒だのといふ

義では無くして、人の爲にすること、英語で申せばアルトルイスチック（利他）といふやうな意味の義であります。社倉と義倉とは常平倉と義倉とが違つて居る程意味が著しくは違つて居りませぬ。社倉の社といふのは要するに町村といふ字であります。公共團體といふ字であります。支那でも今日日本で町村といふものを、或は村と云ひ或は里と云ひ郷といひ時代に依つて町村制上の名稱が違つて居りますけれ共、古い時代には今日日本でいへば町村と云ふべき所を社と云つて居りました。我國で大字といふべき所は會と言つて居ります。社倉とは要するに公共團體が經營して居る義倉といふ意味に外ならず。若くは町村を一つの組合區域とする救濟組合といふ意味に外ならぬのであります。

六

さて朱子の企てました社倉のことを概略申しますが、朱子の時代は御承知の通り宋の朝廷が稍々衰微いたし楊子江以北では前には遼金の爲に後には蒙古の爲に攻められ、段々江

南に壓迫せられた時代でありまして、舊版圖の一隅に僅かに宋の社稷を保つて居りました。こんな時代の常として政治の上には弊害が多い。困難な財政の下に餘り正しく無い、例の秦檜や王倫のやうな政治家が居つて、善政は餘り行はれて居らぬ時代でありました。随つて一方には又凶年飢饉の災害が多かつた時代であります。窮すれば亂するで、我邦の如き良い人ばかりではありませぬから、飢饉の有る年には支那の窮民は多くは臺灣で申す土匪、滿洲で申す馬賊といふやうな者に爲る。朱子の住んで居りました建寧府といふのは南宋の首府に近い地方でありましたけれ共、而も飢饉の結果として群盜が盛んに横行いたしました。朱子の住んで居た崇安縣の隣縣までも盜賊が盛んに起つた次第であります。その時に之れを救済するには源に溯つて救ふの外はないといふので、府廳に常平米の貯へがありましたのを六百石ばかり借り受けた、朱子のやうに民間に在つて勢力のある人が居たから全くさう云ふ注文が出来たのであります。今申せば所謂運動をしたのでありませう。さてその借受けた米を以て相應な利子を取つて收穫の時に返すといふ約束で人民に貸しました。その

結果朱子の居る地方だけは盜賊が入らずにしまつて大分成績が良かった。その後二度目の飢饉年にもまた同じ方法を繰返して、矢張り常平倉の米を六七百石借出し、一石に付二斗の利米を取つて數年續けて之を貸しました。その後必ずしも凶作といふ場合で無くても、人民が何か入用があつて翌年の收穫の時まで食續かれぬいふ時には、次の收穫期に二割の利子を附けて返す約束の下に、又之を貸したのであります。これを三四年繰返す間に元米六百石だけ舊い米を新しい米と連轉して入れ更へたのみならず、其六七百石の借米を常平倉に返したあとに、尙千石足らずの米が残りました。之を基本として一石に付三升といふ、今申せば利子かも知れぬがその時代ではほんの手數料であります、之を耗米と言つて居りますが、それだけをとつて飢饉窮乏の場合には之を貸しました。非常な災害の時には貸すので無く呉れることもあります。時と場合に依つては耗米を全免することもあるといふ様な制度を設け、村の長老を以て理事監事といふ者にいたして信用組合を作つて居ります。米と金錢との違ひはありますが、全く現在の信用組合の制度と違はないのであります。この朱